

國立臺灣大學文學院日本語文學系

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master's Thesis



佐藤春夫の台湾ものにおけるアイデンティティー
——「内地人」・「本島人」・「蕃人」の交錯を中心に——

Identity in Satō Haruo's Taiwan Works:
The Interplay of “Naichijin,” “Hontōjin,” and “Banjin”

莊秉承

Ping-Cheng Chuang

指導教授：洪瑟君 博士

Advisor: Se-Chun Hung, Ph.D.

中華民國 114 年 7 月

July 2025

謝 辭

韶光荏苒，我終於也順利完成了我的第一本著作「碩士論文」！進入碩士班一路以來，很幸運地得到許多貴人們的幫助，藉此我想透過本謝辭好好感謝他們。

首先，當然要特別感謝我的指導教授洪瑟君老師。猶記得四年前的碩士班入學口試，正是老師擔任我的主問面試官，入學以後也擔任了老師的教學助理，之後更是成為我碩論的指導教授。承蒙老師在研究過程中悉心指導，每次和老師討論碩士論文時，老師總是會提供我許多研究上的建議與見解，細心地給予指導。學術以外，老師也會傾聽我訴說生活中的煩惱，給予我理解與鼓勵。老師對研究的熱情與對學生的關懷，讓我深受感動。這篇論文的完成，離不開老師的支持與啟發，衷心感謝您。同時，也要感謝擔任我論文提案、口試委員的王嘉臨以及王憶雲老師。兩位老師都是我在大學時期的老師，王嘉臨老師是幫助我建立日文基礎的導師，王憶雲老師也是我曾擔任過教學助理班上的老師，兩位老師以專業的角度用心審閱我的論文，給予我許多提點，使我能夠順利完成碩士論文，不勝感激。

碩士班期間，也受到了許多師長們的照顧。每次遇到林慧君老師、朱秋而老師時，總是會熱心關心我的生活，感謝曹景惠老師推派我擔任畢業典禮的領證代表，范淑文老師、黃鈺涵老師、林欣慧老師等老師們的專業課程使我獲益良多。而在擔任教學助理期間，黃意婷老師、守時愛里老師的教學使我印象深刻，並得到了很多啟發，擔任教學助理的經驗絕對是我在碩士班期間數一數二快樂、富有成就感的時光。此外，身為一位待在日文系系辦最長久的工讀生，也要感謝黃媽、宛庭、宛琦、芸珈、銘琪職員們的照顧。當然也必須感謝大學時期曾秋桂老師、伍耿逸助教，正是有了他們的啟發，才使我有繼續攻讀碩士班的想法。謝謝這些師長們的照顧。

接著感謝水電行成員晨暉學長、沅華學長（老師）、禹錫（老師），總是鼎力相助的同門知穎、說到漂亮學姐一定要想到的敬文、同是蘭陽子弟的宇竣、水源好夥伴的子焜等同儕們，有你們的陪伴，使得原本以為會十分枯燥乏味的碩班生活，一點也不無聊。另外，當然也要謝謝我的十年老友呂昱慶，總是會不時地關心我，寫論文期間感到壓力大時就一起出去大吃一頓，在此特別致謝。

最後，我要感謝我的家人們。父親莊健偉先生、母親薛惠玲女士、妹妹莊翌暄，你們完美印證了家是永遠的避風港這句話。你們總說以我為榮，或許我沒有真正地當面和你們說過，「我才是以你們為榮」。當然還要感謝我的另一位家人，也就是我的伴侶周芷婕。有妳陪伴的日子裡，總是不缺少幸福和愛，謝謝妳出現在我的世界裡。謝謝我的家人們，我愛你們。

莊秉承 謹致 2025 夏

摘要

1920 年，佐藤春夫前往臺灣與福建旅行，並以此經驗為基礎創作了多篇紀行與小說。他的臺灣作品，是日本作家以「他者」的視角觀察殖民地社會的先驅性嘗試，在日本近代文學中占有獨特地位。本論文探討佐藤春夫的臺灣作品中，「內地人」「本島人」「蕃人」三個族群是如何被描寫，以及其身分認同在作品裡呈現出的樣貌。

第一章聚焦於〈女誠扇綺譚〉與〈殖民地の旅〉，探討其中「本島人」的認同問題。「本島人」被視為「支那人」或〈臺灣人〉，透過「支那」文化的痕跡以及與「內地人」之間的差異，作品中呈現出當時「本島人」複雜的自我意識。第二章透過〈日月潭に遊ぶ記〉與〈霧社〉中對「蕃人」的描寫，觀察其形象的轉變。「蕃人」一方面維持傳統，一方面也受到內地文化的影響而改變；雖然順從殖民統治，但內心深處卻隱含著矛盾與抗拒。第三章以〈旅びと〉與〈日章旗の下に〉為例，探討「內地人」認同的不穩定。作品中的「內地人」表面上處於優勢，實際上卻在殖民地的環境中背負孤獨、掙扎與不安，顯示出移民現實與帝國理想之間的落差。

綜觀佐藤春夫筆下的「內地人」「本島人」「蕃人」，可見殖民地社會中多層次而動搖不定的身分認同。本研究透過重新檢視這些描寫，試圖提出超越異國情調的新視角。

關鍵詞：佐藤春夫、殖民地臺灣、身分認同、他者、民族、內地人、本島人、蕃人

Abstract

This thesis examines how Satō Haruo's Taiwan works depict the three groups of “naichijin” (Japanese mainlanders), “hontōjin” (Taiwanese Islanders), and “banjin” (Taiwanese indigenous peoples), and how their identities are represented and negotiated within these texts. In 1920, Satō traveled to Taiwan and Fujian, experiences that inspired a series of travel essays and novels. His Taiwan works stand out as a pioneering attempt by a Japanese writer to observe colonial society from the perspective of the “Other,” giving them a distinctive place in modern Japanese literature.

Chapter One focuses on *Strange Tale of the Precepts for Women's Fan* and *Travels in the Colony*, analyzing the identity of the “hontōjin.” Positioned as either “Chinese” or “Taiwanese,” their self-awareness is shown through the lingering traces of “Shina” and their difference from the “naichijin,” revealing the complexity of their sense of self. Chapter Two turns to *Journey to the Sun Moon Lake* and *Musha*, exploring how depictions of the “banjin” change over time. They are portrayed as people who uphold their traditions while also being shaped by mainland culture; outwardly they submit to colonial rule, but inwardly they carry tensions and resistance. Chapter Three examines *Traveler* and *A Strange Story*, considering the instability of “naichijin” identity. Though outwardly privileged, these characters appear as complex figures struggling with loneliness, conflict, and anxiety in the colonial setting, exposing the gap between imperial ideals and the realities of migration.

Through these portrayals, Satō Haruo's Taiwan works illuminate the layered and unsettled nature of identity under colonial rule. By reexamining these texts, this study aims to offer a perspective that goes beyond mere exoticism.

Keywords: Satō Haruo, Colonial Taiwan, Identity, Otherness, Ethnic group, Japanese mainlanders, Taiwanese Islanders, Taiwanese indigenous peoples

要 旨

1920 年、佐藤春夫は台湾と福建を旅し、その経験をもとに多数の紀行文や小説を執筆した。彼の台湾作品は、日本人作家による「他者」としての視点から植民地社会を捉えた先駆的な試みであり、日本近代文学の中でも独自の位置を占めている。本論文は、佐藤春夫の台湾作品において、「内地人」「本島人」「蕃人」という三つの民族がいかに描かれ、それぞれのアイデンティティーがどのように捉えられているのかを考察するものである。

第 1 章では、「女誠扇綺譚」と「殖民地の旅」における「本島人」のアイデンティティーを考察した。「本島人」は「支那人」あるいは〈台湾人〉として位置づけられ、「支那」の痕跡や「内地人」との差異を通して、当時の「本島人」の複雑な自己認識が描かれている。第 2 章では、「日月潭に遊ぶ記」と「霧社」に描かれた「蕃人」の姿を通して、そのあり方の変化を考察した。「蕃人」は伝統を守りながらも、内地の文化に影響されて変わっていく存在として描かれ、支配に従いながらも、内面では葛藤や抵抗を抱えていたことが読み取れる。第 3 章では、「旅びと」と「日章旗の下に」を通じて、「内地人」のアイデンティティーの揺らぎを考察した。作品に登場する「内地人」は、表面的には優位な立場にあるように見えるが、実際には植民地という場で孤独や葛藤、不安を抱えた複雑な存在として描かれている。これにより、当時の移民者たちの現実や、帝国の理想とのずれが浮き彫りになっている。

佐藤春夫の台湾作品に描かれる「内地人」「本島人」「蕃人」は、植民地支配下で揺らぎながら形成される多様なアイデンティティーを示している。本論文では、その再検討を通じ、異国情緒を超えた新たな視座を提示する。

キーワード：佐藤春夫、植民地台湾、アイデンティティー、他者、民族、内地人、本島人、蕃人

目 次

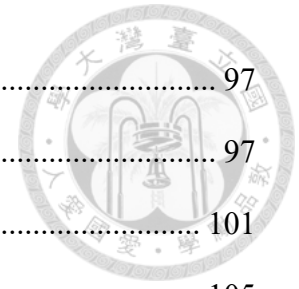


謝 辭.....	I
摘 要.....	II
ABSTRACT	III
要 旨	IV
目 次.....	V

序 論.....	1
第 1 節 研究動機.....	1
1. 作家・佐藤春夫の生い立ちと台湾・福建旅行	1
2. 1920 年代前後台湾の時代背景	3
第 2 節 先行研究.....	5
1. 「女誠扇綺譚」におけるエキゾチシズム	6
2. 「霧社」における植民者のまなざし	8
3. 「日章旗の下に」における大日本帝国の「包摂」と「排除」	11
第 3 節 問題意識、研究方法及び研究範囲.....	13
1. 問題意識	13
2. 専門用語の定義について	14
3. 研究方法及び研究範囲	20
第 4 節 論文構成.....	23
第 1 章 「女誠扇綺譚」と「殖民地の旅」における「本島人」のアイデンティ ティー.....	28

第1節	はじめに.....	28
第2節	日本人としてのアイデンティティーから見る「支那人」像.....	29
第3節	「異国情緒」から「本島人」が持つアイデンティティーの正体へ..	34
1.	「女誠扇綺譚」における「荒廃の美」から「支那趣味」へ.....	34
2.	「漸進的内地延長主義」のもとで.....	43
3.	「殖民地の旅」における「本島人アイデンティティー」.....	51
第4節	おわりに.....	60
第2章	佐藤春夫の「蕃人」認識から見る「蕃人」のアイデンティティー..	62
第1節	はじめに.....	62
第2節	「日月潭に遊ぶ記」における「蕃人」描写.....	63
第3節	「霧社」における「蕃人」描写.....	68
1.	「蕃人」像について.....	68
2.	「蕃人」の教育問題について.....	76
3.	「M氏」との談話.....	78
第4節	おわりに.....	82
第3章	移民政策から見る「内地人」のアイデンティティー.....	85
第1節	はじめに.....	85
第2節	日本統治時代初期における移民政策の形成.....	86
1.	農村問題と人口圧力—移民政策の国内的背景.....	87
2.	植民地支配と移民政策の戦略的意義.....	88
3.	国際情勢と移民政策の変容.....	89
第3節	「旅びと」における「内地人」移民者のアイデンティティー.....	90
第4節	「日章旗の下に」における「内地人」移民者のアイデンティティー.....	

.....	97
1. 「松原夫婦」像	97
2. 「主人」像	101
第5節 おわりに.....	105
結 論	107
テキスト及び参考文献	111



序 論



第 1 節 研究動機

1. 作家・佐藤春夫の生い立ちと台湾・福建旅行

佐藤春夫（1892—1964）は明治 25 年（1892）に和歌山県新宮町の医者之家に生まれた。佐藤家は代々医術を受け継いできたが、父の豊太郎は文芸にも造詣が深かった。また、新宮町には大石誠之助や西村伊作、沖野岩三郎などの先進的な文化人が活発に活動していたおかげで、彼らの影響を受け、佐藤春夫は新宮中学校を卒業してから上京し、生田長江や与謝野寛、晶子夫婦に師事した。その後、『スバル』『三田文学』に評論や詩を発表し、大正 8 年（1919）に小説「田園の憂鬱」で作家としての地位を築き、文壇で注目を浴びる存在となった。

明治 28 年（1895）の日清戦争終結に伴い、下関条約が締結され、台湾は植民地として日本の領土の一部になり、日本にとって初めての海外植民地となった。すると、台湾は公式的に日本統治時代に入り、内地（日本本土）との交流も次第に盛んになった。多くの作家が台湾を訪れ、当時植民地である台湾の生活様式や風景などを作品に描写した。その中で、佐藤春夫は特に注目される作家として挙げられる。

大正 9 年（1920）、恋愛で失意のどん底にいた佐藤春夫は中学時代の友人で、台湾南部の高雄で歯科病院を営んでいた東熙市に誘われ、台湾へ旅行しに came。台湾に到着すると、東熙市の紹介により、当時台北博物館の館長代理であった森丑之助の知遇を得た。そして、森丑之助の提案でまず台湾海峡を渡り、福建を二週間ほど旅行した後、台湾本島に戻り、森丑之助と当時の民政長官であった下村宏の助言に従い、約三ヶ月にわたる島内旅行を始めた。彼は主に「本島人」が暮らしている台湾西部の平原を南から北まで遊歴し、山地では日月潭や霧社など所謂台湾原住民が住んでいる地域を行脚した。そのため、佐藤春夫の台湾旅行関

係の作品では、「本島人」と「蕃人」が頻繁に登場する。彼は自分の作品を通して、「内地人」、旅行者、言わば「他者」という視点から、植民地台湾で見た風景や台湾在住の人々に対する考えを表現した。

台湾が日本の植民地になった後、日本人は台湾を「南方」に対する想像を現実で確かめる最初の場所と位置付けるのみならず、「日本近代化の実験場」とも見做すようになった。佐藤春夫は台湾を訪れた日本人作家の先駆者として、当時の台湾の町風景、山地に住む「蕃人」の生活、台南の古都の廃墟に漂う「荒廃の美」を詳細に記録し、「異国情緒」に満ちた作品を創作した。そのようなクロスカルチュラルな想像に富んだ作品は、多くの日本人に植民地に対する新たな視点を提供するだけでなく、その後植民地台湾を描写する日本人の後輩作家たちに南方への憧憬を呼び起こし、日本人作家の台湾作品の典範となった。島田謹二は佐藤春夫の「女誠扇綺譚」に対し、下記のように絶賛している。

とにかく台湾人の民族的特性を意識して書こうとし、作品の背景に意味あらしめえたのは文学史的に新領土を開拓せるものといわねばならぬ。こういう二点からいえば、この物語は台湾に取材せる散文小説のうち殆んど空前にして唯一というべく、またその文学的価値からいっても断然群れを抜いて王座に就いていると言うべきである¹。

さらに、島田氏は「女誠扇綺譚」を「一種の文明批評を加へようとした外地紀行の典型的佳作である」²と評し、「素材と取扱いの二方面から見て典型的な異国情趣（エグゾチスム）の文学なのである」³とも評価した。以上のように、佐藤春夫の台湾旅行関係の作品は異国情趣の文学として日本近代文学の分野におい

¹ 初出は1939年の『台湾新報』であるが、本論文は下記の単行本から引用した。
島田謹二(1995)「佐藤春夫氏の『女誠扇綺譚』」『華麗島文学志』、明治書院、p.382

² 同注1、p.355

³ 同注1、p.363

て貴重な位置を占めていると言えよう。



2. 1920 年代前後台湾の時代背景

明治 28 年（1895）4 月 17 日、日清講和条約（下関条約）が調印され、台湾及び澎湖島は日本に永久的に割譲されることが決定された。同年 5 月 13 日、日本政府が条約を批准し、台湾の領有が確立した。これにより、台湾は 212 年に及ぶ清国の統治から脱し、正式的に帝国日本の一部となった。しかし、当時台湾在住の官吏や士紳、そして本来清国に統治されていた台湾の住民は日本への割譲に強く反対し、日本軍の上陸に対して頑強に抵抗した。日本軍が上陸する直前の「台湾民主国」を皮切りに、日本軍が上陸した以後も、武装闘争による抗日運動が次第に展開されていった。その中で、特に大正 4 年（1915）に起きた「西来庵事件」は最も大規模な武装蜂起であった。しかし、それも「本島人」による最後の抗日武装蜂起となった。「西来庵事件」以降、「本島人」が抗日武装蜂起を行わなかった理由について、若林正丈（2001）は次のように、「歴史的要因」と「階級的要因」に分けている。

歴史的要因とは、植民地化以来一九一五年の西来庵事件までくりかえし試みられてきた武装決起による日本支配の転覆企図がことごとく圧倒的に優勢な日本の軍事力の前に、孤立したまま鎮圧されてきたことであった。

（中略）

階級的要因とは、右に述べたように、日本権力により高率小作料からの蓄積を保証され、日本植民者本位の開発政策へ従属する形ではあれ、その受益者層に属していたことである⁴。

⁴ 若林正丈(2001)「大正デモクラシーと台湾議会設置請願運動」『台湾抗日運動史研究 増補版』、研文出版、p.42

要するに、歴史的要因では、西来庵事件以降、「本島人」は日本政府によって軍事的に圧倒され、武力での反抗が困難であるという認識が広まっていた。一方、階級的要因では、「本島人」の有力者層は日本政府から経済・社会的地位が保証され、日本に従属する傾向があった。それゆえ、西来庵事件以降の台湾社会では「改良主義的」⁵な政治・社会運動が展開される姿勢が取られていたと言える。

一方、第一次世界大戦期には、当時のアメリカ大統領ウッドロウ・ウィルソンが提唱した「民族自決主義」をはじめ、世界各地で民族意識が高まり、様々な運動が展開された。東アジアでは、大正8年（1919）3月1日に当時日本の植民地であった朝鮮で起きた「三・一独立運動」や同年5月4日に中国で行われた「五・四運動」がその例として挙げられる。当時の世界的風潮は「民族自決」を求めることであり、台湾でも帝国日本に対して自らの権利を主張する雰囲気生まれた。その「民族自決」の機運に呼応し、日本本土では「大正デモクラシー」が進展し、台湾総督府もそれに応じて、統治方針を変えた。総督府の官制改正により、民政長官の職名が「総務長官」と改称され、大正8年（1919）10月29日に、田健治郎が植民地台湾の初代文官総督として任命され、台湾は正式的に「内地延長主義」の時代に入った。

翌年の大正9年（1920）の夏、佐藤春夫は台湾本島を訪れた。「殖民地の旅」にはその記述を残しただけではなく、河原功の史実考証によれば、佐藤春夫は9月30日の前後に台中に到着し、林献堂⁶と対面したことがある⁷。その後、約四

⁵ 同注4、p.43

一般的には、急激な変革によらず、漸進的に社会を改革・改良しようとする立場をいう。
"改良主義"、日本大百科全書（ニッポニカ）、JapanKnowledge、
<https://japanknowledge.com>、(参照 2024-11-20)

⁶ 林献堂は、台湾の実業家、民族運動家。光緒7年生まれ。生家は台中県の大地主。銀行などを経営するかたわら、梁啓超の影響をうけ、台湾議会設置請願運動、民族主義団体の台湾文化協会の設立などを指導する。戦後国民政府とあわず、昭和24年事実上日本に亡命。昭和31年9月8日東京で死去。76歳。名は朝。号は灌園。）

"りん-けんどう【林献堂】"、日本人名大辞典、JapanKnowledge、
<https://japanknowledge.com>、(参照 2024-05-03)

⁷ 河原功(1997)「佐藤春夫『殖民地の旅』の真相」『台湾新文学の展開—日本文学との接点』、研文出版、p.16

ヶ月後、台湾抗日運動史上で非常に重要な役割を果たした「台湾議會設置運動」が始まり、その中心人物はまさに林獻堂であったことから、佐藤春夫が台湾を訪れた時点は「都合の良い」と言えよう。

佐藤春夫は 1920 年代に台湾を訪れ、日本統治時代の台湾を題材にした作品を描いた先駆者とされる作家である。彼の台湾関連作品は日本人作家として「他者」の視点から描かれ、日本文壇で高い評価を得て、その後の作家たちにも大きな影響を与えた。1920 年代は、台湾での約 50 年にわたる日本統治時代において非常に重要な時期であった。世界中で民族自決の機運が高まる中、当時の台湾社会もそれに相応な反応を示していた。佐藤春夫の台湾関連作品では、当時の台湾の風景や事物だけでなく、台湾在住の各「民族」⁸についても詳細に描写されている。台湾は複数の「民族」で構成されており、現在の台湾社会では「民族」に関する問題が未だ解決されておらず、非常に複雑な問題となっている。日本近代文学を研究する台湾人として、論者は佐藤春夫の台湾関連作品に触れ、彼が描いた台湾に惹かれ、物語の内容に興味を持つようになった。百年前の日本人作家たちは、どのように「他者」の視点から当時台湾にいる「内地人」「本島人」「蕃人」を捉えていたのか。これまでの佐藤春夫の台湾関連作品の研究では、この点についてあまり論じられていなかったため、作品に隠れた歴史を振り返ることで、佐藤春夫の台湾に関連する作品をより深く探究し、議論を展開したい。

第 2 節 先行研究

本論文では、佐藤春夫の台湾ものにおける各民族のアイデンティティを考察する。その中で、「女誠扇綺譚」は「本島人」を中心とした重要な作品に対し、「霧社」は「蕃人」像を検討する際に常に挙げられる作品である。さらに、「内

⁸ 同じ文化を共有し、生活様態を一にする人間集団。起源・文化的伝統・歴史をともにすると信ずることから強い連帯感をもつ。形質を主とする人種とは別。
"みんな-ぞく【民族】"、日本国語大辞典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com/>、
(参照 2024-11-30)

地人」のアイデンティティを論じるにあたっては、特に「内地人」移民者を中心に描かれた作品「日章旗の下に」に関する考察が、有効な分析枠組みの一つとして挙げられる。そのため、先行研究で主にこの三つの作品に関する論説を取り上げる。

1. 「女誠扇綺譚」におけるエキゾチシズム

「女誠扇綺譚」は大正 14 年（1925）5 月に雑誌『女性』に発表され、当時日本の植民地である台湾の古都台南を舞台として、民間伝説と現実の事件の交錯を描く探偵小説およびゴシック小説である。この作品の発表直後に橋爪健（1925）は次のように論評している。

現世風な旅愁と怪異な幻想とが程よく抱きあつてゐる。作者はポオのまへに自ら卑下しながらも、恐らくその「アツシヤ家の崩壊」に対抗すべき「沈家の没落」を歌はうといふ旺んな自恃をもちつゝ筆を進めたに違ひない。荒廃の美をうつすその歴史感と叙情味と、紀行風なその低回味と、異国情調と伝説と現前の風物とを錯絡たらしめるその怪奇小説的構想と、これら三者相待俟つて幻視一如の近代的三昧境を描出してゐる。恐らく今月中のいや最近での佳篇であらう⁹。（下線部分は論者による。以下同様。）

最後の一文から、橋爪氏が佐藤春夫の「女誠扇綺譚」に非常に称賛していることが分かる。それと同時に、橋爪氏はこの作品を「旅愁・幻想・異国情調」¹⁰の文学作品と位置づけているが、この評論の隅々からは、台湾が単に「内地人」を異国情緒で満足させる場所に過ぎないというイメージが反映されていることが窺える。

⁹ 橋爪健(1925)「旧さの中の新しさ 五月創作評」『読売新聞』、1925.5.7

¹⁰ 同注 9

さらに、島田謹二（1939）も「女誠扇綺譚」を「台湾に取材せる散文小説のうち殆んど空前にして唯一というべく、またその文学的価値からいっても断然群れを抜いて王座に就いている」¹¹と称賛した。その上で、島田氏は「素材と取扱ひの二方面から見て典型的な異國情趣（エグゾチスム）の文學なのである」¹²と述べている。島田氏の論文によれば、「異国情緒の文学」という視点から台湾に関する作品が解釈され、現在でも「女誠扇綺譚」に言及する際には、読者達はその視点を受け継いできたということである。

一方、藤井省三（1998）は「女誠扇綺譚」を読んだ後、「台湾ナショナリズム」という要素に気づき、橋爪健の説を「漢族が植民し、今はその台湾人の上に帝国主義国家日本が君臨しているという植民地台湾の状況が一切抜け落ちているのである。また佐藤が台湾ナショナリズムに示した強い関心と共感は一顧だにされない」¹³と評価し、島田氏と橋爪氏と全く違う論点を提出している。

本来台湾ナショナリズムへの友愛にあふれるまなざしによって書かれた「女誠扇綺譚」に対し、日本の文化界は異国情趣の文学という解釈を与えつづけてきた。異国情趣という“宣伝”の思考自体が台湾総督府の文化戦略から出たものであるにせよ、それを受容し増幅しつづけてきた知の制度は、やはり日本版オリエンタリズムそのものであったといわざるを得まい¹⁴。

藤井氏は「女誠扇綺譚」での「私」と世外民の立場から論説を展開し、「台湾ナショナリズムへのまなざし」が作品中に内包されていると指摘している。

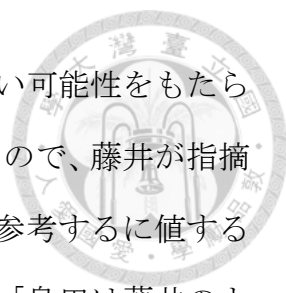
次に、邱若山（2002）も島田氏の「異国情緒」論に対して弁証を展開している。

¹¹ 同注 1、p.382

¹² 同注 1、p.363

¹³ 藤井省三(1998)「大正文学と植民地台湾——佐藤春夫『女誠扇綺譚』」『台湾文学この百年』、東方書店、p.94

¹⁴ 同注 13、p.102



邱氏はまず、「藤井の論述は確かに『女誠扇綺譚』味読に新しい可能性をもたらしたが、島田論文はテキストに対する全般的な分析を行ったもので、藤井が指摘した点以外にも、まだ『女誠扇綺譚』を味読するのに、大いに参考するに値する考察がなされている」¹⁵と指摘している。そして、邱氏もまた「島田は藤井のように作品から作者の〈台湾ナショナリズムへのまなざし〉を発見できなかったが、〈台湾人の民族的特性を意識して書こうとし〉ている作者の姿勢を見ていたのである」¹⁶と論じている。しかし、邱氏は〈台湾ナショナリズムへのまなざし〉や〈台湾人の民族的特性〉についてはさらに深く論じておらず、ただそれに対して、「藤井の論証に問題がないとは言えない」と述べている。その理由はやはり「異国情緒の文学」という「女誠扇綺譚」論の系譜の継承と関わっているのである。

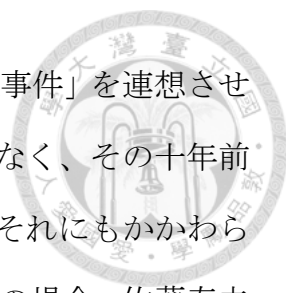
以上のように、先行研究では、〈台湾人〉の民族的特性を意識して書こうとしている作者の姿勢が見られるにもかかわらず、「女誠扇綺譚」は「異国情緒の文学」として扱うべきだという意見が多い。また、藤井の説を除けば、「女誠扇綺譚」を「台湾ナショナリズム」の視点から論じる研究は未だに存在しないと言わざるを得ない。しかし、藤井の論では作品全般についてテキスト分析を行わなかったため、より深く論究する余地があると考えられる。

2. 「霧社」における植民者のまなざし

漢民族を中心に描写されている「女誠扇綺譚」から見た「異国情緒」に対し、もう一つ注目すべきテーマは、山地側から感じられた「異国情緒」であり、また、そこから生み出した「蕃地問題」である。佐藤春夫の蕃地をテーマにした作品として、「日月潭に遊ぶ記」と「霧社」という両作が挙げられる。特に「霧社」は、

¹⁵ 邱若山(2002)『『女誠扇綺譚』とその系譜——ロマン主義文学の本質からアプローチ——』『佐藤春夫台湾旅行関係作品研究』、致良出版社、p.166

¹⁶ 同注 15、p.175



その作品名から、台湾抗日運動史上の重要な事件である「霧社事件」を連想させることがある。しかし、「霧社」は実際には「霧社事件」ではなく、その十年前（1920）に起きた「サラマオ事件」を題材にした作品である。それにもかかわらず、現在、霧社事件に関連する文学作品を論じる際には、多くの場合、佐藤春夫の「霧社」も検討の範疇に含められる。例えば、尾崎秀樹（1971）「霧社事件と文学」¹⁷や河原功（1981）「日本文学に現われた霧社蜂起事件」¹⁸といった論考のように、題名にはともに「霧社事件」と記されているが、実際に「サラマオ事件」を題材にした「霧社」についての論考も内容に納めた。尾崎氏は「霧社」について、以下のように論じている。

作者は蕃童教育所をまわったおりの見聞として、日本語による数や量の表現に触れ、台湾で一番大きな町は台北、日本で一番大きな町は東京、日本で一番偉いお方は天皇陛下、台湾で一番偉い人は総督閣下、という組みあわせがときどき混乱して台湾で一番偉い人は東京、日本で一番大きな町は天皇陛下と子どもたちが答える難しさをスケッチしていた。これはねず・まさしもいうように、天皇制に象徴される植民地統治のたくみな戯画になっているではないか¹⁹。

上述の如く、「霧社」には蕃童教育所での見聞が描かれた。当時の「蕃人」の子供たちに対して、日本語の勉強は必要だが、困難なのである。そこから見ると、総督府の植民地統治方針には実は問題があることを暗示していたと考える。

また、河原氏は「霧社」に関し、「春夫の目は、傍観者の域を脱し、この『霧

¹⁷ 尾崎秀樹(1971)「霧社事件と文学」『旧植民地文学の研究』、勁草書房

¹⁸ 初出は、河原功(1981)「日本文学に現われた霧社蜂起事件」『台湾霧社事件—研究と資料一』、社会思想社であるが、本論は河原功(1997)「日本文学に現われた霧社蜂起事件」『台湾新文学の展開—日本文学との接点』、研文出版を引用している。

¹⁹ 同注 17、p.235

社』という紀行文の中でも、台湾における植民者と被植民者の姿を冷徹な目で追究し、描いているのである」²⁰と主張している。「霧社」にそのような当時の日本政府に対する批判が存在しているからこそ、この作品を収録した『霧社』は、当時の台湾で禁書とされた。

そして、邱若山（2002）は「霧社」について、「サラマオ事件の見聞を記して、作家の鋭い目で〈蕃地〉に実情を見つめ、〈理蕃〉の問題を提起して『霧社』は、歴史記述に見えないことを沢山提示し、事件の背後に躍動する人間の姿と時代の脈動を鮮明にキャッチした唯一の文学作品として、貴重である」²¹と高い評価を与えた。

さらに、黄翠娥（2010）は「霧社」に関して下記のように論じている。

作者は蕃界の山川と蕃人の生活を見学するため、集々街から日月潭を経て埔里社にたどり着き、蕃情不穏の霧社から能高山に入っていく。この作品で、作者はサラマオ蕃人の蜂起事件による厳しい環境に分け入りつつ、植民政府の対策、原住民の文化、そして漢人に対する見方などを、日記風に語っており、その中で、作者なりの思想を行間ににじませるのである²²。

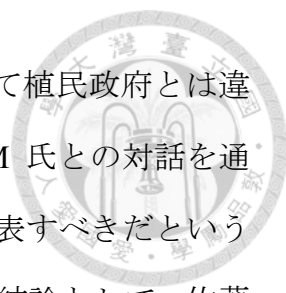
黄氏の説では、同じく作品に潜んでいる歴史性を提示し、蕃情は実は「不穏」であったことを指摘している。そして、日記の形式でなされた作品の中では作者自身の考え方が隅々見られ、さらに、原住民のみならず、植民者であった「内地人」側と漢民族に対する佐藤の見方も窺える。また、「霧社」の結末の『台湾蕃族誌』の著者である M 氏²³の発言について、黄氏は「M 氏の発言にかなりの紙

²⁰ 同注 18、p.78

²¹ 邱若山(2002)「『霧社』について——文学作品と歴史記述の間——」『佐藤春夫台湾旅行関係作品研究』、致良出版社、p.156

²² 黄翠娥(2010)「佐藤春夫の批判精神—日本統治時代の台湾ものを中心に—」《日本語日本文学》第三十五輯、輔仁外語學院日本語文学系、p.152

²³ 森丑之助のことを指す。



幅が費やされていることから考えれば、作者が原住民に対して植民政府とは違う考えを持っていることを現している」と主張し、さらに「M 氏との対話を通して、蕃人の文化の中の隠された、あるいは誤解された一面を表すべきだ」という作者の合理主義的な思惟が入っている」²⁴と論じている。その結論として、佐藤春夫がこの作品で植民地政策に対する批判を垣間見ることができると主張している。

邱氏も黄氏も「霧社」での歴史的な描写の豊富さが提示され、当時の「蕃地」には実は「不穏」の問題も存在したことを述べている。しかし、「蕃地」の実情や「蕃情」不穏の描写の背後には、「理蕃政策」によって「蕃人」たちが「生蕃」と「熟蕃」に分化され、異なる運命をたどった結果、民族的な「アイデンティティ」の形成に差異が生じたと推察される。その「蕃人」としてのアイデンティティにはどのような違いが存在しているかを考察するために、本論文では、佐藤春夫が当時の「蕃人」に対する描写を分析し、彼の台湾作品における「蕃人」のアイデンティティに焦点を当てて考察したい。

3. 「日章旗の下に」における大日本帝国の「包摂」と「排除」

「日章旗の下に」は、1928 年 1 月に雑誌『女性』で「奇談」として発表され、後に単行本『霧社』に収録される際に改題された。この改題は、1930 年の霧社事件や 1932 年の満州事変など、当時の「大日本帝国」のナショナリズムの高まりと関係があると考えられる。言い換えれば、「日章旗の下に」は帝国主義、植民地主義と無関係な作品とは言えない。張文聰（2020）は「日章旗の下に」の改題背景に着目し、当時の政治的・社会的コンテクストの中でこの改題が持つ意味を解明している。さらに、「日章旗の下に」における語りの構造を詳細に検討し、この家の主人の視点が、帝国のナショナリズムと植民地統治への批判的視座を

²⁴ 同注 22、p.153



含んでいる可能性を指摘している。

また、張氏は物語の中心に据えられた松原夫婦の出自や移動の歴史を丹念に考察し、彼らが大日本帝国の枠組みにおいてどのように「包摂」と「排除」を経験したのかを明らかにした。松原夫婦の物語は、単なる「植民者—被植民者」という二元的な構図ではなく、植民地台湾内部における階層的な関係性や、ジェンダー・階級・地域性による多層的な力学を含んでいることが示されている。特に、松原の妻の過去を「からゆきさん」との関連で考察し、彼女が植民地台湾において「再国民化」を果たす過程を検証した。

さらに、「日章旗の下に」における「松原朝顔」という植物の象徴的な役割にも注目し、台湾という植民地における文化的・生態的な「越境」と「定着」の問題を提示している。特に、外来種として台湾の風土に根付いた松原朝顔が、日本のナショナリズムとどのように関わるのかを探り、植民地経営の論理が持つ矛盾を明確にした²⁵。

以上のように、張氏の論説は、確かに植民地文学研究に新たな視点をもたらしており、「日章旗の下に」を単なる植民地紀行文学としてではなく、帝国のナショナリズムと植民地社会の複雑な力学を映し出す作品として再評価するものであり、今後の研究において重要な基盤となる。しかしながら、当時の帝国移民政策から「内地人」移民者達のアイデンティティーについての分析はほとんど見受けられないため、本論文は、張氏の説を踏まえつつ、特に「内地人」移民者のアイデンティティーという視点から「日章旗の下に」をさらに掘り下げ、植民地台湾における「内地人アイデンティティー」の構築や、語りの形式が果たす役割について検討する。

²⁵ 張文聰(2020)「大日本帝国の〈包摂〉と〈排除〉：佐藤春夫の『日章旗の下に』をめぐって」『JunCture：超域的日本文化研究』第11号、『JunCture：超域的日本文化研究』編集委員会、p.108-122



第3節 問題意識、研究方法及び研究範囲

1. 問題意識

「アイデンティティ」とは自分が自分に対する認識であり、範疇をより広くすれば、「アイデンティティ」とは自分がどの民族に属するのか、言わば「帰属意識」を判断する重要な基準である。日本統治時代の台湾は、新しい思想の流入に従い、まさに人々が徐々に「アイデンティティ」を意識し始めた時代であった。人々が自らの「アイデンティティ」を理解し始め、最終的には「ナショナリズム」に目覚めるに至ったのである。佐藤春夫の台湾ものには、その現象について反映されている。当時台湾における各民族が自らの「アイデンティティ」をどのように認識していたのかを分析することを通じて、「アイデンティティ」が日本統治時代の台湾に持つ意義を再認識するだけでなく、当時の政策について再考することも可能になる。

前述したように、従来の佐藤春夫の台湾関係作品についての研究は島田謹二の「異国情緒の文学」論に沿い、異国情緒（エキゾチシズム）または支那趣味に着目した研究が大部分を占めており、系譜となっている。一方、近年、佐藤春夫の台湾作品を植民地政策への批判や社会的関心の表出として捉え直す研究が行われている。例えば、阮文雅（2009）は佐藤春夫の「旅びと」と中村地平の「蕃界の女」をテキストとして取り上げ、植民者と被植民者の間に潜む自己と他者の問題意識から、それぞれに表れる「受動的な身体」の存在と意味を検討し、植民者の自己がいかにして被植民者によって定義されているのかを明らかにしてきた²⁶。しかし、阮氏の論は主に「旅びと」という作品を同時代の日本人作家の作品との比較研究を中心としており、佐藤春夫の他の台湾関連作品についてはあまり触れていない。

「アイデンティティ」という視点から佐藤春夫の台湾ものを分析する研究

²⁶ 阮文雅(2009)「南方憧憬の作品における他者—佐藤春夫「旅びと」と中村地平「蕃界の女」をめぐって—」《東呉日語教育學報》第32期、東呉大學日本語文學系、p.251-279



は、藤井省三の論説以外、管見の限りでは、大概欠如している。それに、藤井氏の説では単に「本島人」を主軸とした「台湾ナショナリズム」を提起し、当時の台湾にいる各民族に分けて検討しないため、彼ら各自が持っている「アイデンティティー」はまだ討論する余地がある。一方、「霧社」の先行研究で論じたように、「蕃地」の実情や「蕃情」不穏といった描写の背後には、「蕃人」たちは「理蕃政策」のもとでそれぞれ異なる運命をたどったという背景があると考えられる。その違いはやがて民族的な「アイデンティティー」の形成においても差異をもたらしたと推察される。したがって、佐藤春夫による当時の「蕃人」表象を手がかりに、彼の台湾に関する作品に描かれた「蕃人」のアイデンティティーに注目し、そこに見られる差異や特徴について考察する必要がある。それに加えて、「日章旗の下に」には当時の帝国移民政策から「内地人」移民者達のアイデンティティーもまた検討する余地があると考えている。以上を踏まえて、「アイデンティティー」という視点から見る佐藤春夫の台湾ものへの究明はまだ十分だとは言えない。

それ故、日本統治時代の「内地人」、「本島人」、「蕃人」のアイデンティティーに着目し、テキストを実際に分析することで、佐藤春夫が「他者」として「内地人」、「本島人」、「蕃人」をどのように捉えているのかを研究の主軸とする。また、補足として史料を使用し、佐藤春夫の台湾ものにおけるアイデンティティーをより深く探求することを本研究の課題としたいと考えている。

2. 専門用語の定義について

本論はアイデンティティーの視点から、佐藤春夫の台湾ものを分析するため、まず、本論文で用いるアイデンティティーに関わる専門用語と言葉遣いについて定義する。



2.1. アイデンティティー

「アイデンティティー」とは、「他とはっきりと区別される、一人の人間の個性。また、自分がそのような独自性を持った、ほかならぬ自分であるという確信。組織、集団、民族などにも用いる。自己同一性」²⁷ということである。つまり、「アイデンティティー」とは自分が自分に対する認識であり、他人と区分できる機能を持っているものである。より深く掘り下げて言えば、同じ集団においても、他のメンバーと違う「アイデンティティー」を持つことも常に存在している。しかし、「アイデンティティー」は組織同一視にも使用可能である。本論文の場合では、「アイデンティティー」は常に「民族」と繋がるため、「本島人アイデンティティー」、「蕃人アイデンティティー」や「内地人アイデンティティー」という形式で表現する。

2.2. 民族

「民族」とは、一般的に「同じ文化を共有し、生活様態を一にする人間集団。起源・文化的伝統・歴史をともにすると信ずることから強い連帯感をもつ」²⁸集団を指すことである。言わば、「文化」の繋がりを強調する団体である。なお、「文化的指標」にはまた土地、血縁、言語などの共有意識や、宗教、社会組織、経済生活、その他の生活様式という様々な指標がある。さらに、「エスニシティを基盤とし、人々が一つの国或いはそれに準じる政治的単位を持つべきだという意識が広まった時、その集団のことを『民族』と呼ぶことにする」²⁹という論説も存在しているため、「民族」を定義する際に指標によって多様な基準を持つと言える。本論文の場合、一般的な定義で、つまり同じ文化、起源、歴史を持つ

²⁷ "アイデンティティ", 日本国語大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2024-11-30)

²⁸ "みん-ぞく【民族】", 日本国語大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2024-11-30)

²⁹ 塩川伸明(2008)『民族とネイション——ナショナリズムという難問』, 岩波書店, p.5

人々に同じ「民族」を呼ぶことにする。



2.3. ナショナリズム

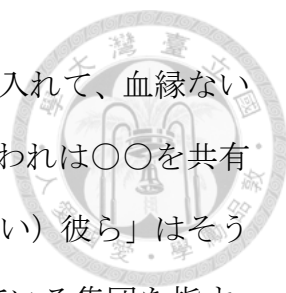
ナショナリズムという概念は曖昧模糊としており、その定義に関しては多岐にわたるが、ナショナリズムの代表的な研究者であるアーネスト・ゲルナーは「政治的な単位と文化的あるいは民族的な単位を一致させようとする思想や運動」³⁰と定義している。

さらに、ナショナリズムをより細かく分類すると、一般的にはナショナリズムを、エスニックナショナリズムとシビックナショナリズムに分けるという対概念の分類方法がよく挙げられる。前者は「民族主義」とも言い換えられる。陶山宣明（2009）の説では、エスニックナショナリズムに「そのエッセンスは自分の帰属するネーションは生まれながらにして決定されていて、変更することではできないとする、血縁関係を絶対視する文化人類学的な概念である」と解説され、またシビックナショナリズムについては、「後天的に民主主義の価値を学ぶことにより賛同者は誰でも参加できるとする、極めて政治社会学的な概念である」³¹と説明を加えている。そうすると、エスニックナショナリズムとシビックナショナリズム、この両者を区分する決定的な差異というのは、同じグループの中の人達が互いに「血縁関係」があるかどうかというのである。前者は「血縁」を強調するのであり、後者は「政治」的意味を含めて考えるのである。

また、ナショナリズムを定義する時に常に浮かび上がった問題というのと、「エスニシティ」をどのように捉えるかということである。塩川伸明（2008）は「エスニシティ」という概念に対して下記のように定義している。

³⁰ E. ゲルナー著・加藤節訳(2000)『民族とナショナリズム』、岩波書店、p.1

³¹ 陶山宣明(2009)「アイルランドとケベックのナショナリズム比較」『The Journal of American and Canadian Studies アメリカ・カナダ研究』26号、Sophia University, Institute of American and Canadian Studies、p.109



この言葉は、とりあえず国家・政治との関わりを括弧に入れて、血縁ないし先祖・言語・宗教・生活習慣・文化などに関して、「われわれは〇〇を共有する仲間だ」という意識——逆にいえば、「(われわれでない) 彼ら」はそうした共通性の他にある「他者」だという意識——が広まっている集団を指す、と考えることにする³²。

上記の通り、「エスニシティ」はまずあるグループの中の人達が互いに「何か」の繋がりがあり、「何か」を共有している同士ということを意識し、また相対の「私達ではない」「私達と同じではない」という思想が徐々に現れている集団ということである。しかし、その「何か」は既定の答えがない。血縁、言語、宗教もしくは習慣などの内にどれを重視するかは、場合によって異なる。重要なことは当事者自身がどのように意識しているため、単一指標による定義は困難である。すると、塩川氏はさらに「どのような集団がエスニシティに該当するかも一義的に確定できるものではなく、多義的かつ可変的である」³³と主張している。

以上をまとめると、最後は「ナショナリズム」という概念の定義に戻る。「ナショナリズム」この概念自体は極めて多様な現象であり、そして他の政治イデオロギーと自在に結合する場合も常に見られる。また、「エスニシティ」もやや抽象的な概念に言及する故に、「ナショナリズム」は明快な定義をつけられなく、「広義」に解することも可能になる。今回の研究範疇を例とし、前述の「エスニックナショナリズム」と「シビックナショナリズム」両者の定義をも踏まえ、場合によって解釈できていると思っている。

2.4. 「本島人」

佐藤春夫の台湾物では、「本島人」を主要人物にする作品というと、探偵小説

³² 同注 29、p.3-4

³³ 同注 29、p.5

或いはゴシック小説と称される「女誠扇綺譚」と、台湾西部を遊覧する見聞録としての「殖民地の旅」が挙げられている。しかし、「本島人」は一体誰を指しているのか。

「本島人」とは、日本統治下の台湾において、統治者たる日本人側が使用した台湾の漢族系住民への呼称³⁴ということである。さらに、若林氏の説明では、漢族系住民は、日本語（当時「国語」と呼ばれた）教育などを通じて、日本人に対して従属的な「同化」を迫られた。ここに、「内地人」（当時台湾にいた日本人はこう呼ばれた）を頂点とし、次いで「本島人」、最下層に「蕃人」（当時先住民族はこう呼ばれた）という階層秩序が生まれた。すなわち「本島人」という呼称は、「大日本帝国」の「二等臣民」というステータスを象徴するものであった³⁵ということで、つまり現代の視点から見ると、「本島人」という呼称は必ずしもポジティブな名詞ではないのであるが、本稿では、当時の植民地台湾の時代背景に依拠するために、当時台湾にいる漢族系住民を「本島人」と呼ぶことにする。一方、『南方紀行』において、中国の漢族系住民と区別するために、佐藤春夫は台湾の漢族系住民（「本島人」）を「台湾人」³⁶と呼ぶ場面が何箇所ある。

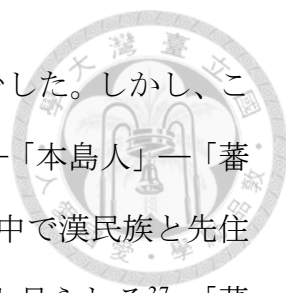
2.5. 「蕃人」

日本統治時代の台湾には、台湾総督府は漢民族に同化する程度により、平原に住んでいる先住民族を「熟蕃」と呼んだのに対し、山地に住んでいる先住民族を「生蕃」と称した。さらに、「生蕃」に対しては、その居住地域を「蕃地」として区別し、討伐により帰順した「蕃社」には警察派出所を設置し、警察官が行政を執行する特別な統治形態である「理蕃行政」を実施した。日本国家の介入によ

³⁴ 若林正文(2001)『『海のアジア』への再編入——清末開港と日本の植民地統治』『台湾——変容し躊躇するアイデンティティ』、ちくま新書、p.53

³⁵ 同注 34、p.53

³⁶ 本論文では、テキストにおける「台湾人」という言葉遣いを「台湾人」で表記する。それに対し、漢民族の「本島人」は自ら日本人と区別し、政治的な意味が内包されている名詞として使用されている場合、〈台湾人〉で表記する。



り、漢民族と先住民族の直接的な社会的相互関係は次第に減少した。しかし、この統治体制の下では、「文明化」の度合いに応じた「内地人」―「本島人」―「蕃人」という民族的な階統秩序が認識されており、その枠組みの中で漢民族と先住民族の「エスニック・バウンダリー」は概ね維持されていたと見られる³⁷。「蕃人」「蕃地」など「蕃」という語を含む表現は、現在では不適切な表現であるが、本論文では、歴史資料および当時の文献における原文の表記を尊重するため、これらの語を括弧付きで記載することを断っておく。

2.6. サラマオ事件

1920 年（大正 9 年）に発生したサラマオ事件は、日本統治下の台湾におけるタイヤル族との衝突の一つであり、当時の「理蕃政策」の過程において重要な事件である。本論は、鄧相揚の『抗日霧社事件をめぐる人々 翻弄された台湾原住民の戦前、戦後』³⁸を参考し、以下のように「サラマオ事件」の経過を述べている。

サラマオ事件の発端は、1919 年（大正 8 年）に発生したインフルエンザの流行であった。この疫病が北勢群にまで蔓延すると、地元の人々は外部からの持ち込みであると考え、異民族の排除を目的として頻繁に出草（襲撃）を行い、日本の「理蕃」当局に圧力をかけた。日本側はさまざまな威嚇手段を講じたものの、十分な効果を得ることができなかった。むしろタイヤル族の反発を招き、彼らは監督所や駐在所を襲撃し、日本人警察官や隘勇を殺害した。同年 11 月 23 日には、サラマオ群による襲撃事件が発生し、道路工事を監督していた長坂駐在所の巡査 2 名が負傷した。日本側は武装した部隊を派遣し、懲罰的な攻撃を実施したが、事態は沈静化しなかった。さらに 12 月 3 日には、別の襲撃事件が発生し、

³⁷ 同注 34、p.50

³⁸ 鄧相揚著・下村作太郎監修・魚住悦子訳(2001)『抗日霧社事件をめぐる人々 翻弄された台湾原住民の戦前、戦後』、日本機関紙出版センター、p.73-74

3名の巡査が死傷する事態となった。これら一連の衝突は翌1920年の「サ라마オ事件」へと発展していった。

1920年（大正9年）9月18日、抗日運動はサ라마オ（現・佳陽）およびスカヨウ（現・梨山）地区に拡大した。サ라마オ・スカヨウ両群の原住民は合流点分遣所を襲撃し、日本人警察官およびその家族7人を殺害した。これに対し、日本の「理蕃」当局は即座に警察隊を派遣し、討伐作戦を開始した。さらに、日本側は「味方蕃」として協力するマレツパ群・白狗群の原住民を動員し、タイヤル族への襲撃を行わせた。これらの原住民たちは、日本警察の圧力の下で、同じタイヤル族でありながら敵対勢力と見なされた部族を攻撃することを強いられた。しかし、戦闘は困難を極め、日本警察はさらなる増援として、霧社地区のパーラン社やマヘボ社などの部落から壮丁を動員し、討伐作戦に協力させた。この2か月間に及ぶ戦闘には、合計998名の壮丁が動員され、そのうち霧社群からの参加者が562名と最も多かった。このように、日本側は現地の原住民勢力を活用しながら、徹底した討伐を遂行した。

2か月以上にわたる戦闘の末、「味方蕃」襲撃隊は険しい山岳地帯を駆け巡り、日本側にとっての「敵蕃」を排除する役割を果たした。彼らは生命の危険を顧みず戦い、最終的に戦闘を終結させた。本事件により、日本の「理蕃政策」はさらなる軍事的介入へと進み、台湾原住民に対する統制が一層強化される契機となった。

3. 研究方法及び研究範囲

佐藤春夫の台湾旅行関係作品は、執筆年代順によって次の表のようになる。

表 1 佐藤春夫台湾旅行関係作品

作品名	執筆年代	主要描写民族 ³⁹
「日月潭に遊ぶ記」	1921.7 (大正 10・7)	「蕃人」
「蝗の大旅行」	1921.9 (大正 10・9)	—
「鷹爪花」	1923.8 (大正 12・8)	「本島人」
「魔鳥」	1923.10 (大正 12・10)	「蕃人」
「旅びと」	1924.6 (大正 13・6)	「内地人」
「霧社」	1925.3 (大正 14・3)	「蕃人」
「女誠扇綺譚」	1925.5 (大正 14・5)	「本島人」
「天上聖母のこと」	1926.9 (大正 15・9)	「本島人」
「日章旗の下に」(「奇談」)	1928.1 (昭和 3・1)	「内地人」
「殖民地の旅」	1932.9～10 (昭和 7・9～10)	「本島人」
「かの一夏の記」	1936.7 (昭和 11・7)	—
「社寮島旅情記」	1937.8 (昭和 12・8)	—

本研究は佐藤春夫の台湾ものにおける「内地人」・「本島人」・「蕃人」のアイデンティティーを探究するため、各民族のアイデンティティーがあまり見られない短編作品を除き、「内地人」を中心とした「旅びと」「日章旗の下に」、「本島人」を中心とした「女誠扇綺譚」「殖民地の旅」や「蕃人」を中心とした「日月潭に遊ぶ記」「霧社」を研究範囲に入れる⁴⁰。

研究方法としては、佐藤春夫の台湾旅行関係の作品の中に各民族のアイデンティティーに関する描写場面を取り上げ、例えば、登場人物の言説や描写されている風習などに着目して分析し、言わば当時の人の考え方を探究していく。テク

³⁹ ここで取り上げた民族は、その作品の中で「主に描写される民族」を指す。また、その作品は特に一つの民族にしばって書いたものではない場合、「—」で表示する。本論文における「主に描写される民族」の判定基準は、作品内において特定の民族に関する描写（例えば、その民族の言説、習俗、風景など）が全体の半分以上を占める場合、その作品の「主に描写される民族」を当該民族と定義する。

⁴⁰ 主要描写民族があまり見られない「蝗の大旅行」「かの一夏の記」「社寮島旅情記」は今回の研究範囲に入れない、そして「魔鳥」は「蕃人」を主要描写対象としたが、作中における「蕃人」の視点に関する記述は極めて限られているため、本論文の考察対象からは除外する。同じく、「鷹爪花」「天上聖母のこと」には「本島人」が登場する場面があるが、「本島人」に対する見解が少ないため、今回は除外しようとする。

スト分析すると同時に、作中の時代について、歴史的背景、風俗習慣または当時の統計データなども考慮しながら、考察をしていきたい。主にテキスト分析によって行う。

具体的には、以下の三つのステップを踏まえた上で、「内地人」・「本島人」・「蕃人」、それぞれのアイデンティティーが佐藤春夫の台湾作品でどのように描かれているのかを検討していきたい。

- 1.まず、佐藤春夫の『南方紀行』『わが支那遊記』における「支那人」に関する描写を挙げ、「本島人」との相違を明らかにし、佐藤春夫による「本島人」の定義を確立する。また、「女誠扇綺譚」「殖民地の旅」における「本島人」の言説に絞り、彼等が「内地人」と「蕃人」に対する考え方を分析し、「本島人」に関わる史料を引用することにより、当時の「本島人アイデンティティー」を明白にする。
- 2.次に、「蕃人」を描写する作品「日月潭に遊ぶ記」と「霧社」を対象にし、彼等の言説を分析することを通じ、「蕃人」が「内地人」と「本島人」に対する見方を考察していく。そして、「霧社」に物語の主軸とした「サラムオ事件」に関する史料も含め、「理蕃政策」の下で佐藤春夫から見る「蕃人」のアイデンティティーはどのように描写されているのかを究明する。
- 3.さらに、「内地人」を中心に描写された「旅びと」「日章旗の下に」に着目し、様々な「内地人」の言説を検討することで、「内地人」移民者のアイデンティティーがどのように捉えられていたのかを探究する。そして、当時の移民政策にも触れつつ、作品中の「内地人アイデンティティー」を解明する。
- 4.最後に、前述の分析結果をもとに、それぞれの民族のアイデンティティーを対照、比較しながら、「他者」の視点から見た日本統治時代の台湾における各民族のアイデンティティーを解明し、結論を述べる。

第4節 論文構成

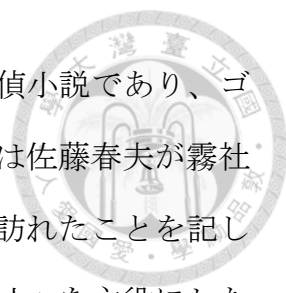
本論文は前述の研究動機、先行研究、研究方法の内容を踏まえ、以下の三章に分けて論説を展開する。前述の表 1 に示されているように、佐藤春夫が「本島人」を描写した作品が最も多く、さらに「本島人」を主要な描写対象とする「女誠扇綺譚」および「殖民地の旅」は、全作品の中でも特に長編である。そのため、第一章ではまずこれらの長編作品について考察を行う。次に、「蕃人」を主要な描写対象とする作品が二番目に多く、その中でも「日月潭に遊ぶ記」および「霧社」の二作品は、特に作者の「蕃人」に対する見解が明確に表れている。したがって、第二章ではこれらの作品を分析の対象とする。最後に、佐藤自身は「内地人」であるが、彼の作品には当時台湾に移住した「内地人」に対する独自の視点も見受けられる。第三章では、当時の移民政策を背景に、「内地人」移民者のアイデンティティに関する考察を行う。以上の分析の流れに基づき、本論文の構成は「本島人」、「蕃人」、「内地人」という順に展開していく。各章の梗概は下記の通りである。

1. 第1章 「女誠扇綺譚」と「殖民地の旅」における「本島人」のアイデンティティ

第一章では、主に「女誠扇綺譚」や「殖民地の旅」における「本島人」のアイデンティティについて考察する。

佐藤春夫は大正 9 年に森丑之助の提案で福建を二週間ほど旅行し、その二週間の思い出を見聞録の形で作品にまとめた。本章はまず、「支那人」を中心に描写した作品『南方紀行』と「わが支那遊記」を取り上げ、「本島人」を中心に描写した作品「女誠扇綺譚」と「殖民地の旅」両作品と比較し、佐藤の目に映った「本島人」と「支那人」との違いを解明する。

次に、「女誠扇綺譚」と「殖民地の旅」に着目して作中の人々の言説を解析す



る。「女誠扇綺譚」は台南を舞台として当地の異聞を描いた探偵小説であり、ゴシック小説としての要素も持っている。一方、「殖民地の旅」は佐藤春夫が霧社山地から下りた後、台湾中部を巡りながら、地域の名士たちを訪れたことを記した作品である。両作は一見無関係に見えるが、どちらも「本島人」を主役にした物語であり、「本島人」の言説が多く提示されている。特に「殖民地の旅」では、「台湾議会請願運動」で民衆を引率していた林献堂との対話が描かれており、また現存の史実と合わせて当時の「本島人」が自分を「内地人」として認めていないという描写が見られる。したがって、当時の「本島人」のアイデンティティーは総督府が望んだ「皇民」ではなく、自らを「内地人」と区別するために生まれた〈台湾人〉としての意識なのである。

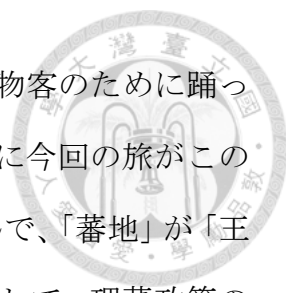
2. 第2章 佐藤春夫の「蕃人」認識から見る「蕃人」のアイデンティティー

第二章では、「日月潭に遊ぶ記」と「霧社」を中心に、それらの作品における「蕃人」のアイデンティティーを究明する。両作品の共通点は、「蕃人」を主要描写民族として創作されている点である。また、「日月潭に遊ぶ記」と「霧社」の他に、同じく佐藤が日月潭に行った途中のことを記述する「旅びと」と「かの一夏の記」の内容を参照しながら、論説を展開していく。

「日月潭に遊ぶ記」と「旅びと」は佐藤春夫が台湾の名勝である日月潭を訪ねた経験に基づいて書いた紀行文である。作中では、佐藤が二八水⁴¹から水社に向かう途中、高官の視察旅行のような陶醉を味わった描写がある。「旅びと」によれば、日月潭を目指したものの、線路の損壊で集々街に一晩泊まらなければならなくなった。さらに、「かの一夏の記」では「霧社の蕃人蜂起の事を聞いて、前程にまた新らしい障害の生じたのを知り、この蕃情を知るために予定外の日を日月潭で宿泊する事になった」⁴²ということであり、後に「蕃人」に直面した

⁴¹ 現今の彰化県二水郷である。

⁴² 初出は1936年の『霧社』であるが、本論文は下記の単行本から引用した。



場面があったのである。佐藤は、作品において、「蕃人」が見物客のために踊ったこと、及び同行者が「蕃人」の女性に悪戯をしたこと、さらに今回の旅がこのように順調したことも、全ては総督府の統治が既に山地に及んで、「蕃地」が「王土」になったためであると明言した。つまり、佐藤の描写を通して、理蕃政策のもとで、「蕃人」の生活がどんどん文明化されていく一方で、彼らが被殖民者として差別化された様子が明らかにされている。

一方、その「蕃情」とは大正9年（1920）9月18日に発生された「サラマオ事件」である。そして、「霧社」は正にその事件について描写した作品であり、ルポルタージュ文学とも言える。「霧社」では、佐藤一行が能高山まで登り、霧社に到着した旅程が記録されている。当時の霧社は、台湾総督府に東西交通路の要衝と見做されただけでなく、森林資源が富んでいる宝庫とも認められた。つまり、「理蕃政策」を推進するための重要な拠点である。霧社では、佐藤は多くの「蕃人」と間近に接し、「蕃人教化」や「内台結婚」などの実態を把握し、そこで体験したことを作品に書き入れた。

「蕃地」の実態や「蕃情」不穏といった描写の背後には、「生蕃」と「熟蕃」という立場の差異に起因して、彼らが「理蕃政策」の下で異なる歴史的過程をたどったことが示唆される。そして、このような異なる経験の蓄積は、結果として民族的「アイデンティティ」の形成においても相違を生じさせたと推察される。したがって、本章においては、佐藤春夫による当時の「蕃人」表象を手がかりに、その台湾関連作品に描かれた「蕃人」のアイデンティティの諸相に焦点をあて、立場の差異がいかなる形でアイデンティティの構築に影響を及ぼしているのかを考察することを目的とする。

佐藤春夫(1999)「かの一夏の記——とちめがきに代へて——」『定本 佐藤春夫全集』第21巻、臨川書店、p.227

3. 第3章 移民政策から見る「内地人」のアイデンティティー

第三章では、「内地人」のことを主として描写された「旅びと」と「日章旗の下に」に着目し、当時の「内地人」は「移民者としての内地人」に対してどのように考えていたのかを考察する。

「旅びと」は「日月潭に遊ぶ記」と同様に佐藤が日月潭に訪れた際に書いた紀行文であるが、「旅びと」では「内地人」が他民族に対する見方が判然に見られるのみならず、台湾に住んでいる「内地人」に対する描写もあるため、本章では「旅びと」を中心に、「内地人」のアイデンティティーについて論説を繰り広げていく。この作品は一見紀行文のようであるが、実は「フィクション性が強い」⁴³作品と言われている。そして、その「フィクション性」があるからこそ、作者自身いわゆる「内地人」の考え方がより鮮明に見られると考えられる。

また、本章で取り上げたもう一つの作品「日章旗の下に」とは、当時植民地台湾内部の階級性を示唆する作品である。「本島人」と「蕃人」を中心として語られる佐藤の他の作品と違い、「日章旗の下に」は唯一「内地人」の移民者を主役とする作品であり、佐藤が実に体験しなかったことが書かれ、いわゆるフィクション性が強い作品である。フィクション性が高い両作品を通して、佐藤春夫が自分の立場で言い難いことを言い出そうとする意図が窺える。

両作品に登場する「内地人」移民者は、支配者でありながら不安定な立場に置かれ、植民地台湾という場で葛藤や孤立感を抱えている点が特徴的である。「旅びと」では、台湾に移住した女中が「声を持たない」として描かれ、内地にも台湾にも帰属できない不安定なアイデンティティーを象徴している。一方、「日章旗の下に」の松原は、「内地人」として誇りを持てる場所を求め台湾に渡ったものの、松原夫婦には理想と現実のギャップに直面しなければならないという移民政策の脆弱さが反映されている。こうした描写を通して佐藤は、「内地人」を

⁴³ 蜂矢宣朗(1982)『旅びと』覚書—佐藤春夫と台湾、続稿』『香椎潟』27、福岡女子国文学会、p.81-89

単なる支配者としてではなく、帝国の中心と周縁の狭間で揺れ動く複雑な存在として描いており、移民政策の陰にある葛藤や不安を浮かび上がらせている。

以上の如く、本章では日本統治時代の移民政策を検討し、佐藤春夫が書いた「内地人」移民者のアイデンティティーをより全面的に考察したい。

4. 結論

結論では、第一章から第三章までの考察結果をまとめ、佐藤春夫（他者）の視点から 1920 年代台湾にいた各民族自身が持っているそれぞれのアイデンティティーを究明する。その上で、佐藤春夫が作品中における日本統治時代の植民地政策に対する見解をも含めて考え、総括的に結論を導く。

第1章 「女誠扇綺譚」と「殖民地の旅」における「本島人」のアイデンティティー



第1節 はじめに

大正9年(1920)の夏、作家佐藤春夫は高雄で歯科医を従業している旧友の東熙市に台湾遊覧を誘われ、台湾へ旅行しに来了。しかし台湾に到着した後、佐藤は直ちに台湾島内の遊覧を展開しなく、先に台湾海峡の向こうの福建を二週間ほど旅行した後、また台湾本島に戻ってきた。その理由に関して、「かの一夏の記」に下記のように記している。

H¹の家を根拠に台南以南の見物に興じてゐるうちにこの地の暴風季になつて来たし、旅費も大分無駄づかひしてしまった。そんなにのんきに構へてゐる位なら一そ対岸地方も見物して来たらどうかと丙午先生の提案があつた。対岸地方といふのは厦門泉州などを指すので汽船を一晩乗れば台湾海峡は渡れるのである。いつまた来る地方か知れないから序に行つて見てやらうといふ氣になつた。何しろ少々やけくそ見たいに積極的になつて居るのであつた。ひよつとすると風土の影響かも知れない²。

引用から見ると、先に対岸地方に行った理由として、気候の影響があるし、旅行の費用も無駄遣いしたくないし、最も大きなのは当時台北博物館の館長代理に勤めた森丑之助の提案があつたのである。そして、当時「支那趣味」の風潮にも影響された³と思い、また、Hの弟子で技工の手伝をしていた厦門から来てい

¹ 東熙市のことを指す。

² 初出は1936年の『霧社』であるが、本論文は下記の単行本から引用した。
佐藤春夫(1999)「かの一夏の記——とちめがきに代へて——」『定本 佐藤春夫全集』第21巻、臨川書店、p.226

³ 「からもの因縁」では、「支那趣味」とは「明治の末年から大正の初期にかけて支那の文

た青年の鄭氏にも誘われ、佐藤の案内者として一緒に厦門に二週間旅行したという記述もある。結局、彼らは泉州に到達しなかったが、厦門漳州のあたりを旅していた。その旅を記録している見聞録としては、『南方紀行』と「わが支那游記」の二篇が挙げられる。

本章では、まずこの二篇の内容を取り上げ、「支那人」に関する描写との比較を通して、佐藤の「本島人」に対する認識を明らかにしたい。次に、佐藤春夫の台湾ものでは「本島人」を主要描写民族にする「女誠扇綺譚」と「殖民地の旅」という二作と比較し、さらに各方面（教育、政治など）で当時の時代背景についても考えながら、作中に含まれている「本島人のアイデンティティー」は一体どのように理解されているのかを考察していく。

第2節 日本人としてのアイデンティティーから見る「支那人」像

『南方紀行』は紀行文集であり、大正11年（1922）に新潮社より刊行された物である。その中に、大正10年（1921）8月から大正11年（1922）2月に雑誌『野依雑誌』、『新潮』、『改造』に連載した「厦門の印象」、「章美雪女士之墓」、「集美学校」、「鷺江の月明」、「漳州」、「朱雨亭の事、その他」という六篇の作品が収録された。

「厦門の印象」の冒頭には、厦門に行くことを決めた後、語り手と鄭は大正9年（1920）7月20日の夜に台湾の打狗から乗船し、翌日の21日に厦門に着く過程が描写されている。航行の途中で、語り手は甲板の上で台南の商人の陳氏に会った。陳氏の容姿に関して、「一人の甚だ目立つ台湾人が来て立つてゐる」、「台湾人特有の黒さで日にやけた顔には、実際あるのだからどうかあばたのあるやうな気がして」（傍点原文。以下同様。）⁴と語り手は述べている。さらに、語り

物に対して文壇で多少の関心を持つてゐた」と定義された。しかも、佐藤春夫は自分のことを「支那愛好の最後の一人」と称された。

佐藤春夫(1999)「からもの因縁」『定本 佐藤春夫全集』第22巻、臨川書店、p.180-183

⁴ 初出は1922年の『南方紀行』であるが、本論文は下記の単行本から引用した。

手は「——台湾人とは蕃人のことぢやない、台湾籍民たる支那人だ」⁵という一文を付加して説明しておいた。上陸してから、あの夜、語り手は鄭と陳氏と一緒に南華大旅社に泊まっていた。しかし、案内者としての鄭氏は旅社に帰って来なく、陳氏はただ「鄭さん鼓浪嶼今晚寝ます」⁶と言い置き、不安な語り手を一人残して寝ていた。

翌日、鄭氏が帰ってきたが、一人で語り手がわからない言語でどんどん喋っていった。すると、語り手は自分が「のけ者」と思い、「疎外感」を感じてきた。続いて、そのような感情が徐々に強くなり、「怒り」にも心頭に発してきた。

私は今晚もまた不安な気持ちで言葉の解らない人間たちのなかで、寝させられるのかと思ふと鄭の思ひやりのない仕うちが腹立しかつた。

(中略)

それにしても鄭といふ男は思ひやり——空想力のない男だ。一たい不親切といふものは空想力のないことが重大な原因なのだが、見も知らないところへ、只一人の知った人も傍に無しで——全く今日は陳も居ないのだから——、その上一言も言葉が通じなくて、——それはまだまだいいとしても日本人に対する反感の激しい今日このごろのこの町だのに……私はそんな風に考へつづけて、酒の後では一層神経的になる自分の空想をもて余した⁷。

一見すると、酔余の愚痴だが、自分が日本人として厦門で仲間外れになった語り手の気持ちが強烈に感じられる。それだけでなく、自分はあそこの人々に殺される可能性があるというネガティブな考え様さえ頭に浮かび上がってきた。それから、寝ようとする時にまた床の上にあった豚の脊骨に刺され、その脊骨はま

佐藤春夫(2000)「南方紀行」『定本 佐藤春夫全集』第27巻、臨川書店、p.13-14

⁵ 同注4、p.14

⁶ 同注4、p.19

⁷ 同注4、p.21

るで自分（日本人）を駆逐する敵意が溢れる刺のように、語り手に向かった。



これはどうもボオイか何かの悪戯に相違ない。料理場の近くで犬がしやぶりさらしてあった奴を、私が日本人と見てとつてこんな怪しからんことをしたものだに見える。私はその忌々しいものを足で牀の下に蹴り飛した。さてもう一度電燈を消して、この地方での日本人の不評判を思つて見る——つい昨日散歩の路上であの町はづれの壁に見出した落書のことを考へる。「青島問題普天共憤」「勿忘国恥」といふのがあつた。——日貨排斥のものとしては「勿用仇貨」「禁用劣貨」などともあつた。「こ奴は日本人だ！」といふやうなことを言ひながら私につつかかつて来た酔漢もあつた……⁸。

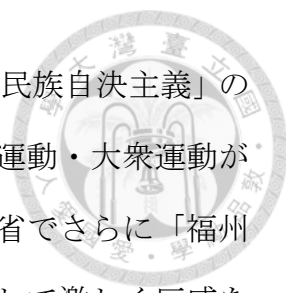
引用部分のように、語り手はその時点で既に「言葉が通じない」、「街の看板にある標語」や「街の人々の話」などのことによって引き起こした「疎外感」に囲まれていることが分かった。「言葉が通じない」という問題は語り手自分の「内心」から、つまり「内部」から生み出した孤独感みたいなものとも言えるが、「青島問題普天共憤」「勿忘国恥」「勿用仇貨」「禁用劣貨」もしくは「こ奴は日本人だ！」というような街の民衆の叫び声とは、「内部」の問題ではなく、「外部」からの刺激と言える。何故厦門の民衆達はそのように悲憤したのか。それは約一年前、一つの事件が発生したためである。

1915 年に当時の民国袁世凱政府が日本の対華二十一箇条要求⁹を受諾したこ

⁸ 同注 4、p.21-22

⁹ 全五号からなる要求の第一号は、山東省におけるドイツ権益を日本が継承することに関する四カ条であつた。第二号は、南満洲における日本権益を一層強化し、またそれを東部内蒙古にまで及ぼそうとするもので、関東州租借地および南満洲鉄道・安奉鉄道の期限の大幅延長など七カ条からなっていた。第三号は、華中の漢冶萍公司に関する二カ条、第四号は中国沿岸部の不割譲の約束であり、第五号は雑多な七カ条を集めたものであつて、中国政府が日本人を政治・財政・軍事顧問として雇うこと、日本の学校・寺院・病院に土地所有権を認めること、華中・華南における一、二鉄道の敷設権を許与することなどであつた。

"にじゅういっかじょうようきゅう【二十一箇条要求】"、国史大辞典、JapanKnowledge、



とに対する不満情緒により、また当時世界中に流行っている「民族自決主義」の影響で、1919年5月4日に、抗日・反帝国主義を掲げる学生運動・大衆運動が北京から全国に勃発していった。次いで、同年11月には福建省でさらに「福州事件」¹⁰が起こった。恐らくそれらは廈門の人々が日本人に対して激しく反感を抱いた原因となったのである。語り手は廈門の民衆が自分に対する反感に気づき、自分自身が「こちらに属していない」と自覚していた。河野龍也(2019)の論文では、語り手のアイデンティティーに関して以下のように述べている。

ここでのポイントは、言葉による疎外感が、廈門の都市構造に対する理解を〈私〉に促している点だろう。「排日」の標語はそもそも、外国人に管理された租界には残りにくく、かと言って彼らの目に全く触れない地元の生活空間にあったのでは意味がない。それが書かれるべき場所は、外国人の目に触れて手を出しにくい場所、すなわちソト（租界）に向いたウチ（現地社会）の外縁が選ばれることになる。するとそこには、一つの街を二つに区切る“^{ボー}境界”^{ダー}がおのずと示されることになる¹¹。

つまり、語り手の「私」は内陸に移動しつつ、いつの間にか「ソト」と「ウチ」

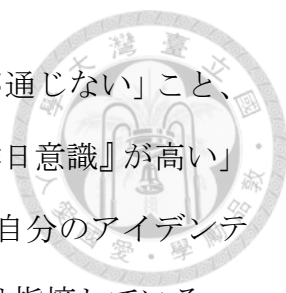
<https://japanknowledge.com>、(参照 2024-08-10)

¹⁰ 1919年（大正8）11月16日中国福建省福州で排日貨に伴って起った日本人（主に台湾籍民）と中国人学生の衝突事件。福州では五・四運動後の日本商品排斥運動が11月激化するに至ったが、16日日本人商店天田洋行から輸送中のレース糸を中国人学生が取り押えたことから日本人と中国人学生の間に大規模な衝突が起り、中国側十名日本側五名の負傷者を出した。事態を重視した日本は軍艦嵯峨を福州に派遣した（11月23日到着、翌年1月4日まで滞留）。外務省は松岡洋右書記官を現地に派遣調査させたが、本事件は日本人側の策謀によるものと認められた。1920年3月より北京で解決交渉が開始され、11月12日小幡西吉公使と顔惠慶外交総長との間の公文交換で解決した。内容は実質上日本側の謝罪と慰謝料（計二一〇〇元）の支払いである。

"ふくしゅうじけん【福州事件】"、国史大辞典、JapanKnowledge、

<https://japanknowledge.com>、(参照 2024-08-10)

¹¹ 河野龍也(2019)「眠る男と煙の女——『日本人』であることの不安」『佐藤春夫と大正日本の感性——「物語」を超えて』、鼎書房、p.332



の間にある「境界」を超えていたのである。そのような「言葉が通じない」こと、そのような「共感がない」こと、そしてそのような「人々の『排日意識』が高い」ことをより意識していく度に、より一層無力さを感じており、自分のアイデンティティーを再び確認することができるようになったと河野氏は指摘している。

このように、「日本人」であるという〈私〉のアイデンティティーは、「排日」の標的になり得る身の自覚という極めてネガティブな形で獲得されているのである。そのことが内外で異なる相貌を持つ廈門の街の二重構造の理解につながっていくところに「廈門の印象」の個性がある¹²。

廈門の街風景での内外の差から、語り手がやっと意識している日本人のアイデンティティーと対立しているのは、「排日意識」が強烈な「支那人」のアイデンティティーである。一方、「台湾人」はどうなるのか。前述にも論じた通り、語り手の考えによると、「——台湾人とは蕃人のことぢやない、台湾籍民たる支那人だ」ということである。ここでは、「台湾人」を「蕃人」ではなく、「台湾籍民たる支那人」に定義され、いわゆる「本島人」のことである。そうすると、その時点の「私」にとって、「本島人」は台湾籍たる「支那人」であり、つまり「支那人」と同じ文化、同じ血縁を持つ漢族系の住民であると認識されていた。ただし、「本島人」は日本の植民地である台湾に住んでいたため、政治的には中国本土の「支那人」とは区別されていた。そのような「私」の理解からすると、いくら同化政策が施されても、「本島人」と「内地人」とは根本的な違いがあることが窺えよう。

¹² 同注 11、p.332

第3節 「異国情緒」から「本島人」が持つアイデンティティの正体へ



1. 「女誠扇綺譚」における「荒廃の美」から「支那趣味」へ

「女誠扇綺譚」は、大正14年（1925）5月に雑誌『女性』に発表された作品であり、当時日本の植民地である台湾の古都台南を舞台として展開され、民間伝説と現実の事件の交錯を描く探偵小説およびゴシック小説である。今まで「女誠扇綺譚」に関する研究といえば、「荒廃の美」、さらにそこから誕生してきた「異国情緒」についての論説がよく挙げられている。例を挙げると、蔡維鋼（2011）は「荒廃の美」について「字面だけで判断すると、〈荒廃の美〉とは即ち『荒れ果てたもの』『破壊されたもの』『放置されたもの』『腐敗して行くもの』の『美しさ』ということである」¹³と論じ、「その荒廃の『美』とは、混沌たる廃屋（廃墟）の中に存在する『並立の両面性』である。（中略）佐藤春夫は『女誠扇綺譚』による主人公の主・客観の転化を描き出して、人間の混沌たる内面世界に『並立の両面性』が存在することを提示しようとしたと解し得る」¹⁴と結論づけている。

一方、大東和重（2015）は「荒廃の美」という概念については、次のように論述している。

街と物語をひたす、腐敗と倦怠の気配。悪臭のなかから立ち上がる、どぎつい荒廃の美。くり返しよみがえる感傷と、酒に憂さをまぎらす自暴自棄の生活。頹廢のなかの酔眼が、逆説的に見出す、台湾人の生活の深層。昼下がりの白昼夢に一瞬響く女性の声は、数々の伝説を呼び寄せながらも、その声の由来を醒めた目線で探っていくと、亀裂が走り、伝統社会と植民地支配の交差が露わになる。放恣と緊迫、ロマンチズムとリアリズムの絶妙なバラ

¹³ 蔡維鋼(2011)「佐藤春夫と〈荒廃の美〉について—『田園の憂鬱』と『女誠扇綺譚』をめぐって—」『成蹊国文』第44号、成蹊大学文学部日本文学科、p.129

¹⁴ 同注13、p.140

ンスが全体を引き締めるゆえに、「女誠扇綺譚」は植民地台湾で生まれた日本語文学の「王座」の位置につくのであり、その後の日本人作家による台南表象を決定づけるほどの影響を及ぼすのである¹⁵。



つまり、本作品は語り手である「私」が町を見物している過程を通し、台南の風景描写が展開されるのみならず、実はその物語の背後により深層な意味が含まれている。大東氏の説から見ると、それは植民地台湾時代に「本島人」の生活の深層の現れであり、そして数々の伝説を呼び寄せることで、伝統社会と日本の植民地支配の交差が露わになるということである。それこそは、「女誠扇綺譚」は植民地台湾で生まれた日本語文学の「王座」の位置につく理由であり、台南表象の描写の地位を確立し、その後の台湾に來た日本人作家達に対して決定的な影響を与えた作品として尊敬されているわけである。

大東氏の説から見れば、先行研究で提起された島田謹二の「異国情緒論」の系譜となる論により近づくと察することができる。それに対し、蔡氏の論には「異国情緒論」に影響されたことも見られるが、加えて廢墟の風景から人間の内面世界に存在している「並立の両面性」が主張された。言わば、「外」から「内」という転化が作中に見られるということであり、後述でそれについてさらに説明を加えたいと思い、ここではまずそれをさておき、物語の描写から論述を繰り広げよう。

実際にテキストでの「荒廢」についての描写場面を取り上げると、「赤嵌城址」と「沈氏の廢屋」が挙げられている。その中で、「沈氏の廢屋」を主要な描写対象にして、そこからまた民間伝説が導き出された。主人公である「私」と友人の世外民はトロッコに乗り、台南市の西郊の禿頭港に到着してから、世外民の提言の上で「私」自身も上半日の安平巡りのうちに多少の興味を持つようになってい

¹⁵ 大東和重(2015)「佐藤春夫『女誠扇綺譚』の台南」『台南文学 日本統治期台湾・台南の日本人作家群像』、関西学院大学出版会、p.69



たため、二人はその辺を一巡しように決めた。それで、間も無く二人が豪壮な廃屋を発見し、外観はもう古くて崩れかかったものの、その隅々から過去の栄光と豪華絢爛の名残が感じられた。

なるほど、二階の走馬楼^{ツアウベラウ}——ベランダの奥の壁には、淡いながらに鮮かな色がしつとり、時代を帯びてゐた。事実この廃屋は見てゐるほど、その隅々から素晴らしい豪華が滾々と湧き出して来るのを感じた¹⁶。

よく見れば、走馬楼の壁に褪せた色からも、その時代性が見えてきた。このような描写から、どのような豪華な建物でもそのまま放置されたら、時間の流れにつれて「荒廃」になってしまったことが分かる。しかし、そのような「荒廃」は時代を示し、違う世代の人や事を知ることのできる役割が果たされる。例えば、「私」はそのような「荒廃」で「——してみれば、何をする家だかは知らないけれども、この家こそ盛時の安平^{アンピン}の絶好な片身ではなかつたか」¹⁷というように推測できた。それから、二人はその廃屋により近く見て行き、石造りの円柱とその上部に纏っている龍を形取った彫刻は、走馬楼の壁と同じくもう色褪せたが、そこにかつての輝きがまた見られる。したがって、「私」は以下のように評価している。

尤も、もし私に真の美術的見識があつたならば、たかが植民地の暴富者の似而非趣味を嘲笑つたかも知れないが、それにしても、風雨に曝されて物毎にさびれてゐる事が厭味と野卑とを救ひ、それにやつとその一部分だけが残されてあるといふことは却つて人に空想の自由をも与へたし、また哀れむべ

¹⁶ 初出は1926年の『女誠扇綺譚』であるが、本論文は下記の単行本から引用した。
佐藤春夫(1998)「女誠扇綺譚」『定本 佐藤春夫全集』第5巻、臨川書店、p.154

¹⁷ 同注16、p.155

きさまざまな不調和を見出すより前にただその異国情緒を先づ喜ぶといふこともあり得る¹⁸。



この廃屋の色褪せた壁や彫刻や装飾などに対し、不調和を感じる前に、そこから生じてきた「異国情緒」により、「私」は喜んでいた。しかも、もしそれらが長い年月経たなかったら、もしくは風雨に曝されなかったら、この豪邸はただ暴富者の家と言える。かえって、風雨に曝された豪邸こそ、凄然な雰囲気へのまれ、人々に空想の自由をあたえてもらった。

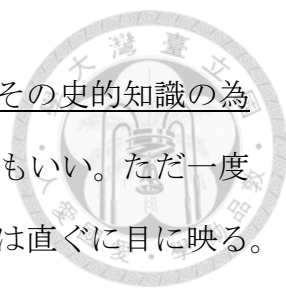
次に、「荒廃の美」に関して論じていく。まず、「女誠扇綺譚」という物語の冒頭では、語り手である日本人のジャーナリスト「私」は漢詩を詠む詩人である世外民と一緒に安平港の廃市を見物に行つての帰り道で、「荒廃の美」という概念を語りはじめる。テキストに以下のように述べている。

人はよく荒廃の美を説く。又その概念だけなら私にもある。しかし私はまだそれを痛切に実感した事はなかつた。^{アンピン}安平へ行つてみて私はやつとそれが判りかかつたやうな気がした。そこにはさまで古くないとは言へ、さまざまの歴史がある¹⁹。

このように、安平に行く前に、語り手の「私」が「荒廃の美」という概念が分かったが、それを実感したことがなかった。安平に行った後、初めて「荒廃の美」を領会するようになってきた。ここでまず、安平が持つ多層な歴史という点を取り上げ、「私」はまた次のように言っている。

¹⁸ 同注 16、p.156

¹⁹ 同注 16、p.149

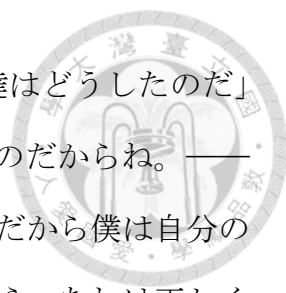
私^{アンピン}が安平で荒廢の美に打たれたといふのは、又必ずしもその史的知識のためではないのである。だから誰でもいい、何も知らずにでもいい。ただ一度そこへ足を踏み込んでみさへすれば、その衰頹した市街は直ぐに目に映る。さうして若し心ある人ならば、そのなかから凄然たる美を感じさうなものだと思ふのである²⁰。

「私」が、安平の多層な歴史に気づいたが、そこで「荒廢の美」を感じたのはその歴史のためではなく、別の理由であった。ここで語り手が言った「史的知識」とは、安平の膨大な歴史を指していると論者が思い、例えば、昔のオランダ人や鄭氏政權などのことである。しかし、「私」の話によると、「若し心がある人」であれば、安平で凄然たる美を感じられる。つまり、古都安平が持つ「荒廢の美」の中では凄然な雰囲気漂っているのである。

それでは、何故「私」がそれらの廢墟から「美しさ」を感じたのか。まず、論ずべきことは、やはり前で述べたように、「異国情緒」のことである。しかも、その「異国情緒」は一種の「支那趣味」と言えると考えられる。言わば、語り手の「私」は安平での「支那趣味」に溢れる異文化の廢墟の中に、「荒廢の美」を見つけたのである。

「私」と世外民二人が沈氏の廢屋で起きた幽霊譚にもそのような「支那趣味」が見られる。彼らはその幽霊譚に対して異なる解釈を加えている。その超自然ミタいな体験を確かにした世外民と違い、「私」はそれを全く信じていない姿勢をとった。どうして世外民がそんなに確信したのか。「私」はその問題について、その幽霊譚が「支那風」に出来ているためであると思っている。つまり、世外民が漢民族だからこそ、その話を聞いたらよく共感できるということである。そして、「私」は世外民に下記のように主張している。

²⁰ 同注 16、p.149



「それぢや、昔からその同じ言葉を聞いたといふその人達はどうしたのだ」
「知らない」私は言つた。「それや僕が聞いたのぢやないのだからね。——
ただ、多分は君のやうな、幽霊好きが聞いたのだらうよ。だから僕は自分の
関係しない昔のことは一切知らないのだ。ただ今日の声なら、あれは正しく
生きてる若い女の声だよ！ 世外民君、君は一たいあまり詩人過ぎる。旧い
伝統がしみ込んでゐるのは結構ではあるが、月の光では、ものごとはぼんや
りしか見えないぜ。美しいか汚いかは知らないが、ともかく太陽の光の方が
はつきりと見えるからね²¹」

引用の如く、「私」は自分の意見を述べ、そして月と太陽との対比の隠喩で世
外民の考えに賛成しないように話している。この段落について、フェイ・阮・ク
リーマン（2007）は次のように論じている。

語り手が提示するのは主に、古いもの（昔の幽霊譚を信じること）と新しいもの
（それに反対する科学的な理由）との対照である。この一見無邪気な会話を植民
的文脈に置き換えてみると、このテキストは、帝国主義と植民地化に関する
深い意味合いを提示する。

（中略）

幽霊譚は、未解決の過去と問題を抱えた現在で括られた物語である。亡霊や
妖怪を過去（歴史）に対する意思表示の体系化された象徴として読むとすれ
ば、語り手（植民地支配者）は、日本人が植民地台湾に足を踏み入れるずっと
前から現地の人が聞いてきた過去からの声を、拒絶するか、あるいはそれに
耳を傾けることができない。語り手は過去の遺物（この場合は、幽霊譚と廃墟）
から繰り返して目を逸らし、ノンポリで普遍化した耽美主義へと視線を移す

²¹ 同注 16、p.165

ことで、歴史の無効化を試みている。廃墟をめぐる本質的に異なる認識（語り手が見るものと世外民が見るもの）は、歴史——この場合は台湾で日本統治が始まる前の歴史——の解釈の相違を反映している²²。



阮氏の説によると、語り手である「私」の考え方と世外民の考え方との相違の背後には、実は帝国主義と植民地化に関する深い意味が含まれている。そもそも「私」は日本人、いわゆる「植民地支配者」としての視点を置き、この土地（台湾）の昔の歴史を最初から一切拒絶する姿勢を取ったから、幽霊譚に対する解釈も「新しい」のにより近づいていたのである。その点から冒頭の場面に戻って見ると、「私が安平で荒廢の美に打たれたといふのは、又必ずしもその史的知識の爲めではないのである」²³という「私」の主張も成立できるようになった。

それから、「私」と世外民はまた「荒廢」と「亡びたもの」において討論していく。

亡びたものの荒廢のなかにむかしの霊が生き残つてゐるといふ美観は、——これや支那の伝統的なものだが、僕に言はせると、……君、憤つてはいかんですよ——どうも亡国的趣味だね。亡びたものがどうしていつまでもあるものか。無ければこそ亡びたといふのぢやないか²⁴。

上述は「私」の論述である。一方、世外民はそれに大きく反論している。

亡びたものと、荒廢とは違ふだらう。——亡びたものはなるほど無くなつたものかも知れない。しかし荒廢とは無くならうとしつつある者のなかに、ま

²² フェイ・阮・クリーマン(2007)「ジェンダー、修史、ロマンティシズムへの関心」『大日本帝国のクレオール——植民地期台湾の日本語文学』、慶應義塾大学出版会、p.127-128

²³ 同注 16、p.149

²⁴ 同注 16、p.165

だ生きた精神が残つてゐるといふことぢやないか²⁵。



ここでは、二人の議論は表面的な「荒廃の美」のめぐることを完全に脱し、内面的な方向へ議論を行っていく。語り手の「私」の考えでは、荒廃のものの中で霊がまだ生き残っていること、このこと自体がおかしいのである。何故なら、それはもう亡びたものではなかろうか。そうすると、そのような話は一種の「亡国的趣味」になろうか。つまり、「荒廃＝亡びたもの」という考えになった。それに対し、世外民の考えでは、亡びたものと荒廃とは違うものであり、「荒廃」は要するに徐々に無くなる過程の中で、精神面でまだ生き残っているということである。それで、「私」は世外民の話を聞いてから、「我々は荒廃の美に囚はれて歎くよりも、そこから新しく誕生するものを讃美しようぢやないか」²⁶という結論をつけた。その結論から、「私」が世外民の意見にほんの少しだけ受け止めたが、自己の意志がまた強く表現されていることは読み取れる。「私」にとって、「荒廃の美」、言わばほぼ荒廃に近いもの（過去）を注目するよりも、むしろその中から生み出していく新しいものをより重視するほうが良い。

そして、藤井省三（1998）はその「私」と世外民が「荒廃」「亡びたもの」に対する争論について、次のように論じている。

「亡国」とは日本による植民地支配の現状を暗喩し、これを「荒廃」と定義し直す世外民は「そこから新しく誕生するもの」の可能性を示唆し、「私」の共感を得るのである。このように語り合う二人は、まさに「廃れようとしてゐる」恋に立ち会っていた。恋の前途に悲観して縊死する若い男と、男の残した扇の「女誠」の戒めに従い、内地人すなわち統治民族である日本人に嫁することを拒んで自殺する台湾人「下婢」との恋である。「荒廃」の地に

²⁵ 同注 16、p.165

²⁶ 同注 16、p.165

散った悲恋とは「澆刺とした生きたもの」——台湾ナショナリズムの誕生を
逆説的に宣告しているのである²⁷。



藤井氏が述べたように、確かにその「新しく誕生するもの」とは「台湾ナショナリズム」の誕生を暗示する可能性が高いと思っている。何故かという、「私」と世外民との争論の中では一つ重要なポイントがあるのである。それは、世外民は最初から始終「荒廃」が「亡びたもの」ではないという見解を持っているためである。もちろんそれも彼が「本島人」の身分としていることに関係があると思い、彼の言説には、その「まだ生きた精神が残っている」ことの存在は確実なのである。そして、清の亡国によって「荒廃」した台南という所に、そこに残っている「精神」から、「新しく誕生するもの」、言わば「台湾ナショナリズム」が誕生されたことを宣告している。「荒廃」を巡る論争において、荒廃は滅びたと主張した「内地人」の「私」と、荒廃にまだ生きた精神が残っていると主張した「本島人」の世外民という、二人の最初の意見はまったく異なる。この対立は、「本島人」と「内地人」との違いを明確に示している。それゆえ、その「台湾ナショナリズム」は、「本島人」が自らを「内地人」と区別するために生まれたものとも考えられる。さらに、前述で挙げた蔡氏の説とともに考えてみると、この作品における二人の議論を通して、外部の「荒廃」から内面世界の「台湾ナショナリズム」に転化していくことも成立するとも言えると論者はそのように考えている。また、藤井氏は「女誠扇綺譚」が『霧社』に収録された時には、作品の結尾に「台湾人が内地人に嫁することを嫌ったといふところに焦点を置いて……」²⁸という一文の書き方をめぐり、語り手の「私」が「僚友と争論の末退社し……」²⁹という加筆について、『女誠扇綺譚』における台湾ナショナリズム誕生という

²⁷ 藤井省三(1998)「大正文学と植民地台湾——佐藤春夫『女誠扇綺譚』」『台湾文学この百年』、東方書店、p.92-93

²⁸ 同注 16、p.176

²⁹ この加筆は 1936 年 7 月に昭森社より発行された短編集『霧社』に書かれたのみであ

テーマをいっそう明らかにしたといえよう」³⁰と主張している。上述をまとめると、「台湾ナショナリズム」という意識は確かに「女誠扇綺譚」から読み取れると考えられる。



2. 「漸進的内地延長主義」のもとで

1910年代の「民族自決」に応じ、それに日本本土でも「大正デモクラシー」が進展されたため、帝国日本もそれらに応え、植民地台湾に対する統治方針を変えたということである。大正8年（1919）10月29日、田健治郎が植民地台湾の最初の文官総督として、台湾総督に就任したにつれ、台湾も正式的に「内地延長主義」の時代に入ってきた。また、若林正丈（2001）によれば、「原³¹—田というラインは、『新領土』における『特殊事情』の存在（同化主義の論理と言え、残存）を根拠に漸を以て進むことを主張していた原—田の路線は、漸進的内地延長主義、とすることができよう」³²。このように、より正確に言えば、「漸進的内地延長主義」とも呼ばれる。

2.1 「内台共学」から台湾民族運動へ

さて、「漸進的内地延長主義」に基づき、台湾で主に実施された政策を若林氏は下記の通りに整理した³³。

- ④ 地方制度の改革、即ち地方公共団体としての州、市、街、庄の創設、それぞれのレベルでの官選諮詢機関（協議会）の設置（二〇年七月）

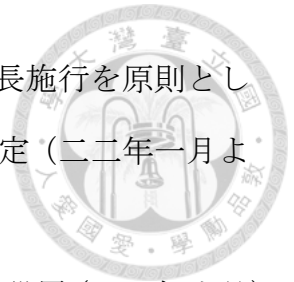
る。臨川書店が出版した『定本 佐藤春夫全集』第5巻には、この一文が書かれていないのである。

³⁰ 同注 27、p.93

³¹ 原敬のことを指す。第19代内閣総理大臣。在任期間は1918年9月29日-1921年11月4日ということである。

³² 若林正丈(2001)「大正デモクラシーと台湾議會設置請願運動——日本植民地主義の政治と台湾抗日運動——」『台湾抗日運動史研究 増補版』、研文出版、p.58

³³ 同注 32、p.58-59



㊤ 特別立法制度の改革、即ち勅令による内地法の台湾延長施行を原則とし台湾総督の命令（律令）による立法を従とする法三号の制定（二二年一月より施行）

㊦ 総督の行政上の諮問機関としての台湾総督府評議会の設置（二一年六月）

㊥ 新台湾教育令（勅令）の制定、即ち初等教育において「国語常用」の如何により別学とした他に、日本人・台湾人の別学主義を廃止し、中等以上を日本内地の学制と全く一致させ、かつ進学上の連絡を可能としたこと（二二年二月）

㊧ 法三号に基づいて、民法、商法、民事訴訟法其他附属法律を延長施行（一部例外を残して）、同時に治安警察法も延長施行（二三年一月）

まず、㊤と㊧では触れられた「法三号」³⁴という法律について討論しよう。「法三号」の前身は「六三法」と「三一法」である。それは総督府が台湾を最初に統治する時、日本（内地）から遠く離れた台湾は治安上機宜の措置をなす必要があることで、また「特殊の民情」が存在するのを理由とし、制定された法律のことである。具体的な内容といえ、台湾総督に「法律ノ効力ヲ有スル命令」³⁵を発する権限を与え、要するに日本帝国議会が立法協賛権の一部を台湾総督に委任するということである。そうすると、台湾総督の持っている支配権力が大き過ぎるようになり、「モノポリー」の境地に至った。それで、まさにこの「六三法」³⁶により、「台湾議会設置運動」の誕生を間接的に喚起された。「台湾議会設置運動」についての論述を後回しにし、ここではまず㊥の部分に着目し、つまり、「内台共学」のことである。この「内台共学」とは、「漸進的内地延長主義」という

³⁴ 台湾ニ施行スヘキ法令ニ関スル法律(大正 10 年 3 月 15 日法律第 3 号)

³⁵ 「第一条 台湾総督ハ其ノ管轄区域内ニ法律ノ効力ヲ有スル命令ヲ発スルコトヲ得」『台湾ニ施行スヘキ法令ニ関スル法律・御署名原本・明治二十九年・法律第六十三号』、国立公文書館デジタルアーカイブ、<https://www.digital.archives.go.jp/>、(参照 2024-08-12)

³⁶ 台湾議会設置運動を始めた時はもう「三一法」に変わったが、六三法と三一法はあまり大きな違いがないので、「六三法」と一括して呼ばれることがある。



政策のもとで「内地融合」を叶えようとした理想で誕生された産物である。とはいえ、この政策はその後に発生した一連の民族運動に多大な影響を与えた。1922年2月から元々「内地人」と「本島人」の別学という状況が変わり、共学できるようになった。しかも中等教育以上になると内地の学制と一致にするため、「本島人」が進学することも、以前より容易になった。

このような転換も実は地主資産階級の教育要求に応じたものであった。1922年以前は「本島人」が「内地人」と一緒に授業を受けることが不可能なことであった。その内訓によると、「内地人」と「本島人」に対する「其の教育の目的を異」にするもの³⁷だったため、1906年の時、一人の「本島人」子供が小学校に入学していたことによって発覚し、「教育の方針に背馳するは勿論、啻に学制所期の効果を収むる能はざるのみならず延いては本島施政の目的に永久の阻碍を来す虞れなしとせず」³⁸という強い口調で共学を禁止しており、その子を公学校に転校させたことさえもあった。このような事件からも、領台当初、伊沢修二が主張している「一視同仁」の建前と全く違う方向に進んでいったということが示されている。「本島人」が「内地人」と同じレベルの教育を受けられないため、若干の「本島人」子弟がより良い教育環境を求め、内地へ留学することを選択した。明治40年(1907)から大正2年(1913)までの留学生人数については次のようなグラフで表れている。

³⁷ 陳培豊(2001)「“文明の中へ”から“民族の中へ”——大正期、台湾の国語教育」『「同化」の同床異夢 日本統治下台湾の国語教育史再考』、三元社、p.144

³⁸ 弘谷多喜夫・広川淑子(1973)「日本統治下の台湾・朝鮮における植民地教育政策の比較的研究」『北海道大学教育学部紀要』第22号、北海道大学教育学部、p.25

表 2 内地に留学する「本島人」生徒³⁹

年次	小学校	中学校	実業学校	専門学校	特殊学校	その他	合 計
明治 40	19	22	14	7	-	1	63
41	23	13	15	7	-	1	59
42	13	26	22	6	-	8	75
43	28	23	24	10	3	-	88
44	45	42	26	15	3	-	131
大正 1	58	65	27	31	3	12	196
2	127	64	55	23	3	33	305
合 計	313	255	183	99	12	55	917

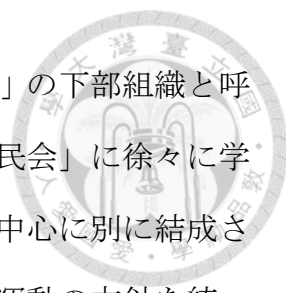
上表で示されているように、特殊学校を除き、他の学校はいずれも時間の流れに沿い、「本島人」留学生数のほぼ次第に増加していく傾向が明らかに見えた。とりわけ小学校の場合の増幅は一番顕著であり、総数から見ても、この七年間、留学生数は約 5 倍に達する。また、その留学生たちの中では、地主資産階級の子弟が大きな割合を占めている。資産階級にとって、自分の子を留学させることも、向学心を満足させる方途として意識されてくることになる。それに対し、このようなデータからも総督府が「本島人」に対する教育政策の不十分さが反映されたと思われる。それから、それらの留学生は日本で新思想に影響され、日本式教育を受け、「本島人」の資産家たちの支援を受けつつ、地主資産階級と共に民族運動を支える中堅になった。

それでは、留学生たちがどのように台湾民族運動に影響を及ぼしたのであるうか。よく知られた「台湾同化会」⁴⁰をはじめ、「新民会」⁴¹などのような組織はもちろん台湾の歴史上非常に重要だと思うが、今回はもう一つの組合を取り上

³⁹ 陳培豊が大正 2 年 11 月「台湾総督府学政大要」『隈本繁吉文書』により作成したものである。同注 37、p.145

⁴⁰ ここで「台湾同化会」を挙げる理由としては、「台湾同化会」が台湾の社会運動の祖とも称される組織であり、林献堂が台湾同化会を成立したのを契機として、多くの留学生に親しくなったからであった。

⁴¹ 1920 年 1 月 11 日、東京に留学していた台湾人留学生により結成された政治結社の一つである。



げたい。それは東京の台湾留学生を中心に結成された「新民会」の下部組織と呼ばれる「東京台湾青年会」である。「東京台湾青年会」は「新民会」に徐々に学生以外の成員が多く加入し、学生と混成していたため、学生を中心に別に結成された組織であった。結成した直後、最初の目標というと、抗日運動の方針を統一したことであった。その方針をめぐり、謝春木（後の謝南光）の説では、「それまでの運動が内地人と同様の法的権利の享受を求めるという意味で『同化』傾向を持つ運動だったのに対し、彼らは台湾の特殊性を訴えるという意味で、『差異化』を求める方針へと転換した」⁴²ということが論及している。そのような転換の決定的要因というのは台湾島外と台湾島内に分けられるとされている。台湾島外の場合は、多分前節で提起された第一次世界大戦前後、世界中で行われた民族自決運動に影響された一方、台湾島内の場合は前節の内容とも関連があり、すなわち文官総督の就任に応じ、「漸進的内地延長主義」という統治方針へと変換したことにより、「一体何を訴えようか」についても再び考慮する必要があり、その結果として、「差異化」を求める方針に決めた。そこからナショナリズムの展開を漸く見られる。

2.2 「台湾議会設置運動」におけるナショナリズムの展開

1920年代の台湾において展開された「台湾議会設置運動」は、当初こそ日本帝国の法的枠組みの中での政治的権利獲得を目指す穏健な請願運動として始まったが、その背景には、〈台湾人〉としての集団的な自己認識——すなわち「ナショナル・アイデンティティ」の形成——が少なからず影響していた。日本の植民地統治下において、〈台湾人〉は制度的・文化的な差別の中で自らの位置づけを再考せざるを得ず、その過程において、「内地人」との差異を意識する「ナショナリズム」が徐々に醸成されていったのである。

⁴² 謝春木(1931)『台湾人の要求』、台湾新民報社、p.12

若林氏は「台湾議會設置運動」がなぜ進行できるのかについて、以下のように論じている。

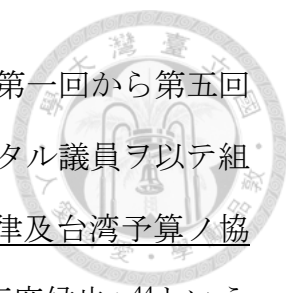


台湾議會設置運動は、内在的弱点を含みながらも内地延長主義との対決点をもち、それ故二〇年代前半において民族的政治的啓蒙運動の役割を果し、この時期の台湾抗日運動の中心的政治運動たりえたのであったが、そのゲームのルールは徹頭徹尾立憲主義的であった。それが日本本国における所謂大正デモクラシー運動の高まりの中で開始され、その継続期間が台湾における文官総督期に重なり、そして文官総督制を実現・維持した本国の政党政治期とほぼ重なるのは何ら不思議はない⁴³。

若林氏の論説によれば、台湾議會設置運動は日本国内（内地）の大正デモクラシー運動の高まりや台湾島内（本島）の文官総督の執政という時代背景の下に、つまりその時代潮流に従っているからこそ、推進できるようになったということである。しかし、もし当時の日本政府が完全に立憲主義を奉体したら、なぜ内地延長主義で統治された台湾の場合ではそれを適用しなかったのか。日本政府は台湾で「同化」政策の推進を掲げながらも、内地と同様に「立憲主義」を実施するには至らなかった。このような状況下において、「本島人」は自分自身が十分に重視されていないことを認識し、その結果として民族的アイデンティティに動揺を来すようになった。

一方、旧知識人（地主資産階級）の方はどのように「台湾議會設置運動」に注力したのか。1921年1月30日、台中の名望家であった林獻堂をはじめ、178名の「本島人」は第四四帝国議會に「立法権（律令制定権）」と台湾予算への「協賛権」を持つ「台湾議會」の創設を求める請願を提出した。それから、1934年

⁴³ 同注 32、p.162



の第六五議会まで、前後 15 回で帝国議会に請願した。まず、第一回から第五回請願での「請願の要旨」について、「台湾住民ヨリ公選セラレタル議員ヲ以テ組織スル台湾議會ヲ設置シ而シテ之ニ台湾ニ施行スヘキ特別法律及台湾予算ノ協賛権ヲ付与スルノ台湾統治法ヲ制定セラレタキ件御詮議被成下度候也」⁴⁴というものであった。一方、第六回の請願以降は上の下線部分を、「台湾特殊ノ事情ニ基ク特別法規及台湾ニ於ケル予算ノ議決権」⁴⁵というように入れ替えた。前者の「台湾ニ施行スヘキ特別法律」もしくは後者の「台湾特殊ノ事情ニ基ク特別法規」が明確に書き下ろされなかったが、それは「三一法」⁴⁶と「法三号」のことを指すのであろう。この請願の要旨からも二つの意義が齎された。まずは、「三一法」「法三号」のような総督専制による「台湾人の政治的無権力状態の立憲的修正」⁴⁷という意義を持っていた。請願運動は、日本本土の憲法的原理を台湾にも適用するよう求めたものである。ただし、実は「本島人」が求めた立法権は台湾総督の権限に並行するもののみであった。つまり、台湾総督と「同等」の権限を持っている台湾議會を設けるという主張であった。この要求は形式的には「三一法」「法三号」の原則に違反せず、単に局限された法律制定に参与することを求めているに過ぎない。次は、若林氏が論じたように、「まがりなりにも『台湾大の自治』の要求たりうることができ、そのことによってその植民地住民への参政権付与に民族的形式を与えまいと反ナショナリズムの戦略としての漸進的内地延長主義との対決点を持ちえたことから生ずる」⁴⁸ということである。この対決点は、「形式的自治の要求」が、実質的には日本帝国のナショナリズム抑圧戦略と鋭く対立するものであったことを示している。また、後に展開される「台湾ナショナリズム」の前段階として、「ナショナル・アイデンティティ」形成の初期段階を

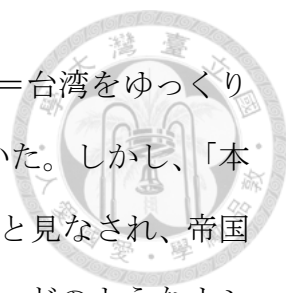
⁴⁴ (1921)「請願ノ要旨」『台湾青年』2:2(1921.2.26)、p.27

⁴⁵ 台湾議會期成同盟会編(1929)「帝國議會ニ提出シタル請願書」『台湾議會の設置運動』、台湾議會期成同盟会、p.13

⁴⁶ 第一回請願(1921.1.30)だけが「三一法」の時代にあった。

⁴⁷ 今村義夫(1923)「専制から自治へ」『台湾』第四年第八号、p.24

⁴⁸ 同注 32、p.66-67



示す意義がある。当時の帝国政府は、「漸進的内地延長主義」＝台湾をゆっくりと「内地化」し、徐々に参政権を与えるという政策をとっていた。しかし、「本島人」が自ら政治参加を求めると、それは「ナショナリズム」と見なされ、帝国にとっては危険視され許可されなかったのである。このように、どのようなナショナリズムから発起された政治活動であっても、帝国日本政府の見解ではそれを許可されないということが説明されている。ただし、前述の「漸進的内地延長主義」の④という政策の方向に沿って進めていくと、「漸進的参政権の付与、即ち地方自治の漸進的実現から中央参政へ」というようになるはずであるが、実際には、そういう方向に進めておらず、台湾に対する参政権付与が帝国議会に認められなかったのである。つまり、制度上は可能性が示されていたが、現実の政治運用においては排除され続けたということである。

それに対し、「本島人」の考えはどうであろうか。請願運動者の側は、帝国議会がずっと「特殊事情」という主張にかこつけ、「現実には民族間の差別を温存・合理化するものであることを見据えた」⁴⁹と思っていた。若林氏によれば、『『特殊事情』とは、漢族固有の歴史と文化に根ざすものであって独自の発展はあっても消滅するものではない、としたのであった』⁵⁰。帝国議会の主張は正しく『南方紀行』における「私」が認識した「台湾人とは台湾籍たる支那人だ」という概念と一致している。とはいえ、蔣渭水の「台湾議會請願ノ出現セント同時ニ台湾人ノ人格ガ生レタリ」⁵¹という言説の如く、台湾議會設置運動が行われたというのも、「本島人」は自分が〈台湾人〉と意識してきたからであった。つまり、漢民族固有の歴史と文化などとは関係があるかどうかは別にして、「〈台湾人〉としての覚醒」こそ、「台湾議會設置運動」の成因だと思われる。それも〈台湾人〉としてのアイデンティティーが徐々に脚光を浴びてきたことが表示されて

⁴⁹ 台湾雑誌社編(1923)『台湾』第四年第一号、台湾雑誌社、p.28-29

⁵⁰ 同注 32、p.68

⁵¹ 台湾総督府編(1922)『台湾人ノ台湾議會設置運動ト思想 後編』、台湾総督府、p.25

いる。



3. 「殖民地の旅」における「本島人アイデンティティー」

「殖民地の旅」に関する最初の論説と言え、河原功（1997）の「佐藤春夫『殖民地の旅』の真相」という論述が挙げられる。その中で、河原氏はまず「殖民地の旅」の発表沿革に疑問を持ち、最後に自分の推測を述べた。さらに、作中人物や物事について考証を行い、分析してから、各登場人物の被植民者姿を下記のようにいくつかのタイプに分類した⁵²。

時代迎合型：A 君すなわち許文葵

消極的抵抗型Ⅰ：洪棄生

未来志向型：洪炎秋

消極的抵抗型Ⅱ：鄭貽林

消極的時代迎合型：豊原の画家およびその甥

積極的抵抗型：林猷堂

河原氏は以上のような人物タイプの分類を春夫の「緻密な計算」⁵³と主張した。そして、邱若山（2002）は河原氏の説を踏まえ、「殖民地の旅」の人物像のタイプを表で再整理し、以下のように示している。

⁵² 河原功(1997)「佐藤春夫『殖民地の旅』の真相」『台湾新文学の展開—日本文学との接点』、研文出版、p.17-18

⁵³ 同注 52、p.18

表3 「殖民地の旅」人物像のタイプ⁵⁴

	時代迎合型(順應型)		抵抗型		未来志向型
	消極的	積極的	消極的	積極的	
(日本人に対する態度)	(つきあう)	(つきあう)	(つきあわない)	(つきあう)	(つきあう)
(老年)	畫家 (呂汝濤)	(鄭貽林)	I洪棄生 II鄭貽林	林獻堂	(林獻堂)
(青年)	畫家之侄 (呂汝濤)の侄	A 君許文葵			詩人の子洪炎秋 (林垂拱)(林攀龍) (林猷龍)

河原氏の分類と違い、邱氏の分類では、登場人物全員を相応なタイプに類別した。例えば、河原氏が挙げられなかった林垂拱と林攀龍と林猷龍が「未来志向型」に属すると定義した。また、表2では最も明らかに示したのは青年層に抵抗型の人物がいないのに対し、老年層に抵抗型以外の人物が殆どいないということである。それでは、彼等がそれぞれどのように自分のアイデンティティーを意識して表すのであろうか。

明治28年(1895)、下関条約が締結された以前、積極的な統治行為と言えないが、台湾は確か清に治められていた。ということで、領台当初、台湾社会が清への帰属意識はまだ濃厚であり、一連の抗日運動が激烈的に起こり、総督府の施政がうまくできなかった。もちろん「本島人」の意識上のみならず、街並みにもよく「支那風」が見られる。「殖民地の旅」で描写されている大正9年(1920)にも、A君が自分の出身地である鹿港を「今なほ内地人の蹂躪から完全に身を守り得てゐる真の台湾、——否支那、現代の支那本土よりも更に支那的気分の濃密な市街」⁵⁵と説いている。それに、語り手も鹿港の街並みに対して、「それがこの地では異国的な、わけても僕が愛好する国たる支那の情緒を持つて一種むさくろ

⁵⁴ 邱若山(2002)『「殖民地の旅」をめぐって——『支那論』を越えたもの——』『佐藤春夫台湾旅行関係作品研究』、致良出版社、p.232

⁵⁵ 初出は1932年の「殖民地の旅」であるが、本論文は下記の単行本から引用した。
佐藤春夫(2000)『殖民地の旅』『定本佐藤春夫全集』第27巻、臨川書店、p.72

しい美しさ、朽ちかかった懐しさに街全体が包まれてゐるのであつた」⁵⁶と述べている。つまり、15 年経っても台湾（鹿港）の市街に「支那風」が依然として濃く残されているということである。また、「わが支那遊記」にも、台湾島で感じられた「支那情緒」を述べている。

支那で見たものよりも台湾で見た支那、たとえばあの頃の鹿港の町だの打狗^オの旗後だの、その他山間の本島人部落などに本当の支那の田舎が支那のどの地方よりも多く見られたような気がする。その筈で、台湾の本島人は本来支那の田舎の人が旧慣をよく保守していたのだから、刻々に西欧化した支那本土のどの田舎よりも支那の田舎のふるい面影を伝えていたわけなのであろう⁵⁷。

このように、当時佐藤春夫が見た台湾は「支那風」が濃く漂っている所と考えられる。一方、佐藤が見た台湾の人々はどのように自分のアイデンティティを意識しているのか。次に、「殖民地の旅」に「本島人」に関する描写を取り上げ、彼らのアイデンティティを分析していきたい。

まず、作中に登場した父子関係を持っている「洪棄生」と「洪炎秋」という人物を挙げよう。鹿港の媽祖廟へ行く途中、語り手である「私」の案内者としての A 君は「私」に洪棄生について次のように語っている。

今では支那の苦力にも稀な弁髪を依然として蓄へてそればかりか袖幅の広い旧式な衣服をつけて大きな扇子を持つてゐます。この人日本の領地になつてからの台湾大きらひ、現代の支那も大きらひ「俺は日本人でもなければ

⁵⁶ 同注 55、p.73

⁵⁷ 初出は 1943 年の「わが支那遊記」であるが、本論文は下記の単行本から引用した。
佐藤春夫(2021)「わが支那遊記」『佐藤春夫中国見聞録 星/南方紀行』、中央公論、p.257

今日の支那人でもない清朝の遺臣だ」と言っているのですからね⁵⁸。

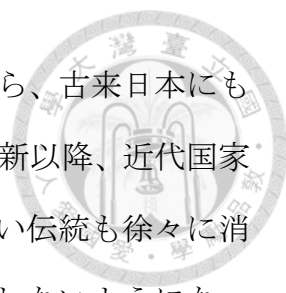
洪棄生はかつての清朝の秀才であったからこそ、その時点の「支那」ではなく、昔の「支那」いわゆる清朝の時代にまだ未練を残っている。彼は「清の民」と自称している。しかし、彼の息子の洪炎秋の考えは父親と大きく違った。洪炎秋が非常に日本を好み、彼にとって、日本とは新思想に富んでいる国である。内地で教育を受けることに憧れ、父親の許可を得ないまま、自分で密かに東京へ行くこともあった。このような状況は、当時台湾において「日台共学」が不可能であったことに起因し、日本に留学して知識を習得し、帰郷後に「本島」で新興知識人としての立場を築くという過程とも密接な関係がある。そして、このような父子関係が当時の台湾社会の世相を十分に反映できると考えられる。父は老年層の代表であり、子は青年層として日本に嫌悪の念をそれ程抱かないのである。そうすれば、前述に挙げた邱氏の作成した表で示される通り、この作品には抵抗型の青年がいないのである。

ところで、日本人の「私」は「支那」のことをどのように考えているのか。画家の家に訪問する時、「私」は柱に掛けている特色のある絵に目が引かれた。それは鄭板橋の作画を模写した絵であった。それを見た後、「私」は「一体に我我の所謂雅味に比べると支那人の好みはもつと無邪気に派手で好奇的な興味のものを喜ぶ傾向のあるのは国民性の相違とでもいふべきものであらう」⁵⁹と評価を与えた。そもそも芸術の鑑賞は個人的な好みによるものであるが、「私」はその絵に対する好悪の相違を「国民性の相違」に帰したのである。

一方、画家の家を訪れた時も霧峰林家を訪れた時も、「私」はある事を察した。それは「本家」という概念の存在である。「私」の話によれば、「本家」とは「古

⁵⁸ 同注 55、p.74

⁵⁹ 同注 55、p.83



来大家族主義を奉じてゐる支那の習慣」⁶⁰である。しかしながら、古来日本にもこの「本家」制度がある。日本の場合では、十九世紀の明治維新以降、近代国家の行列へ歩いていき、新たな思想が導入されたから、若干の古い伝統も徐々に消えていった。「本家」の概念もその一つであり、人々に重視されなくなった。このように、既に近代化社会に入った日本人の「私」がわざと「本家」を「支那」の習慣と解き明かしたのは、近代の新思想を持つ日本人と「支那」の旧思想を持つ「本島人」との違いを強調したい意図が読み取れる。

上述のように、「殖民地の旅」で描写された 1920 年の台湾における「内地人」と「支那」の影響に残されていた「本島人」の間には「文化的ズレ」の存在したことが分かった。それでは、その直後の一連の「本島人」による民族運動は「支那」に対する帰属意識によって喚起されたものであろうか。

黄俊傑（2007）は日本統治時代の台湾での「台湾意識」を「民族意識として現れた」と「階級意識として現れた」という二つの姿に分けている⁶¹。黄氏は前者について下記のように説明している。

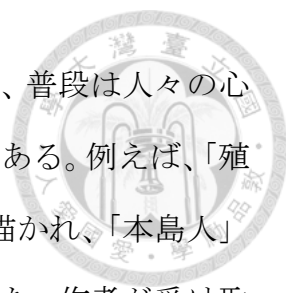
日本統治時代において、統治者は日本人であり、被統治者は広い意味での台湾人（漢人）および原住民であった。そのため、日本統治時代における、いわゆる「台湾意識」の重要な一面はすなわち「民族意識」である。

日本統治時代の台湾において、民族意識としての「台湾意識」は、台湾人の文化生活の多方面にわたって顕在化していた。そのうち最も顕著なものは漢文家塾と詩社であった⁶²。

⁶⁰ 同注 55、p.92

⁶¹ 黄俊傑著・臼井進訳(2008)『『台湾意識』の発展およびその特質』『台湾意識と台湾文化——台湾におけるアイデンティティの歴史的変遷』、東方書店、p.12

⁶² 同注 61、p.12



「民族意識」はすなわち一民族の文化の根にあるものであり、普段は人々の心底に潜んでいるが、彼らの日常生活の中に顕在化しているのである。例えば、「殖民地の旅」には、鹿港は濃厚な「支那」風格を有する町として描かれ、「本島人」画家の家には清朝の文人・鄭板橋の模写が掛けられていた。また、作者が受け取った洪棄生による漢詩集『寄鶴齋詩讐』や、さらには政治的色彩を帯びた「林熊徴」においても、その家族が依然として「本家」觀念という「支那」の旧習を奉じていたことが確認できる。これらの事例は、民族意識が民族文化の根源として機能し、それが「本島人」の生活の隅々にまで深く根付いていたことを十分に示している。それに対し、黄氏はまた「階級意識として現れた」のに対して次のように述べている。

いわゆる「階級意識としての台湾意識」とは、絶対多数の台湾人は、日本植民者との相対的な政治経済の脈絡において、みな被支配者階級であり、日本人は植民者の地位によって支配階級を構成していたということを指している。そのため、日本統治時代の台湾人の民族運動と階級運動は重複性を持つこととなった⁶³。

「階級意識としての台湾意識」という脈絡の下に、日本人は支配者階級として、大きな権力を把握していたのに対し、被支配者階級としての「本島人」はただ僅かなところに僅かなメリットが獲得できるのであった。むしろ、支配者に圧制された場合の方がより多く当時の社会に存在していたのである。したがって、「文化上の『民族的矛盾』と政治経済上の『階級的矛盾』は、日本統治時代の台湾では表裏一体であった」⁶⁴ということも称されている。つまり、「本島人」と「内地人」の間には文化の違いだけでなく、経済的な不平等や社会的地位の差もあり、

⁶³ 同注 61、p.18

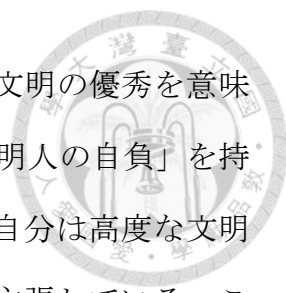
⁶⁴ 同注 61、p.18

これらが重なって複雑な問題を引き起こしており、寧ろその「民族的矛盾」によって「階級的矛盾」が生じていったこともよくあるのである。それで、そのような社会状況のもとで、当時台湾社会に存在している一部分の人が崛起してきた。林献堂はまさにその中心人物の一人である。

「殖民地の旅」にはよく論じられている一節は、語り手である「私」(＝佐藤春夫)と台中の名望である「林熊徴」と植民地台湾の現状に着目して対談している場面である。歴史上では林熊徴⁶⁵という人が確かに実在したことがあるが、河原功の説によると、作品での他の登場人物や全作品の文脈から推定すれば、この作品の中での「林熊徴」は前述の林熊徴ではなく、もう一人の「本島人」の林献堂のことを指しているわけである。そして、まずは、旅行の目的、感想、風景や交通問題などを二人は雑談した。殆ど「林熊徴」から質問し、「私」が自分の用語の適否をよく斟酌して返事した。そして、「林熊徴」は突然蕃情不穏という問題を提起するのに対し、「私」は自分が政治について知識を欠くことにかこつけ、「蕃情」の問題を敬遠した。そこから、幾つかの鋭い話題が展開されつづけ、「林熊徴」は総督府の統治政策に対する猜疑や不満を明言した。その理由としては、歴代台湾総督の統治方針の「揺らぎ」である。したがって、「同化」政策をどのように解釈するのかという問題が浮かび上がってきた。

前述で述べたように、「漸進的内地延長主義」を基にし、総督府が主張した「同化」とは、「本島人」を漸く「内地人」に同化させるという意味に違いない。しかし、林献堂をはじめとして、「本島人」はそのようなことに異議を唱えた。「林熊徴」は、「本島人に向かつて内地人に同化せよと強要するならばこれは本島人

⁶⁵ 林熊徴は、台湾の豪商、日本の台湾領有時代中期、板橋林家の代表者、林本源製糖合名会社を設立 [1909]、岳父の盛宣懷が最高責任者であった漢冶萍(かんやひょう)煤鉄公司では董事となった。華南銀行では総理を務めたほか、公職では台北庁参事、台北州協議会員などを歴任し、少数の台湾籍の総督府評議会議員の一人でもあった。(後略)
"りんゆうちょう【林熊徴】(Lín Xióngzhēng)"、岩波 世界人名大辞典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com/>、(参照 2024-08-18)



は容易に認め得ない」⁶⁶と述べ、「政治的地位の優越必ずしも文明の優秀を意味するや」⁶⁷と唱え、それが「本島人」たちがずっと以前に「文明人の自負」を持っており、しかも台湾に渡ってきた一般の官吏や商人よりも自分は高度な文明を身につけているという強い自負を持っているためであると主張している。この一文からはっきり見られるのは、「林熊徴」が「内地人」と「本島人」を有意に分け、そこから「本島人」の民族意識が窺えると考えられる。

一方、実は A 君が自分の言説にも植民者に対する批判を加えたことが窺える。例えば、領台当初の時に日本軍が匪乱を鎮定した記念碑を批判したことを通じ、日本の統治に反抗する態度を示した。それに、胡蘆屯を豊原に改称したことに對しても「役人共の猿智慧」⁶⁸と日本政府側を風刺し、豊原に改称したことが「土民の被征服的感情を唆」った⁶⁹と主張した。A 君は植民者の日本人にも不満を持っていたが、現実には日本人に頼って生計を立てなければならなかった人物に描写された。ということで、A 君は民族意識を持ちながら、生活を営むために抵抗できなくなり、「時代迎合型」に属している。それに対し、「抵抗型」の「林熊徴」は台中の名望であり、「地主資産階級」とも言われる。言い換えれば、彼は地方社会に多大な影響力を持っている故、他の「本島人」と違い、総督府にそれ程畏敬する必要がない。だからこそ、「本島人」を持っているはずの権利を求めていくために、実際に林献堂は 1921 年 1 月 30 日に、第四四帝国議会に「立法権（律令制定権）」と台湾予算への「協賛権」を持つ台湾議会の創設を求める請願を提出したのである。

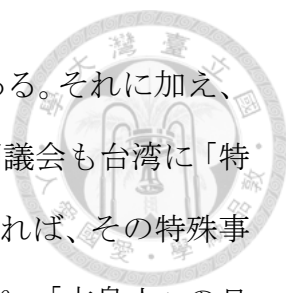
ところで、テキストには描写されていないが、しかしそこからもう一つ興味深いことは、「本島人」に民族自決の風潮を呼び起こしたアイデンティティーがどこからなるものなのか、という問題である。前述で言った通り、1920 年の台湾、

⁶⁶ 同注 55、p.97

⁶⁷ 同注 55、p.97

⁶⁸ 同注 55、p.78

⁶⁹ 同注 55、p.78



「本島人」の生活の中にはまだ「支那」の影響が残されたのである。それに加え、公式な場合としても、例えば請願運動を進めている過程に帝国議会も台湾に「特殊事情」が存在したと主張したことがあり、若林氏の考えによれば、その特殊事情とは「漢族固有の歴史と文化に根ざすもの」⁷⁰である。つまり、「本島人」の日常生活にも、総督府側の所見においても、当時の台湾は確かに「支那」に多く影響されたのである。とはいえ、「支那」に関係があるかどうかは別にして、「台湾議会請願運動」に参加した人々にとっては、自分は「内地人」ではなく、自ら〈台湾人〉と意識してきたのである。言い換えれば、「台湾議会請願運動」に導いたのは、漢民族固有の歴史と文化などとはあまり関係なく、「〈台湾人〉としての覚醒」こそ、「台湾議会設置運動」の成因だと思われる。それも当時の「本島人」が〈台湾人〉としてのアイデンティティーが徐々に形成されてきたことを示していると考えられる。

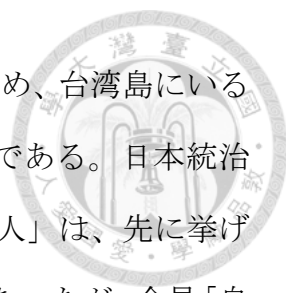
黄氏の論説で、「台湾意識」の核心には「アイデンティティー」問題にあると主張されている。それについて黄氏は次のように論じている。

いわゆる「台湾意識」の内包は複雑であり、少なくとも二つの構成要素からなる。一つは「文化アイデンティティー」と「政治アイデンティティー」の両者の間に不可分性を有している、すなわち「文化アイデンティティー」と「政治アイデンティティー」とが互いに支え合い、分かちがたいものとなっていることである。もう一つは、両者の分かちがたい原因が、華人社会における国家アイデンティティーが歴史解釈を通して構築していることにあることである⁷¹。

引用の通り、「台湾意識」には常に「文化アイデンティティー」と「政治アイ

⁷⁰ 同注 32、p.68

⁷¹ 黄俊傑著・臼井進訳(2008)『『台湾意識』における『文化アイデンティティー』と『政治アイデンティティー』との関係』『台湾意識と台湾文化——台湾におけるアイデンティティーの歴史的変遷』、東方書店、p.47-48

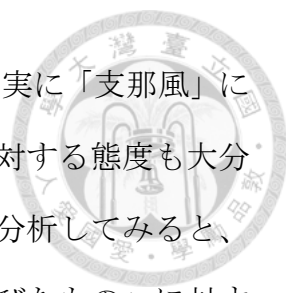


デンティティー」が混淆している傾向があるのである。そのため、台湾島にいる人々のアイデンティティーを判断するのはとても困難なことである。日本統治時代の台湾もそうであった。「殖民地の旅」に登場する「本島人」は、先に挙げられた河原氏と邱氏の「本島人」の人物像分類に様々な類型があったが、全員「自分が日本人ではない」というアイデンティティを持っているのである。但し、個人的な外部或いは内部からの要素が存在することによって、民族意識の現れの程度も違っている。少なくとも、1930年代に創作された「殖民地の旅」という作品には、二つの異なるアイデンティティーが描写されていると見られる。一つは自分を「支那人」（清朝の人）としたのであり、もう一つは自らを「内地人」と区別するために生まれた〈台湾人〉とした、言わば自分が「日本人」と「支那人」（清朝の人）でもないアイデンティティーである。それも佐藤春夫が、台湾ものを通じて伝えたいことであると考えられる。

第4節 おわりに

本章では、「女誠扇綺譚」と「殖民地の旅」における「本島人」のアイデンティティーについて考察してきた。まず、支那旅行をもとに書かれた『南方紀行』の分析を通し、佐藤春夫が「支那人」と「本島人」をどのように定義し、描写したかを考察している。彼の視点から、「本島人」が「台湾籍民たる支那人」として位置づけられ、「本島人」と「内地人」との根本的な差異が示されているということである。

次は、佐藤春夫の作品「女誠扇綺譚」と「殖民地の旅」に描かれる「本島人」のアイデンティティーに注目している。「女誠扇綺譚」では、「荒廃の美」として描かれる台南の風景には実は「支那趣味」の溢れていることが分かった。また、「殖民地の旅」では、鹿港の街並みや老年層「本島人」などの所々から「支那」が残っている痕跡も見られる。むしろ「支那」本土よりも「支那」に似ていると



言える。つまり、当時の台湾の街風景を観察することにより、実に「支那風」に残っていることが見られるということである。そこで、日本に対する態度も大分「抵抗」になっている。そして、両作品での「本島人」の言説を分析してみると、「女誠扇綺譚」には、語り手の「私」と世外民が「荒廢」「亡びたもの」に対する異なる解釈を通じ、植民地支配の文脈での歴史観の違いや、それに伴う「台湾ナショナリズム」の芽生えが分かったのである。また、「本島人」が「内地人」に嫁することを嫌ったという問題も「台湾ナショナリズム」の現れによるものである。

最後に、1920年代の時代背景を考察した結果、総督府は「漸進的内地延長主義」を推進したが、知識人達はそれを認めていなかったため、「台湾議会設置運動」が展開された。「殖民地の旅」における「私」と「林熊徴」との対話により、1920年に「内地人」と「本島人」の間には「文化的ズレ」の存在したのみならず、「本島人」の民族意識の台頭は、「支那」所謂漢民族固有の歴史や文化に由来するものというよりも、むしろ〈台湾人〉としての意識で駆動していくことが明らかになった。このように、佐藤春夫の台湾ものには当時の「本島人」に主に二つの異なるアイデンティティーが描写されたと窺える。一つは自分を「支那人」（清朝の人）としたアイデンティティーであり、もう一つは自らを「内地人」と区別するために生まれた〈台湾人〉とした、言わば自分が「日本人」と「支那人」（清朝の人）でもないアイデンティティーであると結論づけられる。

第2章 佐藤春夫の「蕃人」認識から見る「蕃人」のアイデンティティー



第1節 はじめに

佐藤春夫の台湾ものには、「蕃人」が提起された作品という、「日月潭に遊ぶ記」と「霧社」という両作品がよく挙げられる。

「日月潭に遊ぶ記」は佐藤春夫が台湾の名勝である日月潭を訪ねた経験に基づいて書いた紀行文である。台湾南部の観光を終えた佐藤春夫は、南方より北上し、二八水（現二水）にて支線列車に乗り換え、集々へと向かった。なお、当初予定されていた阿里山への訪問は、台風による道路の損壊により余儀なく中止された。その代わり、彼は日月潭を訪れることとなった。「かの一夏の記」では、「霧社の蕃人蜂起の事を聞いて、前程にまた新らしい障害の生じたのを知り、この蕃情を知るために予定外の日を日月潭で宿泊する事になった」¹と記されており、佐藤はこの旅において、「蕃人」と直接対面する機会を得ることとなった。作品中、彼は「蕃人」が見物客のために踊る様子や、同行者の一人が「蕃人」の女性に戯れを働いた場面を描写している。それに加えて、今回の旅が大きな支障なく進んだことについても、佐藤は総督府の統治が山地にまで及び、「蕃地」がすでに「王土」となったからであるという背景を明言している。

一方、上述の「蕃情」について、まさに「霧社」で描写された「サマオ事件」である。「霧社」とは佐藤春夫が大正14年（1925）に書かれた作品であり、彼が能高山まで登り、霧社に到着した過程が記録されているものである。語り手は、多くの「蕃人」と直接的に接触する中で、「蕃人教化」や「内台結婚」といった植民地政策の現場を目の当たりにし、そうした経験を作品の中に取り込んでい

¹ 初出は1936年の『霧社』であるが、本論文は下記の単行本から引用した。
佐藤春夫(1999)「かの一夏の記——とぢめがきに代へて——」『定本 佐藤春夫全集』第21巻、臨川書店、p.227

る。また、作中で描かれる「蕃地」の実情や「蕃情」不穏さの背後には、「蕃人」たちが「理蕃政策」の下で異なる立場に置かれ、それぞれ異なる運命を辿ったという事実があると考えられる。こうした差異は、結果として、それぞれの集団における民族的なアイデンティティの形成にも違いをもたらしたのである。

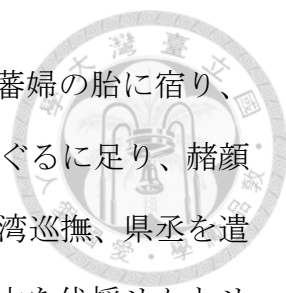
本章では、「日月潭に遊ぶ記」と「霧社」という二つのテキストを分析することによって、佐藤春夫が「他者」として、「蕃人」をどのように描いたのかを明らかにする。あわせて、その描写を通じて浮かび上がる「蕃人」のアイデンティティが、植民地状況の中でどのように形成され、揺れ動いているのかを検討したい。

第2節 「日月潭に遊ぶ記」における「蕃人」描写

日月潭の水社へ行く途中、水社から来てくれた事務所の監督は清光緒13年に立てられた「化及蛮貊」という字を刻んだ石を提起し、その辺の道がわざと高いところにつけたのは、「蕃人の侵撃にそなへたのです」²と言った。さらに、語り手一行が舟で水社の「蕃社」に向かう途中、湖に楠の木が植えられた浮島「珠仔山」を目にした。この珠仔山もまた、「蕃人」との深い関わりを有している。その関わりについては、『台湾名勝旧蹟誌』に以下のように述べている。

——相伝ふ、水社化蕃は今を去る百三十余年前、嘉義大埔の蕃人四十余名、巒大山に猟し、一頭の白鹿を追躡して西北に走り、水社大山に至りて踪跡を失し、彷徨三日、偶々此の大湖を発見し、以て天与の楽土と為し、一旦帰社して酋長に情報し、一部は直に此に移住を決行せるなりと。蕃社また神秘的口碑を伝ふ。今より二百年前、水社湖の東北南に巨大なる茄苳樹一タにして発生し、周囲二丈余、根は十二尺の水底に蟠り、梢は三十尺の大空に拡がり

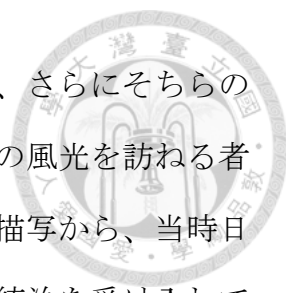
² 初出は1921年の「日月潭に遊ぶの記」であるが、本論文は下記の単行本から引用した。
佐藤春夫(2000)「日月潭に遊ぶ記」『定本 佐藤春夫全集』第27巻、臨川書店、p.7



しかば、蕃人は神木と称して刀斧を加へず。この神木の精、蕃婦の胎に宿り、一男生る。生れながらにして身長九尺に余り、膂力鉤を曲ぐるに足り、赭顔多髯にして、状貌魁偉なり。衆推して蕃王となす。時の台湾巡撫、県丞を遣はして真否を探り、尋で兵を派して附近に屯在し、先づ神木を伐採せんとせしも刀鋸立たず。巡撫大に異とし、一日茶菓を供へて上天に謝し、且つ神功を祈りしに其夜夢に「茄苳の大木は、天地日月の精霊を享け、一夕、湖中に生ぜしも実は既に千年の劫を経たるものなれば漫に兵を用ひ、斧鉞を加ふるも何の効かあらん。唯針を樹皮に刺して黒犬の血を塗るは、大木の忌む所なれば、斯くて後、鋸をもつて断つべし」との託宣あり。乃ち霊夢の如くせしに果して驗あり。木忽ちにして倒ると共に、蕃王は湖に投じて死せりと。云々³。

上記のように、「水社化蕃」の起源譚として、白鹿を追って大埔から移動した獵師たちが偶然日月潭を発見し、「天与の楽土」と見なして移住を果たしたという語りから始まる。ここでは「白鹿」というモチーフが重要である。白鹿は東アジアにおいて神聖・吉祥の象徴であり、偶然の発見と楽土への導きを結びつける導き手として機能している。この伝承は、自然との一体性と運命的な移動を強調し、「蕃人」の土地への帰属意識を示しているようにも見えるが、それと同時に自然の神秘性に従属する存在として「蕃人」を位置づける視線でもある。また後半では、水社湖周辺に「一夜にして」出現した神木（茄苳樹）と、それに宿った精霊が「蕃王」を生み出すという、より神話的な口碑が語られる。そして、語り手の叙述では、その「蕃王」が清の雍正年間に、清の統治に対して頑強な対抗を試みて撃殺されたのである。ところが、それは既に昔のことである。当時の「理蕃政策」のもとで、語り手の話によると、水社の「蕃社」は「今、このあたりの

³ 同注2、p.10



地は蕃界に隣してはゐるけれども、既に王土のうち」⁴になり、さらにそちらの「蕃人」達は「白鹿を逐ふてここに移住した化蕃は我々——この風光を訪ねる者の座興を助けて土産の酒を楽しむのである」⁵になった。この描写から、当時日月潭の水社に居住していた「蕃人」が、既に「内地人」による統治を受け入れており、しかも「内地人」観光客の座興として、卑しめ見下す一群であることが示唆される。

語り手一行が「蕃社」に到着したら、彼らを出迎えに出て来た人を外見から判断すると、60歳前後であると推定される白髪の区長であった。その区長は「蕃人」であるが、当時の水社は既に「蕃地」ではないため、彼のことを「頭目」と呼ばないのである。

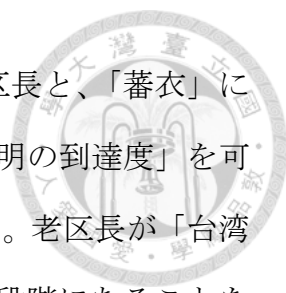
老区長の命令があったと見えて、四五人の女が出て来た。二三人の子供が物珍らしさうに小屋から出て我々を見つめる。女達は手に手に七八尺もある長い棒をもつてゐる。それは杵である。老区長は木綿縞の西洋風のシャツを着てゐたが、女たちは蕃衣を着てゐる。老区長は自分でいろいろの腰かけ、竹で出来たのやら木で出来たのやらを持ち出して我々に勧める。舟を漕いで来た若い工夫が何か老区長に言ひかけると、彼も何か答へた。言葉は解らないが何でも蕃語ではなく台湾語——即ち厦門地方の支那方言——を使つたらしい⁶。

ここでは、当時の水社における「蕃人」の生活様式が明確に読み取れる。まず、出迎える女性たちと子どもたちは、「物珍らしさうに」客人を見るという描写から、彼らが内地からの旅行者の訪れを物珍しく感じていたことが読み取れる。ま

⁴ 同注2、p.10

⁵ 同注2、p.10

⁶ 同注2、p.11



た、服装や労働道具の記述によって、西洋風シャツを着る老区長と、「蕃衣」に身を包む女性たちの対比は、単なる事実の描写ではなく、「文明の到達度」を可視化する方法である。さらに注目すべきは、言語の使用である。老区長が「台湾語」を話すという描写は、彼がすでに「本島人」に同化された段階にあることを示唆し、「台湾語」と「蕃語」との差異が言外に文化的優劣を形成していることを示している。ここで言語は、植民地的秩序の一部として機能している。当時の台湾社会においては、誰が「支配的な言語」を話すかによって、その人の社会的地位が判断される傾向がある。言い換えれば、社会的地位が水社にいる他の「蕃人」より高い老区長は支配者と意思疎通を図るために、彼らの使う言語を学ばなければならなかったのである。

一方、「蕃人」たちは自分たちの伝統的な行事を行いながら、一方で日本語の歌を歌っていた。杵を持った女性たちは自分の声で歌い始めるのと共に、手に持った杵で庭先に埋めてある石の面を搗いている。運輸屋の主人はそれについて、「近ごろでは杵に合せて、七つ八つからいろはを覚えなんて歌ひ出すから参りますよ」⁷と言った。この「七つ八つからいろは」という表現は、江戸末期から明治期にかけて流行した俗曲「都々逸」の一節に起源を持つものである⁸。「都々逸」とは7・7・7・5の音数律に従い、主として男女の恋愛を題材として扱ったものである。また、「いろは」とは物事の初めや基本という意味を持つと言われている⁹。初等教育における第一歩でもある。つまり、「七つ八つ」（小学校低学年）で「いろは」を覚えることは、国語（＝日本語）教育の始まりを示している。台湾総督府の下で進められた国語政策の一環として、「蕃人」の子供にも日本語

⁷ 同注2、p.11

⁸ 山近弥壮(1972)『筑豊の民謡』、『筑豊の民謡』刊行会、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/12501367> (参照 2025-04-27)、p.65

⁹ 「いろはうた（以呂波歌）」を習字の始めにならうことから）物事、特にけいこ事の初歩。物事の習い始め。入門的で平易な事柄。

"いろは【以呂波・伊呂波】"、日本国語大辞典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com>、(参照 2025-04-27)

教育が施され始めた様子が、ここに反映されている。それに、この発言には、「蕃人」が自分の伝統行事に日本語を入れたことへのある種の皮肉が込められている。

杵を搗いているうちに、畑で仕事をしていた男女があちらこちらから「蕃社」に帰ってきた。彼らは語り手一行の来訪に気づき、そのために後ほど上演する予定だった芝屋を前倒しして演出することに決めた。若い工夫が芝屋に対して、「芝屋、芝屋といつてはゐますがただ手をつないで踊ることです」¹⁰と説明し、さらに、その芝屋を演じるために、着装が必要であると言った。芝屋の演出に関して佐藤は下記のように描写している。

「皆で祭の着物を着てくる。その方がいい。待つてゐてくれ」と言つたのださうだ。果して、皆がそれぞれに赤い盛装をして来た。男は陣羽織のやうな形の上衣を、女は腰には裙をつけて、胴にはやつと乳の上までしかない短衣を着てゐる。男のには袖はないが、女のには狭い長い洋服のやうな袖がついてゐる。これは支那で男の着る馬褂といふものに似てゐる。それが短いから裙と胴衣との間から栗色の膚が隙いて見える。

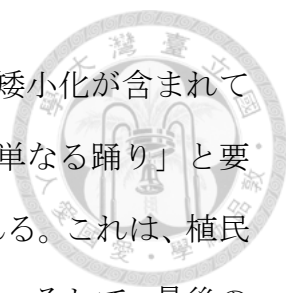
(中略)

さつき、祭の着物を着て来ると言つた若者は、いそいそと出て来たが、蕃衣の下に西洋風のシャツを着込んで、家柄の者と見えて胸に勲章のやうに丸い貝がらをつけてゐた¹¹。

以上の文章全体に漂っているのは、他者を「見る」まなざしです。「蕃人」の生活は「見世物」のように描かれ、祭の衣装や踊りが「客（＝内地人）」の訪問によって特別に演出される。例を挙げれば、「芝屋、芝屋といつてはゐますがた

¹⁰ 同注 2、p.11

¹¹ 同注 2、p.11-12



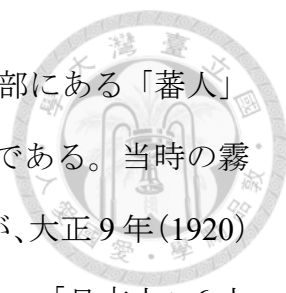
だ手をつないで踊ることです」という工夫の説明には、文化の矮小化が含まれている。彼の説明を通じて、「自分がよくわからない風習」を「単なる踊り」と要約され、文化の本質的意味は解釈されずに外観だけが提示される。これは、植民地の民俗を表層で観察・記録する民族誌的姿勢と共通している。そして、最後の部分では、「さつき祭の着物を着て来ると言った若者」が、伝統衣装の下に西洋風のシャツを着て、さらに「胸に貝殻のような勲章」をつけて登場する。これは植民地近代性の典型的な表象である。「蕃人」はもはや純粋な他者ではなく、伝統を保ち続けながらも、植民地支配者（日本）に部分的に同化された存在として描かれている。

「日月潭に遊ぶ記」において佐藤春夫は、外部からの観察者として台湾の原住民、すなわち「蕃人」を描写し、その生活様式・衣装・身体性・儀礼的行動を異文化的魅力と神秘性を帯びた存在として表象している。しかしその描写は、単なる異文化理解の試みではなく、明確な植民地主義的視線に貫かれている点に注目すべきである。とりわけ、祭礼や踊りといった文化的営為が「見世物」として演出され、「内地人」客人をもてなす装置として機能している点は、民俗の他者化と文化の消費という植民地的構造を如実に表している。一方で、伝統衣装と西洋風のシャツを併用する若者の姿に見られるように、「蕃人」は決して静的な存在ではなく、植民地近代の中で変容しつつある複雑な主体として描かれている。このような「蕃人」像により、佐藤は「日月潭に遊ぶ記」を通じて、「蕃人」のアイデンティティを提示する一方で、その内部における揺らぎや混交性も同時に露呈させている。

第3節 「霧社」における「蕃人」描写

1. 「蕃人」像について

1.1 「文明病」に罹る「蕃丁」



「霧社」は、大正9年(1920)に佐藤春夫が台湾中部の山間部にある「蕃人」が住んでいる地域である霧社を訪れた際の印象を記した作品である。当時の霧社は台湾総督府の「理蕃政策」のモデルとされていた所であるが、大正9年(1920)9月18日に、霧社の奥地に住んでいる「サラマオ蕃」が蜂起し、「日本人」6人および「本島人」1人を殺害する¹²という「サラマオ事件」が勃発した。佐藤は集々街で最初にその噂を聞き、日月潭を遊覧した後、少し戸惑いはあったものの、「蕃界の山川と蕃人の生活とをほんの一瞥ではあるが兎も角も見る志」¹³を抱き、最終的には霧社に登ってみることにした。霧社へ向かう途中、語り手一行は麓の掛茶屋でひと休みし、「サラマオの日本人は盡殺した。合せて七人」¹⁴という店の女房の語りを通じて、「サラマオ事件」に関する噂の内容がより明確になった。しかし、語り手が最も気になったのは「日本人は皆殺」という言葉遣いである。その言葉遣いについて、語り手は「理智的に厳密に言へば『内地人が皆殺』でなければならない。さう呼ぶやうに統治者も教へてはゐるのである」と言った。植民地台湾で「内地人」「本島人」「蕃人」のような地位の尊卑を代表する呼び方を強調するのは、語り手の植民者としての優越感が読み取れるのである。

それから、語り手が「霧社」へ向かう山道で出会った「蕃人」の様子を以下のように描写している。

みな、あの麓の茶屋の前にある荷物を運ぶために来たのだ。みな蕃衣を纏うて、頭は蓬々と生えてゐるのに、なかに偶ひとり、帽子を戴いたものがある。軍帽の形をした内地では車夫のよく用ゐてゐるものである。この男はその帽子の下を短く散髪してある。さうしてもう一つ人目をひく事には、この

¹² 邱若山(2002)「『霧社』について——文学作品と歴史記述の間——」『佐藤春夫台湾旅行関係作品研究』、致良出版社、p.133

¹³ 初出は1925年の「霧社」であるが、本論文は下記の単行本から引用した。
佐藤春夫(1998)「霧社」『定本 佐藤春夫全集』第5巻、臨川書店、p.119

¹⁴ 同注13、p.120



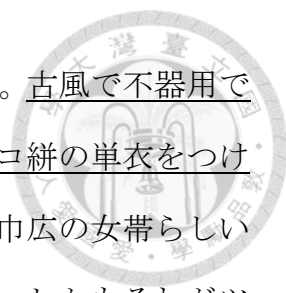
男が文明病に罹つてゐるのはその風采の趣味だけではないと見える。彼の鼻梁は気の毒にも落ちてしまつてゐて、醜い鼻の穴が顔の中心にのさばつてゐる。この蕃地に、しかも蕃人のなかに梅毒患者を発見するのは予にとつて意外である¹⁵。

引用の如く、語り手は「観察者」の立場におり、「蕃人」の風貌・衣服・態度・病状までも詳細に記録している。「蕃衣」「蓬々と生えてゐる」などの描写は、「蕃人」を「文明」から外れた存在＝「他者」として位置づけている。それに対して、一人だけが「内地の車夫のような軍帽」をかぶっているという点が、彼の「文明との接触」を示す象徴的なモチーフとなっている。また、「この蕃地に、しかも蕃人のなかに梅毒患者を発見するのは予にとつて意外である」という叙述からも、語り手は、辺境（＝文明から遠い場所）に「文明病＝梅毒」が存在することに驚いていることが分かった。つまり、梅毒の存在によって、逆にこの「蕃人」が文明に接触した痕跡として解釈されているという構造があり、梅毒が文明の象徴として転倒的に機能している。さらに、語り手とすれ違った時、日本語の「コンチハ」で語り手に挨拶した描写があり、「蕃地」にも「文明」が広がっていたことを暗示している。以上を踏まえて、「内地の帽子」「文明病」「コンチハ」といったモチーフは、「蕃人」が文明に染まりかけた存在として描かれ、純粋な他者としても、完全に同化した存在としても処理しきれない曖昧な存在であることを浮き彫りにしている。

1.2 「内地人」の風俗を身につけた「蕃婦」

前述のような曖昧な存在は霧社に入っても見られる。

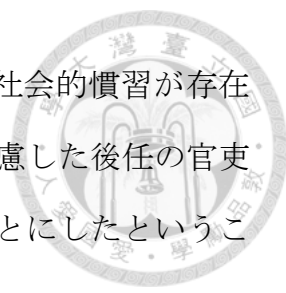
¹⁵ 同注 13、p.122



その蕃丁たちの先頭に立つて、ひとりの奇異な人物がある。古風で不器用ではあるが底髪につかねて、身には内地風に仕立てたニコニコ緋の単衣をつけて、草履をはいてゐる——他の者のやうに裸足ではない。巾広の女帯らしいものを巻いてゐる。男の着物のやうに腰上げもせずに着て、しかもそれがツンツルテンに短い。それはこの人物が異常に背が高いからである。さうして胸を張つて、そのために一種の威風さへ具へて、足や背丈やその姿勢や態度、男に似てはゐるが、一見やはりその風俗のとほり女である。近づいたのを見れば怖ろしくはあるが骨格風貌もとより女で、しかも日本人——内地人の風俗ではあるが蕃婦である。顔には刺青がある。彼女は男にも優る背丈と風俗の異様なこととそれに一同の先頭にあることとで、恰もその一団の蕃丁を指揮してゐるかのやうに見える。事実、予は行き過ぎる時に、彼女が後に従つて来る男どもに大声で何かを言つてゐるのを聞いた。たしかに命令をする人の口調であつた¹⁶。

引用の如く、「蕃丁」たちの先頭には、「内地風」の単衣と草履を身につけた背の高い異様な女性が立っていた。刺青を持ち、男のような姿勢と威圧感を備えつつも、その風貌から「蕃婦」であることがわかる。彼女は集団を率いるかのやうに振る舞い、実際に男たちに命令口調で指示を出していた。その外見から見れば、彼女は「内地」に強く影響されたことが読み取れる。この「蕃婦」は、内地風の外見と「蕃人」の風俗、男性的権威と女性的身体という両極を同時に具えており、語り手の理解・分類を超えた「異様」な他者として表象されている。霧社倶楽部の主人の言説によると、彼女はかつての日本人巡査と婚姻関係を結んだ。しかしその後、夫が他の地域に転任する際、彼女を現地に残したまま立ち去ったという経緯がある。「蕃人」社会においては、一度他民族と婚姻した女性は、いかなる

¹⁶ 同注 13、p.124



事情があっても出生した部落へ戻ることを許されないという社会的慣習が存在する。このような状況を憂慮し、また日本人としての体面も考慮した後任の官吏は、彼女を役所において「蕃語」の通訳的な役割で雇用することにしたということである。

何故「蕃婦」が「内地人」の巡查と結婚できるのかというと、当時の山地における「理蕃政策」の一環として奨励されていた「警蕃結婚」、一種の懐柔策とも言える。河原功（2009）の論説では、上述の「蕃婦」は「一九〇九年に巡查部長近藤儀三郎と結婚したテワス・ルーダオ（マヘボ社頭目モーナ・ルーダオの妹で結婚当時は一六歳）」¹⁷のことであり、さらに「近藤が花蓮港庁へ転勤になった二ヶ月後に勤務中に行方不明となったために、再び霧社に戻っていたのだった」¹⁸と記されている。この事柄があったため、「蕃人」は「内地人」への、特に「内地人」警察官への反感として根付いていたのである。一方、河原氏は「春夫はその女性が内地人の警察官に捨てられたということに対して同情を寄せてはいるものの、野生むき出しの彼女を上目からの視点で眺め、常に一定の距離を保とうとする」¹⁹と論じている。確かに「近づいたのを見れば怖ろしくはある」という叙述から見ればその通りである。

1.3 霧社倶楽部の女中

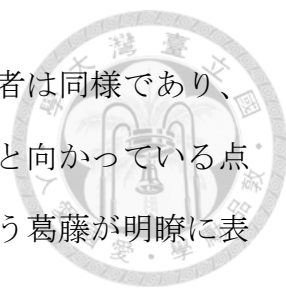
テワスの他に、語り手が泊まっていた所の「蕃人」の女中についての描写からもその「矛盾」が窺える。彼女の衣装に対して、「風俗は蕃衣ではなく支那風のもので——即ち褲と短衣とを纏うてゐる」²⁰と述べている。表面的には、先に述べた「内地人」の装いをしたテワスとは異なり、この女中はむしろ「支那風」の

¹⁷ 河原功(2009)「日本人作家の台湾原住民認識」『翻弄された台湾文学—検閲と抵抗の系譜』、研文出版、p.134

¹⁸ 同注 17、p.134

¹⁹ 同注 17、p.135

²⁰ 同注 13、p.125



服装を身にまとっているように見える。しかし、本質的には両者は同様であり、すでに「蕃人」としての伝統的な風俗から離れ、外来の文化へと向かっている点で共通している。「霧社」の中には、そうした文化的転換に伴う葛藤が明瞭に表れている。

それに加えて、女中が自分自身を「オハナチヤン」と呼ぶと同時に、また「蕃人」と自称した。そして、彼女はまた「日本着物スキダ」と言い、「台湾蕃族誌」に載せた「蕃族」の写真に「バンジン、バンジン」と連呼しながら、不思議そうに繰り返してみた。彼女の矛盾した言動が繰り返される中で、自らのアイデンティティーに対する揺らぎがはっきりと読み取れる。

それに対して、女中が顔の刺青を自分の手で隠した際、語り手は突然彼女にある種の親しみを感じてきた、しかも「予が予の愛犬に対して抱くものに類似してゐた」²¹と言っていた。それについて、フェイ・阮・クリーマン（2007）は「センセーショナルな表現を避け、共感を込めた抑えた語り口を心がけていた佐藤だが、ここでは彼の鷹揚さの限界を考察する。彼が得意とする隠喩の主なもの、植民地支配者と被支配者の間の階層化した『支配と従属』の関係に伴う、内なる優越感を露呈している」²²と主張している。これまで、語り手の植民地支配者の優越感が作品の行間においても読み取ることができる。

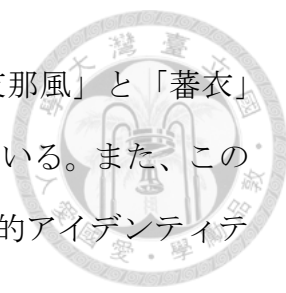
1.4 二人の少女

能高から霧社に戻ってきた後、語り手は鉛筆を買おうと思ったため、また倶楽部を出た。そして突然、一種微妙な音楽が漂ってきた。語り手はその音の来るあたりを見て、二人の少女がいた。彼女たちについて、「ひとりは蕃衣で他のひとりは支那風の着物だつた」²³と描写されている。この場面には、「内地人」、「本島

²¹ 同注 13、p.125

²² フェイ・阮・クリーマン(2007)『『土人』の懐柔』『大日本帝国のクレオール——植民地期台湾の日本語文学』、慶應義塾大学出版会、p.55

²³ 同注 13、p.131-132



人」、「蕃人」という三重の文化・権力構造が潜んでいる。「支那風」と「蕃衣」の対比は、どちらも「内地人」とは異なる他者として描かれている。また、この対比は単なる衣装の違いではなく、植民地台湾における「文化的アイデンティティ」の揺らぎや混交を象徴している。

語り手が少女たちと視線を交わすと、彼女たちが近づいてきて煙草を求めた。煙草をくゆらせながら、彼女の一人は語り手に現在の宿泊先や今後の行き先について問いかけた。最後には、自宅への訪問を語り手に提案するような言葉をかけた。語り手も「蕃人」の家を一瞥することに興味を持つため、彼女たちのあとを追っていった。少女たちの家に近づいたその時、かつて目にした「内地風」の風貌をもつ「蕃婦」が家の中から姿を現した。その様子から、語り手は彼女が二人の少女の母親であると判断し、以下のように述べている。

さう思ふと予は事の全部を理解したやうに思つた。即ち予は、かの少女がそれほど好意を内地人たる予に寄せるといふ事は、かの少女も亦半分は内地人の血を享けてゐるからではないだらうか²⁴。

語り手の考えでは、少女が自分に近づいてきたのは、彼女の中に半分「内地人」の血が流れていたためである。しかしながら、それはあくまで語り手の主観にすぎず、実際に少女がどう感じているかは明らかでない。そのような考えは、「内地人」＝上位の存在、憧れの対象という価値観が前提となっている。語り手が一見「理解」に至ったようであり、実は他者（＝「蕃人」の少女）を真に理解することができず、自らの植民地主義的価値観に基づく自己中心的な解釈に留まっていることを示している。

少女の家は、扉が固く閉め切られ、灯りもほの暗く差すだけであった。語り手

²⁴ 同注 13、p.133

は「怪しさと驚き」を感じて動けなくなってしまった。このようにして、彼らの間に以下のような対話が展開された。



「金アルカ」

「無いよ」

「ウソ」²⁵

このような明確に性的な取引の暗示が展開されることがあったからこそ、語り手は少女が「売春婦」であるという事実徐々に気づくようになった。ところが、少女は突然軍隊の動静、軍人について聞きはじめた。語り手は「予を軍人と思つたらしい」²⁶と思い、それが少女や母親による反乱の準備に繋がるのではないかと妄想する。「軍人」「内地人」「暴動」「償ひ」といった語句からは、支配者であるはずの自分が逆に怯え、立場が逆転する「恐怖」が感じられる。この「恐怖」も、植民者が支配しきれない「他者の空間」で感じる根源的恐怖を表している。さらに、語り手は「文明」と「野蛮」の境界が次第に曖昧になっていくことに気づき始めたことによって、「恐怖」を覚えるようになった。語り手自らの言説を借りれば、「恐怖と誘惑との複雑な交錯からではなかつたらうか」²⁷ということである。そして最終的に、その「恐怖」に耐えきれず、彼はその空間から逃げ出したのである。つまり、少女が半分「内地人」の血を引いていて、どれほど語り手に憧れや好意を抱いていても、語り手の視点から見ると、やはり「他者」として認識せざるを得ない存在と言えよう。

²⁵ 同注 13、p.133

²⁶ 同注 13、p.134

²⁷ 同注 13、p.136

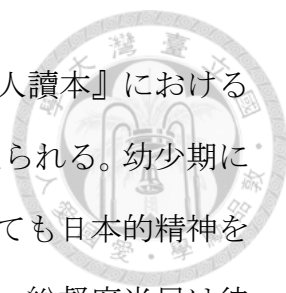
2. 「蕃人」の教育問題について

植民地台湾における「蕃人」に対する初等教育は、その居住地の環境や行政機関の違いによって、二つの教育系統に分かれていた。一つは、普通行政区域に住む「蕃童」は、文教局の管轄する「蕃人公学校」に通っていた。この学校は、明治 38 年以前は「国語伝習所」と呼ばれ、大正 11 年以降には「公学校」と名称が変わった。もう一つは、いわゆる「蕃地」——つまり普通行政区域の外に位置する地域——に居住する「蕃童」は、警務局の管轄する「蕃童教育所」で教育を受けていた。

上述のような二系統の教育制度は、時代とともに変化していく教科書の内容とも深く関わっていた。特に大正 3 年（1914 年）に公布された「蕃人公学校規則」は、「蕃人」に対する教育の再編を示す重要な転機となった。この規則の発布とともに、「蕃童」に向けた新たな教科書の編纂が始まったのである。それ以前の「蕃人公学校」では、「内地人」や「本島人」の児童が使用している教科書をそのまま使っていた。しかし、「蕃人」は人種的、言語的、文化的に「内地人」・「本島人」とは大きく異なる特徴を有していたため、独自の教科書の必要性が認識されるようになった。それで、「蕃人公学校規則」に基づき、「蕃童」の特性に応じた初等教育の方針が明確化され、初の国語読本『蕃人讀本』が編纂され、実際の授業で使用されるようになった。この『蕃人讀本』は、大正 4 年（1915）から昭和 4 年（1929）まで実際に使用された²⁸。

陳淑瑩（2008）によれば、『蕃人讀本』に登場している人物は合計 17 名であることが確認できる。これらの人物をその社会的階層に基づいて分類すると、一般人が 10 名を占め、残る 7 名は次のように構成されている。その 7 名には、皇室関係の人物が 3 名（天皇・天照大神・神武天皇）、為政者が 2 名（警察官・台湾総督）、文化人が 1 名（教師）、そしてその他に 1 名（長髓彦）が含まれている。

²⁸ 陳淑瑩(2008)「『蕃人公学校』と『蕃童教育所』との国語教科書にみる登場人物」《政大日本研究》5 號、國立政治大學日本語文學系、p.68-74



このように皇室関係の人物が相対的に多く登場する点は、『蕃人讀本』における「国語教科書としての道徳的教材の多さ」を示していると考えられる。幼少期における国民精神の形成が重視されていた当時、「蕃童」に対しても日本の精神を涵養することが目指されていたと見ることができる。すなわち、総督府当局は彼らに対しても、道徳的教化を通じた「国民化」の方針を積極的に推し進めていたのである²⁹。

「霧社」にも「蕃童」教育について実際に描写される一節がある。能高に出発する前に、語り手は僅かな時間を利用し、「蕃人」の小学校を一覧した。そこで彼は約 60 人の三、四年の児童たちの学習状況を観察し、その理解度や反応、教育の内容に対する困難さなどに言及する。例えば、次のような場面がある。

台湾で一番大きな町は台北、日本で一番大きな町は東京。日本で一番えらいお方は天皇陛下、台湾で一番えらい人は総督閣下。といふこの問題であつた。台湾で一番えらい人は？「東京」。日本で一番大きな町は？「天皇陛下」。四つの問題は交錯してすべてのコンビネーションで答へられた。しかもこれは平素既に教へられた事の復習なのである。さうして困難は決して内地語の理解から来てゐるのではない事は、彼等が割合に自由に内地語を操ることで判る。ただ彼等は彼等の世界では想像することの出来ない種類の概念を与へられつつあるのである。それを与へる人と与へられる者との苦心は全く同情以上の値がある。子供らは、質問で指命されると、当惑さうに立つて、否定されるとひどく悄気た³⁰。

上述のような「蕃童」の誤答は単なる知識不足ではなく、「蕃人」社会の生活世界とはかけ離れた抽象的・制度的概念（天皇、総督、国家、都市など）が子ど

²⁹ 同注 28、p.74

³⁰ 同注 13、p.126

もたちにとって理解し難いことを示している。つまり、近代国家の価値体系と、「蕃人」の世界観との間に大きな断絶があることが強調されている。語り手はこのような教育が「蕃童」にとっても、教える立場としての「内地人」教師にとっても気の毒なことであると同情を寄せているが、最後の「蕃童」唱歌の瞬間で心が癒された。そこから見ると、佐藤春夫が当時の植民地台湾における教育政策について、そうした教育が「蕃童」に日本の国民精神を育成できるかどうかに疑念を抱いていた一方で、そのような「蕃童」教育のもとで「蕃人」のアイデンティティーの揺らぎと混乱も暗示していると言える。

3. 「M氏」との談話

霧社を下山してからおよそ三日後、語り手は台北に到着し、『台湾蕃族誌』の著者である「M氏」³¹を訪ねた。そして、霧社の山中で見聞きした出来事について、M氏と一通りの議論を交わした。まず話題に上がったのは、語り手が霧社で耳にした、「蕃衣」をまとった「少女」が奏でていた音楽についてである。それを聞いたM氏は即座に、「所謂『口琴』——金属性の一二枚の舌と竹片とで造られた言はず極度に単純なハーモニカであつた」³²と解説した。黒沢隆朝(1973)は口琴に関して下記のように説明している。

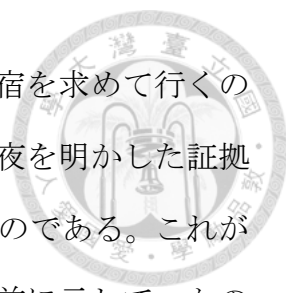
高砂族の婦女子は例外なくこれを口にしていた。これはまた、単に寂しさをまぎらわせるだけでなく、ある時は求愛に、ある時はダンスの伴奏に、しかもそのほかに口琴そのものは演奏とは別にメモランダム用のにも供せら

³¹ 森丑之助のことを指す。

明治-大正時代の台湾民族研究者。明治10年1月16日生まれ。28年台湾守備隊付きの陸軍通訳となる。台湾総督府蕃務(ばんむ)本署勤務をへて、大正5年台湾博物館主事。高砂(たかさご)(高山(こうざん))族の研究者として知られた。大正15年7月4日死去。50歳。京都出身。

"もり-うしのすけ【森丑之助】"、日本人名大辞典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com/>、(参照 2025-05-11)

³² 同注13、p.137



れた。たとえば、タイヤル族の場合は、青年が愛人の家に宿を求めて行くのであるが、婚前はセックスが厳禁されているので、無事一夜を明かした証拠に、二人で口琴の長い紐に、確実に一個の結び目をつけるのである。これが20になり、30になった時は、娘はこの口琴の紐を両親の前に示して、かの青年の熱愛の程度と、志操堅固のあかしとして結婚の許可を乞うのである³³。

また、佐藤文一（1988）も口琴について以下のように述べている。

一種のピンピンといふ琵琶に似た音を発し、又た綿打ちの弓より発する音にもよく似て居る。其の絲の引き方と呼吸の調子に依り、之で一定の曲調を吹きつゝ話言を交へて、相手に自己の思ひを通ずることを得るのであつて、若い男女は此法に依り談話を歌謡に美化して表現し互に其の綿々たる情緒を交はすことがあるのである³⁴。

以上のように、口琴は本来、恋愛感情の表現や純潔の記録手段として使用されていた極めて私的かつ文化的な道具であった。しかし、日本統治以降、「蕃人」の文化的慣習が商品化・外部的なまなざしのもとにさらされるにつれ、口琴もまたその意味を変容させていく。恋人同士の密やかな情緒を伝える音は、次第に異民族——特に「内地人」の旅行者や軍人——を惹きつける「誘惑の音」として再構成される。そうして、かつては純愛の象徴だった口琴は、都市の片隅や辺境の集落において、売春婦が客引きのために奏でる「呼びかけ」として機能するようになったのである。つまり、口琴は音の魅力によって感情を媒介するという本来の機能を維持しつつも、その用途と文脈が変化することで、「売春」という社会的現象に取り込まれていったのである。

³³ 黒沢隆朝(1973)「高砂族の口琴と生活」『台湾高砂族の音楽』、雄山閣、p.295

³⁴ 佐藤文一(1988)『台湾原住種族の原始芸術研究』、南天書局、p.271

次に、二人は「サラムオ事件」についてもひとしきり議論を交わした。M氏はそれについて意見を多く述べなかったが、その起因を「十年の昔、佐久間総督が軍隊をして全島の蕃地を縦断的に強行軍を試みさせた時に遡らなければその真相を得ることは不可能である」³⁵に帰した。その十年前のことはまさに「五箇年計画理蕃事業」である。

明治42年(1909)台湾総督府官制を改正して、新に「蕃務本署」を設け、「蕃務総長」を置いた。佐久間総督が衆智を集め衆力を併せ、そして翌年(1910)4月より敢然断行して「五箇年計画理蕃事業」を実施に着手した。その中で、「サラムオ蕃」への討伐は「キナジー方面蕃社討伐並追加行動」の一環として、全行動で銃器七十五挺・弾薬二百三十八発を押収した³⁶。より詳しく言えば、武内貞義(1927)の記述によると、「シカヤウ蕃及サラムオ蕃を包囲し、頑強な抵抗があつたが撃破し、蕃人百十二名を殪し銃器四十挺を奪ひ両社の蕃屋を焼夷した」³⁷ということである。この事件が、十年後に発生する「サラムオ事件」の伏線となったと考えられる。

さらに、M氏は「蕃人」(「生蕃」)という民族について以下の見解を提出している。

蕃人は蕃人自らはいつも一国を以て任じてゐる事実を挙げて、それ故、蕃人にとつては彼等の上に統治者があるといふ事実は容易には会得出来ないと言つた。

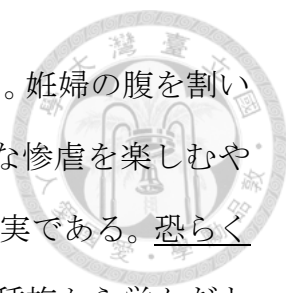
(中略)

一たい蕃人の人を殺すやその目的は決して殺人その事にあるのではなく、たゞ彼等是一種の宗教的迷信のために人の首を得たいのみであつて、もし仮

³⁵ 同注13、p.137

³⁶ 藤崎濟之助(1930)「隘勇線前進及蕃社膺懲」『台湾の蕃族』、國史刊行會、p.737

³⁷ 武内貞義(1927)『台湾』、新高堂書店、p.862-863



りに首さへ得られるならば命は残して行く位なものである。妊婦の腹を割いてみたり死人の男根を断つやうな彼等の宗教上に無意義な惨虐を楽しむやうな風習は、彼等の古来の習慣には少しも発見出来ない事実である。恐らくはかかる所業は彼等の祖先からの習ではなく、外来の或る種族から学んだところの新らしい蛮風であるらしい、云々³⁸。

以上の記述は、一見すると「蕃人」に対する文化的理解と同情の態度を含むように見えるが、実際には、植民地主義的な「他者化」の言説装置として機能している。特に、「蕃人は自らを一国を以て任じてゐる」といった言葉が顕著に示しているように、彼らが自分の上に統治者があるという事実を「会得できない」とする記述は、総督府の一元的な統治構造に異議を唱える存在を、「理解しがたい」「劣位文化」として見下すような視線が込められていると言える。また、首狩りや性器損壊といった描写に関しても、それが「外来の蛮風」とされることで、「蕃人」の暴力性を本質的なものから切り離し、「本来は善良で統治可能な存在である」というナイーブなロマン主義的認識が強調される。これは総督府が進めた「教化政策」や「理蕃政策」の正当化に直結しており、「蕃人」を文明化の対象とする支配イデオロギーと密接に関連している。

しかし、このような「蕃人」表象は、むしろ総督府による暴力的統治の文化的影響を覆い隠す働きをしているとも言える。たとえば、M氏が言及する「妊婦の腹を裂く」や「男根を切断する」といった行為が「蕃人」本来の文化でないとされることは、裏を返せば日本統治の過程で新たに形成された暴力の連鎖、あるいは抑圧への反動としての抵抗の可能性を示唆している。そう考えると、佐藤の観察は、総督府の植民地政策がもたらした文化的・精神的混乱を可視化しているとも言える。ロバート・ティアニー（2007）もこのような暴力の連鎖について、

³⁸ 同注 13、p.137-138

「外部的要因、すなわち外国による侵略および植民地主義的な暴力が、スケープゴートを求める行動の引き金として重要な役割を担っている。」³⁹と述べている。つまり、植民地状況下においては、外来の権力によって引き起こされた社会的混乱やアイデンティティーの喪失が、しばしば内部の異質な他者への暴力的転嫁を引き起こすのである。

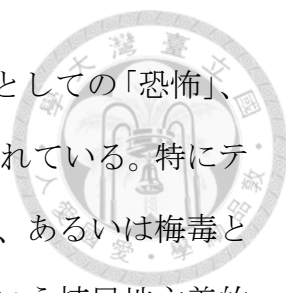
したがって、佐藤春夫が「蕃人」に対する文学的記述は、単なる民族誌的観察を超え、総督府の「同化政策」や「理蕃政策」の矛盾を逆説的に浮き彫りにしている。佐藤春夫の「霧社」は、その無意識的な描写において、むしろ日本の植民地政策に対する批判的省察を導くための素材となりうるのである。

第4節 おわりに

本章では、佐藤春夫の「日月潭に遊ぶ記」と「霧社」における「蕃人」像を考察することを通じて、日本統治下台湾における「蕃人」描写とその「アイデンティティー」の構築・変容の過程を明らかにしてきた。両作品に共通するのは、「蕃人」を一貫して「他者」として位置づけつつも、その文化的混交や同化の痕跡をも同時に描き出している点である。

「日月潭に遊ぶ記」においては、祭礼や芝屋、伝統衣装といった文化的実践が「見世物」として観光客（＝内地人）に提供され、植民地支配下における民俗文化の商品化が進行している様相が読み取れる。その中で、「蕃衣」の下に西洋風シャツを着る若者の姿や、台湾語を話す老区長の描写は、「蕃人」が静的な他者ではなく、植民地近代の中で文化的混成を受けた動的な主体であることを示唆している。つまり、ここには伝統の保持と同化の進行という矛盾するベクトルの間で揺れ動く「蕃人」のアイデンティティーが浮かび上がっている。

³⁹ 原文は “External factors – namely, foreign invasion and colonial violence – play a key role in triggering the hunt for a scapegoat.” である。日本語訳は筆者による。
Tierney, R. (2007). Ethnography, borders and violence: reading between the lines in Satō Haruo’s *Demon Bird*. *Japan Forum*, 19(1), 94.



一方、「霧社」では、植民地的支配が生み出す暴力とその反動としての「恐怖」、そして支配者側（語り手）の優越感や猜疑心がより露骨に描かれている。特にデウスに代表されるような、「内地人」の風俗を身につけた蕃婦、あるいは梅毒という「文明病」に罹った「蕃丁」などは、純粋な野蛮の他者という植民地主義的想像を裏切る存在として登場する。これらの描写は、文化的混交によって境界が曖昧化する「蕃人」像が、単なる民族的他者としての姿ではなく、支配と被支配、同化と抵抗、沈黙と発話のはざままで揺れ動く、動態的なアイデンティティの形成過程を示している。

加えて、口琴をめぐる描写にも象徴的な変容が見られる。本来は恋愛の情感を繊細に伝えるための民俗的道具であった口琴が、統治下においては売春婦の「客引き」の音へと変質していく。この変容は、支配による文化の変質と、「蕃人」の主体的表現がいかに帝國的欲望に取り込まれ、消費されていくかを如実に物語っている。すなわち、佐藤春夫から見る「蕃人」のアイデンティティは、文化的媒介の喪失と性的対象化の間で裂かれた状態に置かれている。

さらに、「蕃人は自らを一国と考えている」という記述からもわかるように、彼らが持っていた固有の主権意識は、総督府が目指していた一元的な支配のあり方とは根本的に食い違っていた。それにもかかわらず、佐藤やM氏の語りでは、「蕃人」（「生蕃」）の行動を「外来の或る種族から学んだところの新らしい蛮風であるらしい」といった形で説明している。つまり、「蕃人」が抵抗しようとした事件の背後には、自分が「内地人」ではないというアイデンティティを持ちながらも、「内地人」に影響されて暴力を振るい蜂起していったという「蕃人」の文化的・精神的な混乱が含まれていると考えられる。

このように、佐藤春夫の描く「蕃人」像には、同情・敬意・恐怖・欲望・異化といった複数の感情が交錯しており、その語りは「蕃人」のアイデンティティを一方向的に規定することなく、むしろその不安定性と構築性を露呈させてい

る。言い換えれば、帝国のまなざしに晒された「蕃人」は、植民地権力に従属させられつつも、なお自己の文化を再構築しようとする動的主体として、複数のコードを纏って登場する。

本章での考察を通じて明らかになったのは、植民地台湾における「蕃人」のアイデンティティーは、外部の命名と内部の葛藤、文化的表象と政治的力学の交錯によって常に揺らぎ続けていたという事実である。そしてこの揺らぎこそが、植民地主義の本質的な矛盾——「同化」と「排除」の同時的運用——を如実に映し出している。

第3章 移民政策から見る「内地人」のアイデンティティー



第1節 はじめに

1920年代の日本における台湾統治は、単なる植民地支配にとどまらず、「内地人」と「本島人」と「蕃人」という三重の民族階層の再編成を含む、複雑な「同化」と「分離」の政治を伴っていた。そのなかでも、日本政府が推し進めた「内地延長主義」や台湾への「内地人」移民政策は、優位に立つ日本人自身の「内地人」としてのアイデンティティーを再構築し、同時にそれを「台湾」という他者の地において演出・強化する装置でもあった。

本章では、佐藤春夫の「旅びと」および「日章旗の下に」を取り上げ、両作中に描かれた「内地人」移民、あるいは「内地人」の自己認識や他者認識の在り方を分析することで、当時の「内地人アイデンティティー」がいかに植民地空間の中で形成・表象されていたのかを明らかにすることを目的とする。

これらの作品は、一見すると旅の随想や日常の観察に過ぎないように思われるが、その描写の随所には、植民地支配下における日本人の自己正当化や、他者（「本島人」、「蕃人」）との距離感、さらには「帝国の臣民」としての「内地人」の優越感や葛藤が垣間見える。とりわけ移民政策の文脈に照らすことで、こうした描写が単なる風景描写ではなく、帝国のイデオロギーを内包したものであることが見えてくる。

本章ではまず、1920年代における台湾移民政策の概要を確認した上で、「旅びと」「日章旗の下に」における移民や「内地人」の描かれ方を検討し、佐藤春夫がそれらをいかなる視点から描いたのか、そしてそこにどのような「内地人アイデンティティー」が表れているのかを考察する。

第2節 日本統治時代初期における移民政策の形成

日本統治時代の台湾において、移民政策は単なる人口移動の政策ではなく、日本帝国の「国策」として極めて重要な役割を担っていた。それは、台湾という植民地空間を内地化するための手段であり、かつ日本人という「内地人アイデンティティー」の再確認と強化の手段でもあった。

日本が台湾を領有した1895年以降、台湾統治の重要な柱として農業開発と移民政策が進められた。日本が台湾を領有した初期において、日本の啓蒙思想家である福澤諭吉は、移民政策を強く主張し、台湾を「移民の楽土」と位置づけ、多くの「内地人」を移住させて「本島人」に代わって殖産興業に従事させるべきであると唱えた¹。こうした思想と政策のもと、日本による台湾移民事業は以下の四期に区分される²。

- ◆ 第一期(1895～1908年)は、民間による初期的な私営移民の時期である。
- ◆ 第二期(1909～1917年)は、花蓮港庁における官営移民の展開期である。
- ◆ 第三期(1917～1945年)は、主に台東庁を拠点とした私営移民が中心となった。
- ◆ 第四期(1932～1945年)には、再び官営主導の色合いが強まり、台湾拓殖株式会社を中心とする組織的な移民事業が推進された。

本節では、張素玠(2001)の論説³を参照し、特に台湾移民事業の第一期に着目し、日本統治時代の初期における移民政策の形成過程を、(1)国内農村問題と

¹ 「一切の殖産・興業を日本人の手に経営して、大いに富源を開発すべし」

杉田聡編(2010)「嚴重に処分すべし」(1895年8月14日に『時事新報』に載せられた)『福澤諭吉 朝鮮・中国・台湾論集―「国権拡張」「脱亜」の果て』、明石書店、p.303

² 張素玠(2001)〈緒論〉《台灣的日本農業移民(1905-1945)：以官營移民為中心》、國史館、p.10

³ 張素玠(2001)〈殖民政策下的移民事業〉《台灣的日本農業移民(1905-1945)：以官營移民為中心》、國史館、p.21-55

人口圧力、(2) 植民地支配の戦略、(3) 国際情勢の変化という三つの視点から整理し、政策の思想的・制度的な基盤を明らかにする。



1. 農村問題と人口圧力—移民政策の国内的背景

明治時代の日本は、近代国家としての体制整備と並行して、急激な人口増加に直面していた。例えば、1800年に約2,550万人であった日本の人口は、1898年には約4,370万人、1913年には約5,290万人へと拡大し、人口密度も1925年には2,417人/km²に達し、当時世界で2位を記録するほどであった⁴。農村の耕地面積が限られ、農民1戸あたりの耕地が次第に細分化されたため、零細農の生活は困窮を極めた。

さらに、明治維新以降の地租改正（1873年）により、自作農の多くが土地を失い、地主制のもとで小作農として従属する構造が形成された。農民階層は政治的にも経済的にも疎外され、各地で地租軽減運動や騒擾が頻発した。このような中で、日本政府は農村の困窮を抜本的に解決する手段として、海外移住、特に植民地への農業移民政策に着目するようになった。

思想面では、福沢諭吉、中江兆民、神田孝平といった啓蒙思想家が、西洋のマルサスの「人口論」⁵や植民地理論を参照しつつ、移民の奨励を「国家危機」への対応策として提案した。政府もこれに応じ、明治期にはすでにハワイ、北米、南米への契約移民を制度化したが、台湾が植民地として獲得されたことで、より安定的かつ国家管理可能な移民の受け皿としての重要性が増したのである。

⁴ 本庄榮治郎(1930)『人口及人口問題』、日本評論社、p.192-193

⁵ (原題 {英} An Essay on the Principle of Population)

経済学書。マルサス著。1798年刊。第六版まであり、初版と第二版以下とは内容に大きな相違がある。人口の自然増加は食物生産増加率と比例しないゆえ、貧困、罪悪が必然的に生じると社会的改善の困難ないし不可能を論述。二版以下は食料不足による人口増加妨害を各国の資料、統計によって具体的に裏づけ、道徳的抑制による予防措置を提示し、初版の悲観的結論を緩和している。

"じんこうろん【人口論】"、日本国語大辞典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com/>、(参照 2025-06-24)

2. 植民地支配と移民政策の戦略的意義

台湾は日本にとって初の植民地であり、単なる経済的資源地ではなく、国家の近代化および帝国化を象徴する政治的拠点でもあった。欧米列強の帝国主義的拡張に模倣し、日本は台湾においても資本輸出・行政制度の移植・人的移住を通じた「近代的支配」の確立を図った。

この過程で重要な役割を担ったのが、農業移民である。彼らの移住には以下のような意味が込められていた。

- ◆ 領土支配の実質化と象徴化：本国からの農民の永住的な移住は、単なる行政的支配を超えて、実効的統治の象徴とされた。「内地人」の定住は、「征服された土地」における日本の所有権と支配の延長を意味した。
- ◆ 社会秩序と労働力の確保：移住した農民は、台湾における労働力供給源となるだけでなく、内地的价值観や生活様式を台湾社会に持ち込む存在であった。支配民族としての優位性を日常的に演出しつつ、支配秩序の再生産に寄与した。
- ◆ 同化政策の担い手：日本が台湾統治の参考としたのは、フランスによるアルジェリア植民地支配の方式であり、言語・生活習慣の同化を重視した。そのためにも、「内地人」住民の存在は、台湾にいる人に対する「文明の見本」としての役割を果たすことが期待された。
- ◆ 南進の前哨としての意義：台湾は単なる植民地にとどまらず、帝国の南進政策における「跳躍台」としての戦略的位置づけを担った。日本政府は、台湾に定住する移民を、将来的な東南アジア進出の先兵・開拓者と見なしていた。

このように、台湾への移民政策は「支配」「労働」「同化」「南進」の多重の機

能を有する、典型的な帝国主義的政策として構想・実行されていた。



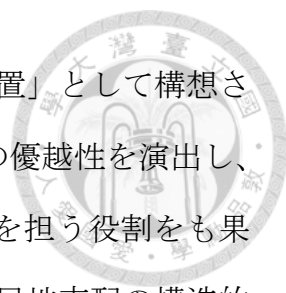
3. 国際情勢と移民政策の変容

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての国際情勢は、日本の移民政策の方向性にも大きな影響を与えた。日清戦争（1895 年）による台湾獲得、日露戦争（1905 年）における勝利、1910 年の韓国併合といった一連の「外地」獲得は、日本を東アジアの列強へと押し上げた。同時に、米国やカナダ、オーストラリアにおける日本人移民への排斥運動（1907 年の「日米紳士協約」⁶など）は、日本の移民政策を大きく方向転換させた。

アメリカやブラジルなどの移民先が縮小される一方で、台湾や朝鮮、満州、樺太といった日本の植民地は、国家主導で定住型の移民を受け入れる「安全な場」として注目された。その結果、日本人の海外移民の方向性は、自由渡航による労働移民から、国家政策による定住移民＝「殖民移住」へと変化していった。台湾への移民は、その点において象徴的であり、他の地域とは異なる特殊性を持っていた。単なる経済的移住ではなく、優位に立つ者としての位置づけを持ち、現地社会への影響力を意図的に強める性質を帯びていたのである。

以上を踏まえて、日本統治時代初期の台湾における移民政策は、国内の農村問題や人口圧力といった「経済的要因」、植民地支配の再現力を高めるための「政治的意図」、そして国際社会における日本の立ち位置と移民制限の圧力という「複合的要因」の交差によって形成された。特に注目すべき点は、移民政策が単

⁶ 日本人の対米移民制限に関する紳士協約。アメリカのハワイ属領制実施（1900）以後激増した日本人移民排斥問題をめぐって日米関係が緊張し、アメリカは、同国内での厳重な移民制限法制定の動きを抑えるため日本による自主的渡航制限実施の必要性を説いた。かくて 1907 年（明治 40）11 月から翌年 2 月の間に日米間に七篇の書簡・覚書が交換され、日本側は、再渡航者、在米移民の両親・妻子、学生、商人を除く新規移民をすべて自主的に禁止した。のち、写真結婚による渡米婦人問題が排日論議の的になったが、1924 年（大正 13）、帰化不能の外国人の入国を禁じた排日移民法の成立で本協約は廃棄された。
"日米紳士協約"、日本大百科全書（ニッポニカ）、JapanKnowledge、
<https://japanknowledge.com/>、(参照 2025-06-25)



なる「人口の移動」ではなく、「支配装置」あるいは「同化装置」として構想されていたということである。移民は台湾社会の中で「内地人」の優越性を演出し、統治の正当化を補強し、さらには日本帝国の南進政策の一端を担う役割をも果たしていた。初期移民政策の形成を理解することは、日本の植民地支配の構造的な特性を明らかにする上でも重要である。

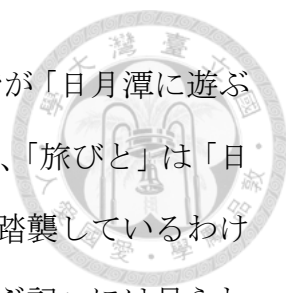
このような政策的・社会的背景のもとで、当時の日本人作家が台湾をいかに描いたかを通して、帝国の一員としての「内地人」のアイデンティティ形成がどのようなものだったかを読み解く。

第3節と第4節では、「旅びと」と「日章旗の下に」を取り上げ、そこに描かれた「内地人」移民の姿を分析する。両作品に共通するのは、植民地台湾という空間において、「内地人」が自らの文化的優越や文明性をいかに意識・演出し、時に不安や違和感を抱えながらも帝國的アイデンティティを強化していく過程である。政策が設計した「優位に立つ者としての移民」というモデルが、文学表象においてどのように言語化され、またどのような葛藤を伴って表れているのか。こうした視点を通じて、植民地文学における「内地人」移民者のアイデンティティの揺らぎとその再編成の軌跡を読み解いていく。

第3節 「旅びと」における「内地人」移民者のアイデンティティ

「旅びと」は第二章で言及した「日月潭に遊ぶ記」と同じく、佐藤が日月潭を訪れた際に書いた紀行文であるが、二つの作品の中で最も大きな違いは、「旅びと」の方が宿屋にいる「内地人」の女中との交流や会話により多く焦点を当てている点である。邱若山（2002）の説によれば、「旅びと」は実は三部分から構成している作品である⁷。第一部および第二部に該当する描写は、おおむね佐藤自身の紀行文「日月潭に遊ぶ記」に基づくものであると考えられる。「旅びと」は

⁷ 邱若山(2002)『『旅びと』の世界——その抒情の原点と創作事情——』『佐藤春夫台湾旅行関係作品研究』、致良出版社、p.107



全体として十五節で構成されているが、そのうち第十一節までが「日月潭に遊ぶ記」の内容と一致しているように見受けられる。しかしながら、「旅びと」は「日月潭に遊ぶ記」のように時間的・空間的な移動の順番を忠実に踏襲しているわけではない。実際、第一節・第五節・第八節には、「日月潭に遊ぶ記」には見られない独自の記述が含まれており、さらにこれらの場面はいずれも「内地人」女性と深く関係している。

まず、第一節の物語の展開は、女中の一言によって始まっていく。

「いらつしやいまし、さぞお暑うございましたせう。——さきほどからお待ち申し上げて居りました。それでも大へんお早くお着きで……」

——と、かうその女が言つたと言へば、君たちは愛想のいい宿屋の女中がお世辞を言つたと思ふでせう。それに違ひないのです。ただ、それだけの言葉がしんみりとした味に受け取れたと思ひたまへ⁸。

この一文では、女中の丁寧で温かみのある挨拶は、一見すると単なるお世辞に見える。しかし語り手は、この言葉に「しんみりとした味」があったと述べ、表面的な愛想以上の感情の余韻を感じ取っている。その理由は、物語の後半で明かされることになる。

一方、第五節では日月潭に行くために険しい山道を登っている途中、語り手は突然過去の記憶をたどった。語り手が「かつての結婚の可能性」を思い出し、それを「現在の苦境（台湾の旅／失意の生活）」と比較することで、自己の人生を回顧している。

——私には別に大へん好いてゐるひとがゐた。それから大へん好かない女房

⁸ 初出は1924年の「旅びと」であるが、本論文は下記の単行本から引用した。
佐藤春夫(1998)「旅びと」『定本 佐藤春夫全集』第5巻、臨川書店、p.5

がゐた。今だから言ふが、さういふことで思ひ屈して私は台湾三界へ放浪しに出たのである⁹。



また、語り手は「大へん好いてゐるひと」と「大へん好かない女房」がいたことを述べた上で、それらの人間関係に疲弊し、「台湾三界へ放浪しに出た」と語る。ここで台湾は、単なる異国の風景ではなく、逃避と再生の可能性を求める場として描かれている点が注目される。この部分は前後の風景描写とは異質に見えるが、第八節と密接な関係を有している。第八節において、時間は第一節と重なる時点に戻り、宿屋の女中がとても礼儀正しく語り手を出迎えた。彼女の姿について語り手は下記のように述べている。

そのあたりまへの言葉が、その女の口からはしんみりとひびいたが、不思議に私の耳に入った。

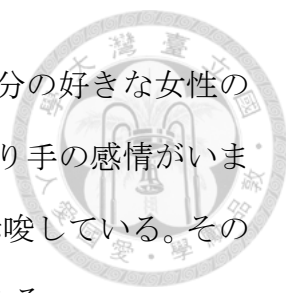
(中略)

顔を上げるところを見た。悪くはない。色が白い。だがそばかすがある。整った顔立で、まるで違ふのに、おもかげがどこか、さつき言つた私の大好きなひとに似ないではない。が、だがそれだけの事だ。別に恍とも惚ともしなかつた¹⁰。

語り手は第五節において、自身の失恋・結婚失敗・台湾への逃避といった背景を率直に語っており、そこでは「大へん好いてゐるひと」という明確な対象への愛情が告白されている。この「好いてゐるひと」は明らかに内地にいる存在であり、今は手の届かない「幻影」として語られているのである。そして第八節では、宿屋の「内地人」女中を見た瞬間に、「まるで違ふのに、おもかげがどこか、さ

⁹ 同注 8、p.10

¹⁰ 同注 8、p.12



つき言つた私の大好きなひとに似ないではない」と、不意に自分の好きな女性の面影を現在の女中に見出す。このような無意識的な連想は、語り手の感情がいまだに整理されておらず、未練や喪失感が潜在していることを示唆している。その感情ゆえに、語り手は女中との会話をさらに深めていくのである。

次に、第十二節では、語り手が宿屋で体験する突発的な風雨の描写を中心に、女中との一時的な交流が描かれている。語り手が宿屋に戻ると、まるで自分に遠慮していたかのように雨が本格的に降り出し、突風を伴う嵐となって北側の障子を激しく打ちつける。嵐に驚いた女中は、「御免下さい」と叫びながら座敷に駆け込み、障子を閉めようとするが、風に押されて思うように動かない。語り手はそれを見かねて手伝い、難なく戸を閉める。女中は狼狽しながらも、丁寧に礼を言う。

一方で、この自然の激しさは長くは続かず、突風と豪雨は一陣のみで収まり、やがて風雨は時雨のような柔らかいものへと変化する。語り手はその様子を「親しみながら」眺め、穏やかな気配の中で夕食を迎える。そして、二人は自然と会話を交わすようになった。

「いつこちらへお出でございました。台湾へは」

「七月の初めだ。——さう言っても通用しない。このとほりの顔色だ。すっかり台湾色だ。しかしこれや内地からの持ち越しだよ、僕のは、」

「あら！」

「……君は何時来た」

「もう、四年目ですわ——二十の年に来ましたから」

「君はそんな年かい。——別嬪にはいろ／＼な徳があるな。内地はどこだ」

「関西です」

「それや判つてゐる」



「長浜ですわ、江州の」

「江州の長浜？　といふと、よく聞くとところだが？」

「そら、縮緬の出る……」

「うん、然うか」

.....

「御見物をなされば直ぐ内地へおかへりなさいますか」

「あ、帰るよ——なぜ？」

「お羨しうございます」¹¹

この第十二節の会話は、佐藤春夫「旅びと」の中でもとりわけ「内地人アイデンティティー」が明確に表出される場面の一つであり、語り手と「内地人」女中という二人の〈同胞〉の間に存在する、距離と親近の交錯が繊細に描かれている。女中は「内地人」でありながら、台湾に移り住んでもう四年が経って、つまり既に台湾での生活が定着していることを淡々と語る。そして、内地の出身地について問われると、「江州の長浜」と素朴に答え、さらに「縮緬の出る……」と、語り手との共通の文化的知識に訴えかけるような説明を加える。このやりとりには、女中が語り手に対して同じ「内地人」として認められたいという欲望が微かににじみつつも、丁寧語を使い距離感を保つ従属的立場も同時に表出している。また、最後の三つの文で、女中は、自分がもはや帰ることのできない側の人間であることを前提に語っている。つまり、彼女は内地出身でありながら、今や台湾という植民地に「住まわされている存在」である。一方、語り手は「帰るよ」とあっさり言っただけ。これは、彼にとって台湾があくまでも一時的な滞在地、観光や放浪の舞台に過ぎず、内地という本国へのアクセスが保証された主体であることを示す。その会話の続きとして、語り手が「帰りたいかい、君も」と聞

¹¹ 同注 8、p.20

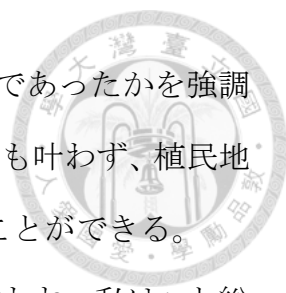


くことに対して、女中は次のように言っている。

「え！ こんなことなら来るのぢやなかったとよく思ひます。それや内地が恋しうございます」女は思ひがけなくしみじみと言った。「……わたしは考なしに来たのでございました。……兄さんが来いといふから、兄さんをたよつて来たのです。——台中で写真屋をしてみますわ、え、今でも。運が悪いのですわね、私は。兄さんのところへお嫁が来てから私、兄さんと仲が悪くなつたのです、お嫁さんが邪魔にしますからね。長浜でだつてもさうですわ、お父さんは年寄りのくせに若いあといりを連れて来たものだから——お父さんは邪魔にはしませんけれど、私はその来たひとと気が合はないのです。でも、ここにゐるよりは長浜の方がまだしもよかつた——糸とりをしてみたから、私ひとりだけのことは自分でしてみたのです」¹²

この独白には、植民地台湾において「内地人」として生きることの困難さと、特に女性であるがゆえの社会的制約が濃密に表れている。彼女は「え！ こんなことなら来るのぢやなかつたとよく思ひます。それや内地が恋しうございます」と語り、台湾での生活への後悔と、内地への郷愁を率直に表明する。その語り口には、もはや「帰る場所」を喪失した者としての諦念が滲んでいる。女中が台湾に渡った契機は、兄からの誘いによるものであり、彼女自身の主体的な判断というよりは、家族関係の中での従属的立場に基づくものであった。彼女は「兄さんが来いといふから、兄さんをたよつて来たのです」と述べ、さらに兄の結婚を契機に関係が悪化し、寄る辺のない生活へと移行していく様子を語る。また、内地での生活についても「糸とりをしてみたから、私ひとりだけのことは自分でしてみたのです」と述懐し、かつての自立した生活との対照が浮かび上がる。このよ

¹² 同注 8、p.20



うに、彼女の語りは、台湾での生活がいかに依存と疎外の連続であつたかを強調しており、内地出身でありながら、もはや内地に帰属することも叶わず、植民地という「異郷」に定着せざるを得なかった者の声として読むことができる。

さらに注目すべきは、彼女が自身の不遇を「運が悪いのですわね、私は」と総括した点である。この表現には、彼女の生活が自らの選択によってではなく、他者の意志や状況に翻弄された結果であることが示されると同時に、その境遇を語る主体としての語りの抑圧も露呈している。「内地人」としての出身を持ちながら、帝国的特権を享受することのない彼女の存在は、語り手のような一時的滞在者＝「旅人」とは対照的に、植民地に生きることを強いられた「内地人」女性の、沈黙させられがちなアイデンティティを代弁している。この独白は単なる身の上話として処理されるものではなく、「内地」と「外地」、「男性」と「女性」、「移動」と「定着」といった多重の軸線の交差点として、帝国日本の階層的・ジェンダー的な構造を内在化した「内地人アイデンティティ」の分裂と脆弱性を鋭く浮かび上がらせている。

以上のように、「旅びと」には、植民地台湾という場において「内地人である」というアイデンティティがいかに多層的な断絶と葛藤を含んでいるかを明らかにしている。作中に登場する女中は、語り手が好意を抱く人に似た存在として描かれており、そのことが語り手との深い対話へと繋がっていく。そして、女中の語りには、郷愁、後悔、孤独、そして生きることへの諦めが静かに滲み出ており、それは一見して私的な身の上話であると同時に、社会的・歴史的条件によって「声を上げることのできなかった存在」の語りとしても位置づけられる。語り手と女中はいずれも「内地人」とであるという共通点を持ちながら、その移動の動機、生活面での自由の程度、社会的立場において決定的な非対称性が存在している。特に女中は、台湾への移住を「他者の意志」によって決定された存在として描かれる。このような彼女の姿は、帝国の周縁に生きる「内地人」の中でもさら

に階層化された「沈黙させられがちなアイデンティティ」の体现であり、彼女の抑制された語りを通して、佐藤はその存在を静かに代弁しているといえる。

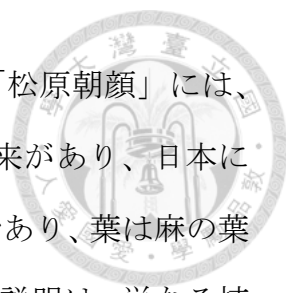


第4節 「日章旗の下に」における「内地人」移民者のアイデンティティ

「日章旗の下に」は、1928年1月に雑誌『女性』に「奇談」を題として発表され、後に単行本『霧社』に収録される際に改題された作品である。佐藤春夫の台湾ものの中に、唯一「内地人」の移民者を主役とする作品であり、更に佐藤春夫が実体験しなかったことを描いたため、特別な一作と見做されている。本作品において語りの焦点は一貫して過去の日本人に置かれており、したがって、佐藤春夫の実際の〈台湾体験〉における衝撃を主題として論じるには、必ずしも適切な素材とは言い難い。しかし、フィクション性が高いからこそ、佐藤春夫が、自らの立場から直接的に語り難い主題に対して、あえて触れようとする姿勢が読み取れる。したがって、本節では、「日章旗の下に」における「内地人」移民者に関する描写に注目し、彼らが帝国の中心と周縁のはざまで自らの存在や立場をどのように定義しようとしていたのかを考察する。特に、植民地台湾に移民してきた「内地人」のまなざしや生活、そして現地社会との距離感を分析することで、「内地人」という存在が帝国主義的主体であると同時に、周縁性を抱えた存在であること、または彼らがどのようなアイデンティティを持つかを明らかにしたい。

1. 「松原夫婦」像

まず、物語の冒頭では、旅の客が台湾の官署に勤務する主人の家を訪れ、その庭に植えられた花の由来を聞くことから物語が展開される。その花は、台湾の草原に自生するありふれたものでありながら、主人にとっては特別な意味を持つ存在として描かれている。彼はその花を「松原朝顔」と独自に命名し、以後三十

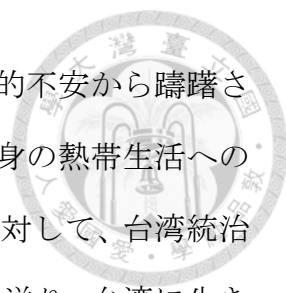


年にわたり、家を移っても常に庭に植え続けてきたという。「松原朝顔」には、かつての友人である松原がアフリカから持ち込んだという由来があり、日本には存在しない花であるが、その外見はまるで白い朝顔のようであり、葉は麻の葉に似ており、日本的情緒と親和性が高いと語られる。こうした説明は、単なる植物の描写にとどまらず、異国の地において「日本的なるもの」を再構成しようとする「内地人」の精神的風景を象徴していると考えられる。

さらに、主人が自ら庭を手作業で作ったこと、そしてあえて台湾にありふれた植物を集めたという点からも、植民地的空間に対する主体的な介入と、異国の風土に対してある種の郷愁的融合を試みる「内地人」の姿勢が読み取れる。ここで描かれる庭とは、単なる自然の空間ではなく、「内地人」が異文化と折衷的に向き合う姿勢の表れであり、同時にその土地に根ざそうとする移民としての心理的葛藤も暗示している。

次に、主人は友人の松原について言及していく。物語は、明治 29 年の春、台湾の役所に届いた一通の手紙を発端として進展する。その手紙は、シンガポールから送られてきたもので、内容の特異性から、総督府以下の役人たち全員に回覧されるほどであった。差出人は松原という人物であり、彼は約 20 年前に日本を離れ、数奇な運命の末にアフリカで農園を営んでいた日本人である。松原は、かつて奴隷としてインドからアフリカ各地を流浪した後、イギリス人の恩恵によって自由を得て、独力で農場を経営するまでに至った。しかし、その旧主人の死や現地における日本人としての差別経験が彼に大きな孤立感と劣等感を与えていた。彼は、外国では日本人が黒人と同様に扱われることを痛感し、「どうにかして、自分の生れた国の旗の下で生きてみたい。事業をするのならば日の丸の旗の樹つてゐる所、といふ考は今日や昨日に始まつたものではなかつた」¹³という強い郷愁と帰属意識を抱くようになった。

¹³ 初出は 1928 年の「奇談」であるが、本論文は下記の単行本から引用した。
佐藤春夫(1998)「奇談」『定本 佐藤春夫全集』第 7 巻、臨川書店、p.20



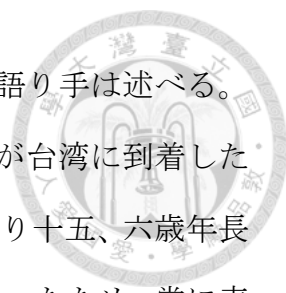
しかし、日本本土への帰還は、生活基盤や技能の欠如、経済的不安から躊躇されていた。そうした中で、日本の台湾領有を知った松原は、自身の熱帯生活への適応力と開墾経験を活かすべく、台湾移住を決意した。それに対して、台湾統治の安定性に対する不安から、彼は旅の途中で総督府宛に手紙を送り、台湾に生きる余地があるのか、自分のような一国民に統治者が便宜を図ってくれるかどうかを問い合わせた。この手紙の内容は、松原の「懷郷の念と愛国の情」¹⁴を感じさせるものであり、役人たちの間にも大きな感動を与えた。最終的に総督府は、台湾統治の進展と国力の充実を強調しつつ、松原のような人物を「国家にとって最も有能の材」¹⁵と評価し、台湾への移住を歓迎する旨の返書を出す。この返答を受け取った松原は、約二ヶ月後に台湾へ渡航した。

上述のようなエピソードは単なる個人の帰国物語にとどまらず、植民地台湾が「帝国の第二の故郷」として提示される構造を浮き彫りにしている。松原は日本本土（内地）には帰れないが、植民地（台湾）には帰れるという選択肢を与えられることにより、「内地人」であることを再確認し、「帝国的アイデンティティ」の再構築を図る。同時に、松原の体験には、帝国主義の周縁から見た「日本」という国家像が反映されている。この構造は、「内地人」移民者が抱える「中心への憧憬」と「周縁での再出発」の二重性を示唆している。

一方、松原からの手紙を読んで最も深く感動したのは、語り手自身であった。語り手は当時、役所内で最年少の役人であり、青年時代に日清戦争の勃発を知って家を飛び出し、即席の南京官話で通訳官となった経歴を持っていた。その後、戦争が終結しても帰国を望まず、志願して台湾に赴任し続けるという特異な人生を選択した。こうした背景から、松原の語る「国を離れて生きた日本人の郷愁」と「植民地台湾を新たな生活の場としたいという希望」に対し、語り手は深い共感を抱くようになった。

¹⁴ 同注 13、p.19

¹⁵ 同注 13、p.20



当時の日本にはこのような「帝国青年」が珍しくなかったと語り手は述べる。実際、彼の周囲にも同様の志を持つ若者が数人おり、松原夫婦が台湾に到着した際には、彼らはいち早く松原と親交を結んだ。松原は語り手より十五、六歳年長であったが、流浪の生活の中で成熟した生活を送ることがなかったため、常に青年のような感性を保っていた。松原は、同様に流浪の中で出会った日本人女性と結婚しており、その妻もまた十二歳から海外生活を送ってきた人物であった。夫婦は常に行動を共にし、当時としては珍しい「夫婦連れ」での生活を実践していた。妻は西洋風の風俗を身につけ、乗馬や煙草、酒などを嗜む快活な女性として描かれ、松原と理想的な夫婦関係を築いていた。松原夫婦は長年の海外生活の影響で日本語に訛があったが、それでも「日本の言葉を忘れてはならない」¹⁶という意識から、日々言語の稽古に励んでいた。この描写を通して、帝国の周縁にいても「日本人」としての文化的帰属意識を保ち続けようとする松原夫婦の姿勢を示されており、海外の移民たちが懸命に「日本人」として認められたいという心理的葛藤が表現されている。

上述の場面には、語り手や仲間の青年たちがいかにして植民地台湾を「日本本土に代わる生活の場」として積極的に受容していたかを物語る。同時に、松原夫婦の描写を通じて、海外で生活した日本人には現地風俗や西洋風の文化を取り入れて生きていく多元的アイデンティティの在り方が浮き彫りにされている一方、「日本の言葉」「日本の生活様式」への執着を持ち続ける様子も窺える。とりわけ「日本語の稽古」という行為には、母語喪失に対する恐れと、帝国文化への忠誠心が表象されており、これは植民地における「内地人」の文化的優位性の再確認であると同時に、自身の「日本人性」を守るための行為でもあった。

¹⁶ 同注 13、p.21

2. 「主人」像

それでは、同じく「内地人」移民者としての語り手である主人像は作中にどのように描写されているのか。前述した通り、語り手は日清戦争の時通訳官となり、戦争終結後にも帰国せずに自ら志願して台湾への赴任を継続するという、極めて特異な人生を選択した人物である。このような経歴を背景として、松原に対して、語り手が深い共感を抱いたのは、極めて自然な成り行きであると言える。言い換えれば、起因が異なっているとはいえ、語り手は松原夫婦と同じ、海外移民の一員である。

もう一つ注目すべき点は、語り手の「蕃人」に対する姿勢である。

私は戦争がすんで、もう通訳官など必要でなくなると、蕃地を踏査してみたいといふ志を立てて、さう奥深くない場所はまだその時多少歩いてみてゐました。（さうです、その後約三十年近くの私の生涯の大部分は蕃山で暮らしたわけです）¹⁷

語り手は、日清戦争が終わった後、通訳官としての任務が不要となったため、自らの志で台湾の「蕃地」の踏査をすることを決意するようになり、その後約三十年にわたり、「蕃山」、すなわち「蕃人」の山地で人生の大半を送った。この告白は、語り手が単なる植民地官僚の枠を超えて、「帝国の周縁」である「蕃人」社会に自発的に関与し、長期間にわたって彼らと生活し、仕事を共にしてきた人物像を浮かび上がらせる。また、こうした生き方が語り手自身の人生観や世界観に多大な影響を与えたことも示唆されている。つまり、「蕃地」においての語り手の長期的滞在は、単なる「植民者としての調査」ではなく、「蕃人」との持続的な接触と相互関係を前提としたものである可能性を示唆しており、のちの場

¹⁷ 同注 13、p.21

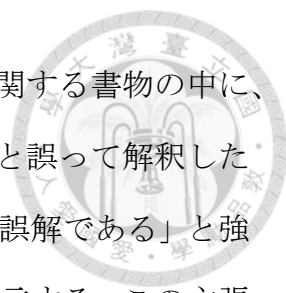
面における語り手の「蕃人」観や距離感の根拠として重要である。それに加えて、植民地政府と「蕃人」との間に衝突が生じた際の対応に関して、語り手は以下のように述べている。



一度その地方で蕃人が乱暴を働いた事があつた時、それを討伐してその代表者として頭目が台中の憲兵の手につかまへられて殺されやうとしてゐるのを、私が命乞いしてやつた事があつたのです。頭目を殺して見たところが、一時の見せしめにはなつても、永い目では決して好結果ではなし、又事件は別に組織的にやつたわけではなかつたのだから、何も頭目ひとりの責任でもなし、そんな無益な殺生をするよりは、寧ろ罰金の意味で何か彼等には重すぎる程の負担をかけてやつた方がよからう。さういふ方法が蕃人の習慣にも協ひ、従つてその意味が彼等にも納得しやすい上に、（中略）私は憲兵隊の知り合に自分の意見を述べて、（中略）頭目の命は今度だけ見逃すといふことに処致をしてもらつた事件がありました¹⁸。

引用から見ると、語り手は単に帝国の官僚として現地住民を取り締まる立場にあるだけでなく、彼自身も現地社会やその慣習に対して一定の理解と共感を示していたことが分かる。その上で、彼の判断は倫理的な人道主義に基づくものというよりも、支配の有効性と長期的統治の安定性を考慮した実利的判断であつたと捉えることができる。また、この場面において語り手は、「蕃人」に対して一方的な文明の指導者として振る舞うのではなく、相互の習慣を参照しつつ、植民地的懲罰を調整する媒介者的役割を果たしている。そのような行動からは、「内地人」である自身が「帝国の秩序と現地の論理」を両立させようとする位置にあるという自己意識が窺える。

¹⁸ 同注 13、p.22

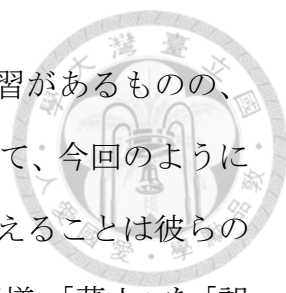


さらに、語り手は、あるアメリカ人によって著された台湾に関する書物の中に、「生蕃」が赤ん坊を与えようとした行為を、食用のためであると誤って解釈した記述があることを言及する。しかし語り手は、これを「全くの誤解である」と強く否定し、台湾の「蕃人」に食人の習慣は一切存在しないと断言する。この主張は、語り手が「蕃人」の風習や生活に長く接してきた経験から生まれたものであり、外部からのステレオタイプの視線に対する訂正的な言説である。同時に、それは語り手自身が自らを「現地を知る者」「誤解を正す媒介者」として位置づける表現でもある。

しかしある日、松原夫婦が山中の小屋で殺害された。その報告を受け、語り手をはじめとする人々は現場へ急行した。現場には、首が切断された松原とその妻の遺体が残されており、血まみれの室内には激しい暴力の痕跡があった。とりわけ、松原の首がベッドの上に置かれていたこと、妻も同様に殺害されていたこと、加えてトランクの錠が破られ、財物が奪われていたことが確認された。一見すると「蕃人」による襲撃のようにも思われたが、語り手は、その残虐な犯行の状況と略奪の痕跡から、これは「蕃人」ではなく「本島人」による犯行であると直感的に断定した。

蕃人の習慣について少しでも知識があればこれは直ぐわかる事です。一たい蕃人は一種の宗教的迷信で人の首は欲しがりはしますけれど、それは首が欲しいことが唯一の目的で、命をとることはそのための仕方のない犠牲と考へるので、もし出来ることなら彼等は命は残して首だけ持つて行くか知れないと思へるのです。それほど欲しい首を折角得ながら、途中で捨てて行くといふのは考へられない事であり、況んや、蕃人は殺人の序に財物を掠めたり、婦人を犯したりするやうな例は全く無い事なのです¹⁹。

¹⁹ 同注 13、p.24



語り手は、「蕃人」には「首狩り」という宗教的・儀礼的な慣習があるものの、それは「首を持ち帰る」ことに意味があると述べている。そして、今回のように首を途中で投棄することや、財物を盗むこと、婦女に危害を加えることは彼らの習慣や倫理観には全く合わないとは断言している。これまでと同様、「蕃人」を「誤解されている存在」として擁護する立場を維持している。特に、「蕃人には宗教的な理由から首を必要とするが、それ以外の目的での暴力や略奪は行わない」

「彼らは金品に興味を示さない」「落ちていた物すら拾わない」といった記述は、語り手が「蕃人」の習俗を熟知し、かつ尊重していることを強く印象づける。

ところで、語り手の話によると、「ごく近ごろ一度、男子の生殖器を切断し妊婦の腹を割いた例がありますが、それはごく最近に他国人の残忍を見習って覚えた仕方で、それにしても財物を盗むことはこれこそどうしても考へられないのです」²⁰ということもある。つまり語り手は、「生殖器切断」「妊婦の腹を割く」といった残虐な行為が「蕃人」本来の行動ではなく、「外的影響による逸脱」であり、彼らの「本質」ではないと主張することで、「蕃人」を部分的に擁護している姿勢が読み取れる。その点も前章で提起された M 氏の見解に呼応している。

以上のように、「日章旗の下に」における語り手は、「統治する者」としてのアイデンティティーを保ちつつも、その語りの内実においてはしばしば帝國的な視線から距離を取り、「蕃人」と共に生き、理解しようとするまなざしを示している。この語り手の存在は、当時の植民地台湾における「内地人アイデンティティー」の多層性を照らし出すものであり、また「支配する者」と「理解しようとする者」が同居する、帝国文学に特有の矛盾と葛藤を体現していると言えるであろう。

²⁰ 同注 13、p.24

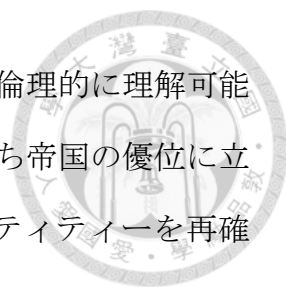
第5節 おわりに

本章では、佐藤春夫の「旅びと」と「日章旗の下に」を取り上げ、「内地人」のアイデンティティーがどのように描かれているのかを考察した。作品に登場する「内地人」は、日本本土から台湾へ渡った優位に立つ者という立場にありながら、実際にはその地位にふさわしい安定した自己認識を持っているとはいえない。むしろ、植民地という特異な場所に身を置くことで、不安や葛藤、あるいは孤立感を抱える存在として描かれている点が特徴的である。

「旅びと」では、台湾に移住したある女性が女中として登場した。彼女は内地への郷愁を抱きながらも、すでに帰る場所を失っており、台湾での不安定な生活に甘んじるしかできなかった。社会的にも性的にも下位の立場に置かれる彼女は、「声を持たない」存在として描かれ、「内地人」でありながら、日本にも台湾にも帰属感を持たずに植民地社会の中で微小化されていた。このような姿は、「内地人＝優位に立つ者」という単純な構図に収まらない、植民地台湾で複雑なアイデンティティーを持って生きていく人々の存在を示している。

一方、「日章旗の下に」に登場する松原や語り手は、台湾を「日本本土に代わる生活の場」として捉え、そこで新たな生活を築こうとした人物である。特に松原は、海外で差別や流浪を経験した末に「日の丸の旗の下で生きたい」と願い、日本の植民地である台湾を選ぶことにした。このようにして台湾に渡ってきた「内地人」は、帝国の理想を体現する「模範的な移民」として描かれたが、その存在もまた安定しているわけではない。長期間海外で差別視され、やっと植民地台湾で日本人として胸を張って生きられるようになったものの、松原夫婦が殺害された事件は、移民政策という理想の脆さや、移民者たち（植民地台湾における「内地人」）の辛さを現実には浮き彫りにしたと言えよう。

語り手は事件後、「犯人は蕃人ではなく、本島人（土賊）である」と断言したが、そこには「蕃人」を理解し共に生きようとする「内地人」としての自己像を



守りたいという強い意志が感じられる。つまり、「蕃人」を「倫理的に理解可能な存在」として語ることで、語り手は自分自身の立場、すなわち帝国の優位に立つ者でありながらも現地に深く関わる存在としてのアイデンティティーを再確認しようとしているのである。

このように見ると、佐藤の作品に描かれた「内地人」たちは、決して同様な「優位に立つ者」ではなく、それぞれが自分の生き方や立場に悩みながら、植民地という場に身を置いていることがわかる。ある者は帝国から見放されたような弱い立場で生き、ある者は理想を抱いて台湾に渡りながらも、その理想が打ち碎かれる経験をする。彼らは、植民地という周縁においてこそ、「内地人」としての自分の在り方を深く問い直す存在であったのである。

つまり、佐藤春夫の台湾ものに登場する「内地人」は、表面的な優位に立つ者ではなく、帝国の中心と周縁のはざままで揺れ動く、不安定で複雑な存在として描かれている。それは、当時の移民政策のもとで台湾に渡った「内地人」たちが、実際にはどのような葛藤や不安を抱えながら生きていたのかを照らし出すものであり、佐藤春夫が自分のフィクションを通して表現したいテーマとも言えよう。

結 論



本論文では、「アイデンティティー」という概念を軸に、日本統治時代の台湾を舞台とした佐藤春夫の文学作品における「内地人」、「本島人」、「蕃人」という三つの異なる民族に焦点を当て、その表現と構造を読み解くことを試みた。従来、佐藤春夫の台湾関係作品については、島田謹二に代表される「異国情緒の文学」として理解され、主に異国趣味やエキゾチシズムという美学的観点から論じられてきたが、本研究ではそうした美学的枠組みを一旦相対化し、帝国—植民地の力学のなかで揺れ動く各民族主体の「アイデンティティー」の形成と葛藤に注目し、以下のように結論づけている。

まず第一章では、「女誠扇綺譚」及び「殖民地の旅」を分析対象として、「本島人」のアイデンティティーに関する言説に着目して分析した。「女誠扇綺譚」では、台南の風景が「支那趣味」に満ちた「荒廃の美」として描かれている。作品の中では、その美意識をめぐって語り手と世外民の間に「荒廃」について明確な解釈のズレが生じている。「内地人」の語り手は荒廃を滅びと主張し、「亡びたもの」に美を見出す一方で、「本島人」の世外民は荒廃の中にまだ生きた精神が残っていると主張し、そこに失われた文化への郷愁や抵抗の情を託している。この対比から、「本島人」の語り手が台湾という所を単なるエキゾチックな対象ではなく、歴史の主体としての目覚め、すなわち〈台湾人〉としてのナショナリズムの萌芽を示していることが明らかになった。また、「本島人」の女性が「内地人」に嫁ぐことを拒むという記述も、単なる文化的違和感というよりは、明確な「自己」と「他者」を区別しようとする民族的意識の現れとして読むことができる。

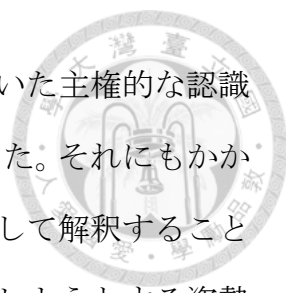
さらに、「殖民地の旅」において語り手が鹿港の街並みに感じる「支那」的風景は、まさに「本島人」の生活世界に残る清朝文化の名残を反映している。これは単なる風俗的記述にとどまらず、「支那人」としての過去と「本島人」として



の現在のはざまで、自らの存在をいかに定義づけるかという「本島人」の葛藤を象徴するものと考えられる。特に、語り手と台湾議会設置運動の中心人物・林献堂との対話を通じて明らかになったのは、「漸進的内地延長主義」に対する知識人の抵抗と、それによって駆動される〈台湾人〉としての新たな自己認識である。すなわち、「本島人」には、主に二つの異なるアイデンティティーが描写されたと窺える。一つは自分を「支那人」（清朝の人）としたアイデンティティーであり、もう一つは自らを「内地人」と区別するために生まれた〈台湾人〉とした、言わば自分が「日本人」と「支那人」（清朝の人）でもないアイデンティティーであると結論づけられる。

第二章では、「蕃人」のアイデンティティーを中心に、「日月潭に遊ぶ記」及び「霧社」における描写を通して、「蕃人」がいかに表象され、どのような文化的・政治的文脈に置かれていたのかを検討した。佐藤春夫の作品における「蕃人」は、一方では「野蛮の他者」としてのステレオタイプな視線に晒されながらも、他方では文化的混交や主体的な変容の過程を内包する複雑な存在として描かれている。例えば、「日月潭に遊ぶ記」に登場する若者は、伝統的な「蕃衣」の下に西洋式のシャツを着用しており、老区長は台湾語で語るという描写がなされている。これらの表象は、伝統と近代、土着と外来という二項対立を超えた混成的な文化状況を浮き彫りにするものであり、「蕃人」が決して静的な存在ではなく、むしろ植民地近代の中で絶えず変容し続ける動的な主体であることを示唆している。

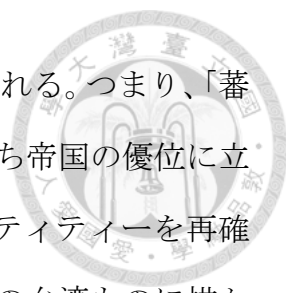
また「霧社」では、「蕃婦」テワスや梅毒に罹患した「蕃丁」など、従来の「未開で純粋な他者」というイメージに揺さぶりをかける人物たちが登場する。これらの描写は、近代的な疾病や文明の装いが「蕃人」の身体や生活に及んだ影響を浮かび上がらせ、帝国の文明化政策がいかにして「蕃人」の文化的主体性を変質させたかを描いている。同時に、「蕃人は自らを一国と考えている」という「生



蕃」に関する記述に見られるように、彼らが内在的に保持していた主権的な認識は、日本の一元的支配構造とは根本的に相容れないものであった。それにもかかわらず、語り手や M 氏はその暴力行為を「他国人の模倣」として解釈することで、「蕃人」の主体的な抵抗を外的影響によるものとして回収しようとする姿勢が見られる。このように、佐藤春夫によって描かれた「蕃人」像には、同情や敬意、恐怖、欲望、更に異化といった複雑で相反する感情が交錯している。その語りは「蕃人」のアイデンティティーが一面的に固定されるものではないことを示し、その不安定さや構築の過程を明らかにしたのである。

第三章では、「内地人」のアイデンティティーに焦点を当て、「旅びと」及び「日章旗の下に」を分析してきた。「内地人」とは、言うまでもなく帝国の中心から送り込まれた優位に立つ者であるが、佐藤春夫が描いた「内地人」たちは一様に安定した優位に立つ者ではなく、むしろ不安定な立場や内面の葛藤を抱える存在として描かれている。「旅びと」に登場する女中は、内地への郷愁を抱きつつも、帰還の道を閉ざされ、植民地に留まることを余儀なくされている存在である。彼女は「内地人」でありながら、階層的には植民地社会の周縁に位置づけられ、「声を持たない」存在として描かれている。ここで佐藤が表現したいのは、帝国の周縁にある植民地社会には、表面には現れにくい複雑なアイデンティティーを持つ人々が存在しているということである。彼らの姿は、「内地人＝優位に立つ者」という単純な構図では捉えきれない、より多層的で曖昧な立場を生きる主体の存在を浮かび上がらせている。

一方、「日章旗の下に」では、松原夫婦のように、帝国の理想を体現する「模範的移民」としての「内地人」が登場するが、その存在も安定しているわけではない。彼らは少なくとも日本帝国の周縁で日本人として生きようとしたが、その理想は土賊の襲撃によって脆くも崩れ去ってしまう。語り手は、犯人が「蕃人」ではなく「土賊」であると強調することで、「蕃人」を理解し共存しようとする



「内地人」としての自己像を守りたいという強い意志が感じられる。つまり、「蕃人」に対する理解を通じて、語り手は自分自身の立場、すなわち帝国の優位に立つ者でありながらも現地に深く関わる存在としてのアイデンティティを再確認しようとしているのである。このように考えると、佐藤春夫の台湾ものに描かれた「内地人」は、決して一枚岩の優位に立つ者ではなく、それぞれが異なる文脈の中で自らの「内地人」としての在り方を模索し、帝国の理想と現実の間で揺れ動く存在であったことが分かる。彼らもまた、植民地という周縁の空間においてアイデンティティを問い直される主体であった。

全体として、佐藤春夫の台湾ものにおける「内地人」、「本島人」、「蕃人」は、それぞれ特定の政治的・文化的文脈の中で異なる形でアイデンティティを形成しており、その形成過程には常に葛藤と揺らぎが伴っていた。これらのアイデンティティは、植民地という制度のもとで一方向的に決定されるものではなく、むしろその制度の矛盾や暴力によって逆に生成され、再解釈されていくものであった。

本論文は、佐藤春夫の台湾ものにおける各民族の「アイデンティティ」の表現を再検討することで、従来の「異国情緒」論に留まらない植民地文学の新たな読みを提示し、帝国と植民地のはざまで交錯する民族的主体たちの声なき声を拾い上げる試みであった。今後の課題としては、他の作家の台湾表象や、同時代の植民地文学との比較を通じて、より広範で横断的なアイデンティティの交錯と変容を明らかにしていくと考えられる。



テキスト及び参考文献

テキスト（年代順）

- 佐藤春夫(1998)『定本 佐藤春夫全集』第5巻、臨川書店
佐藤春夫(1998)『定本 佐藤春夫全集』第7巻、臨川書店
佐藤春夫(1999)『定本 佐藤春夫全集』第21巻、臨川書店
佐藤春夫(1999)『定本 佐藤春夫全集』第22巻、臨川書店
佐藤春夫(2000)『定本 佐藤春夫全集』第27巻、臨川書店
佐藤春夫(2021)『佐藤春夫中国見聞録 星/南方紀行』、中央公論

参考文献（年代順）

【日本語関係】

【単行本・叢書】

- 1、台湾総督府編(1922)『台湾人ノ台湾議會設置運動ト思想 後編』、台湾総督府
- 2、武内貞義(1927)『台湾』、新高堂書店
- 3、台湾議會期成同盟会編(1929)『台湾議會の設置運動』、台湾議會期成同盟会
- 4、藤崎濟之助(1930)『台湾の蕃族』、國史刊行會
- 5、本庄榮治郎(1930)『人口及人口問題』、日本評論社
- 6、謝春木(1931)『台湾人の要求』、台湾新民報社
- 7、尾崎秀樹(1971)『旧植民地文学の研究』、勁草書房
- 8、黒沢隆朝(1973)『台湾高砂族の音楽』、雄山閣
- 9、黄昭堂(1981)『台湾総督府』、教育社
- 10、佐藤文一(1988)『台湾原住種族の原始芸術研究』、南天書局
- 11、児玉正昭(1992)『日本移民史研究序説』、溪水社
- 12、島田謹二(1995)『華麗島文学志』、明治書院



- 1 3、河原功(1997)『台湾新文学の展開—日本文学との接点』、研文出版
- 1 4、矢内原忠雄(1997)『帝國主義下の台湾』、南天書局
- 1 5、藤井省三(1998)『台湾文学この百年』、東方書店
- 1 6、E.ゲルナー著・加藤節訳(2000)『民族とナショナリズム』、岩波書店
- 1 7、鄧相揚著・下村作太郎監修・魚住悦子訳(2001)『抗日霧社事件をめぐる人々
翻弄された台湾原住民の戦前、戦後』、日本機関紙出版センター
- 1 8、若林正文(2001)『台湾抗日運動史研究 増補版』、研文出版
- 1 9、若林正文(2001)『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』、ちくま新書
- 2 0、陳培豊(2001)『「同化」の同床異夢 日本統治下台湾の国語教育史再考』、三
元社
- 2 1、邱若山(2002)『佐藤春夫台湾旅行関係作品研究』、致良出版社
- 2 2、フェイ・阮・クリーマン(2007)『大日本帝国のクレオール——植民地期台
湾の日本語文学』、慶應義塾大学出版会
- 2 3、中西美貴(2008)『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』、不二出版
- 2 4、黄俊傑著・臼井進訳(2008)『台湾意識と台湾文化——台湾におけるアイデ
ンティティの歴史的変遷』、東方書店
- 2 5、塩川伸明(2008)『民族とネイション——ナショナリズムという難問』、岩波
書店
- 2 6、河原功(2009)『翻弄された台湾文学—検閲と抵抗の系譜』、研文出版
- 2 7、杉田聡編(2010)『福沢諭吉 朝鮮・中国・台湾論集—「国権拡張」「脱亜」
の果て』、明石書店
- 2 8、大東和重(2015)『台南文学 日本統治期台湾・台南の日本人作家群像』、関
西学院大学出版会
- 2 9、河野龍也(2019)『佐藤春夫と大正日本の感性——「物語」を超えて』、鼎書
房

- 30、植野弘子・上水流久彦編(2020)『帝国日本における越境・断絶・残像——人の移動』、風響社



【機関雑誌・論文】

- 1、(1921)「請願ノ要旨」『台湾青年』2:2(1921.2.26)
- 2、台湾雑誌社編(1923)『台湾』第4年第1号、台湾雑誌社
- 3、台湾雑誌社編(1923)『台湾』第4年第2号、台湾雑誌社
- 4、台湾雑誌社編(1923)『台湾』第4年第8号、台湾雑誌社
- 5、(1933)「第六四帝国議会衆議院請願委員会議録 第十回 昭和八年三月三日」
- 6、弘谷多喜夫・広川淑子(1973)「日本統治下の台湾・朝鮮における植民地教育政策の比較史的研究」『北海道大学教育学部紀要』第22号、北海道大学教育学部、p.19-p.92
- 7、蜂矢宣朗(1982)「『旅びと』覚書—佐藤春夫と台湾、続稿」『香椎潟』27、福岡女子国文学会、p.81-p.89
- 8、陳淑瑩(2008)「『蕃人公学校』と『蕃童教育所』との国語教科書にみる登場人物」『政大日本研究』5号、國立政治大學日本語文學系、p.65-p.86
- 9、阮文雅(2009)「南方憧憬の作品における他者—佐藤春夫「旅びと」と中村地平「蕃界の女」をめぐって—」『東吳日語教育學報』第32期、東吳大學日本語文學系、p.251-p.279
- 10、陶山宣明(2009)「アイルランドとケベックのナショナリズム比較」『The Journal of American and Canadian Studies アメリカ・カナダ研究』26号、Sophia University, Institute of American and Canadian Studies、p.107-p.115
- 11、黄翠娥(2010)「佐藤春夫の批判精神—日本統治時代の台湾ものを中心に—」『日本語日本文學』第35輯、輔仁外語學院日本語文學系、p.144-p.161
- 12、蔡維鋼(2011)「佐藤春夫と〈荒廢の美〉について—『田園の憂鬱』と『女

誠扇綺譚』をめぐって一」『成蹊国文』第 44 号、成蹊大学文学部日本文学科、p.128-p.142

- 1 3、張文聰(2020)「大日本帝国の〈包摂〉と〈排除〉：佐藤春夫の『日章旗の下に』をめぐって」『JunCture：超域的日本文化研究』第 11 号、『JunCture：超域的日本文化研究』編集委員会、p.108-p.122

【新聞・辞書・インターネット】

- 1、(1896)『台湾ニ施行スヘキ法令ニ関スル法律・御署名原本・明治二十九年・法律第六十三号』、国立公文書館デジタルアーカイブ、
<https://www.digital.archives.go.jp/file/153636.html>
- 2、橋爪健(1925)「旧さの中の新しさ 五月創作評」『読売新聞』、1925.5.7
- 3、山近弥壮(1972)『筑豊の民謡』、『筑豊の民謡』刊行会、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/12501367>
- 4、日本大百科全書（ニッポニカ）、JapanKnowledge、
<https://japanknowledge.com>
- 5、日本人名大辞典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com>
- 6、デジタル大辞泉、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com>、
- 7、国史大辞典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com>
- 8、岩波 世界人名大辞典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com>
- 9、日本国語大辞典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com>

【中国語関係】

【単行本・叢書】

- 1、張素玢(2001)《台灣的日本農業移民(1905-1945)：以官營移民為中心》、國史館
- 2、林國章(2004)《民族主義與台灣抗日運動(1895-1945)》、海峽學術
- 3、荊子馨著・鄭力軒訳(2006)《成為「日本人」：殖民地台灣與認同政治》、麥田出版

- 
- 4、何義麟(2011)《矢內原忠雄及其《帝國主義下之台灣》》、五南出版
 - 5、卞鳳奎(2016)《日治時期日人在臺灣移民之研究》、博揚文化
 - 6、朱惠足(2017)《帝國下的權力與親密：殖民地台灣小說中的種族關係》、麥田出版
 - 7、邱若山(2020)《文豪曾經來過：佐藤春夫與百年前的臺灣》、衛城出版
 - 8、鄭政誠(2021)《帝國殖民教育的逸出：日治臺灣教育發展論集》、秀威資訊科技股份有限公司

【英語關係】

【機關雜誌・論文】

- 1、Tierney, R. (2007). Ethnography, borders and violence: reading between the lines in Satō Haruo's *Demon Bird*. *Japan Forum*, 19(1), 89–110.